

新田橋本遺跡

ゆめタウン丸亀建設事業に伴う確認調査報告書

2009年3月

株式会社イズミ
丸亀市教育委員会

新田橋本遺跡

ゆめタウン丸亀建設事業に伴う確認調査報告書

2009年3月

株式会社イズミ
丸亀市教育委員会

序 文

本書は、平成18年度から平成19年度において新田町字橋本地区に所在する『新田橋本遺跡』内で計画された、ゆめタウン丸亀建設事業に伴い実施した確認調査報告書であります。

調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡の所在および概要を確認することができました。発見された遺構は、大半が溝であり、区域内一面に広がっていることが分かりました。遺跡の属する時代としては、弥生時代後期から古墳時代後期にかけてが密度が濃く、大型の溝には堰のような機能を持たせることによって計画的な配水を行えるような構造を取り入れていることも確認されました。

今回の調査区の西方及び南西一帯には、弥生時代を中心とした集落遺跡である『道下遺跡』や『中の池遺跡』が展開していることが確認されていることからも、今後の調査研究によって関連性を検討していくことによって、より地域の歴史が明確になっていくものと考えられます。それを考えると、今回の調査成果は、貴重な資料であります。

つきましては、本書が歴史研究・教育・文化財保護に関する様々な場面で活用されれば幸甚に存じます。

最後になりますが、調査にあたりご指導・ご助言をいただきました関係者、土地所有者ならびに一貫して調査にご協力いただきました株式会社イズミ様には深くお礼申し上げます。

平成21年3月31日

丸亀市教育委員会
教育長 岩根 新太郎

例　　言

1. 本書は、香川県丸亀市新田町で計画されたゆめタウン丸亀建設事業に伴い実施した新田橋本遺跡の確認調査報告書である。
2. 調査主体は、丸亀市教育委員会である。
3. 確認調査及び整理作業、報告書作成は、近藤武司（丸亀市教育委員会）が担当し、実施した。
4. 現地調査及び報告書作成に要する経費は、株式会社イズミ及び丸亀市教育委員会が負担し、整理作業に要する経費は、丸亀市教育委員会が負担した。
5. 遺構の実測は、近藤・谷口梢（丸亀市教育委員会）・北山多佳子（丸亀市教育委員会）・高畠裕（丸亀市教育委員会）が行った。
6. 遺構の写真撮影は、近藤・谷口が行った。
7. 遺物の接合は、谷口・平井佑典（丸亀市教育委員会）が行い、実測は、谷口・北山が行った。
8. 遺物の写真撮影は、近藤が行った。
9. 遺構実測図及び遺物実測図のトレースは、谷口・北山が行った。
10. 本書の執筆は、近藤・谷口・北山が分担して行い、編集は、近藤が行った。
11. 現地調査及び整理作業によって作成された原図・トレース図・写真データ及び出土遺物は、丸亀市教育委員会に収蔵・保管している。
12. 調査の実施にあたっては、株式会社村上組に多大なご協力を得た。ここに記して感謝の意を表する。
13. 本書を作成するにあたり、次の方々にご指導ご助言を得た。ここに記して感謝の意を表する。
佐藤亜聖（財団法人元興寺文化財研究所）、山元敏裕（高松市教育委員会）、渡邊誠（高松市教育委員会）、
高上拓（高松市教育委員会）、中村茂央（高松市教育委員会）、片桐孝浩（香川県教育委員会）、信里芳紀（香川県教育委員会）、西岡達哉（香川県埋蔵文化財センター）、北山健一郎（香川県埋蔵文化財センター）　順不同

凡　　例

1. 本書に所収している遺跡の名称は、新田橋本遺跡（しんでんばしもといせき）であり、略号はS H I - 0 6 K 1 である。
2. 調査区割りは、原形状を考慮し1～6区を設定し、調査中に7・8区を追加した。
3. 遺構には、調査区毎及び遺構種別毎に連番号を付している。遺構種別による分類記号は次のとおりである。

SD : 溝 SP : ピット（柱穴） SK : 土坑 SX : 不明土坑
4. 本書に使用した方位及び座標は、特に指定のない限り世界測地系に準拠する。
5. 本書の実測図の縮尺は、スケールで表示した。
6. 本書の土層断面図に記載した「土色」は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 2004年版』による。
7. 出土遺物実測図中で断面を黒塗りにしているものは、須恵器である。
8. 本書の挿図には、特に記載の無いものに限り、丸亀市が作成した丸亀市全図及び中讃広域都市計画図（平成17年8月）を加工し利用した。

本文目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第2章 調査に至る経緯と調査の経過	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の経過（発掘調査日誌抄）	7
第3章 遺構	9
第1節 第1調査区	9
第2節 第2調査区	11
第3節 第3調査区	11
第4節 第4調査区	21
第5節 第5調査区	35
第6節 第6調査区	39
第7節 第7調査区	42
第8節 第8調査区	44
第4章 遺物	47
第1節 第1調査区	47
第2節 第2調査区	47
第3節 第3調査区	47
第4節 第4調査区	49
第5節 第5調査区	55
第6節 第6調査区	55
第5章 まとめ	64
第1節 時代区分	65
第2節 遺跡の評価	68
第3節 まとめ	68
参考文献	71

挿図目次

第1図	新田橋本遺跡周辺旧流路域想定図	1
第2図	新田橋本遺跡周辺遺跡分布図	3
第3図	調査位置図	5
第4図	調査区位置図	6
第5図	第1調査区遺構平面図	9
第6図	第1調査区SD01断面図	10
第7図	第1調査区SD01・03断面図	11
第8図	第2調査区遺構平面・断面図	12
第9図	第3調査区遺構平面図	13
第10図	第3調査区断ち割りトレンチ北壁断面図	14
第11図	第3調査区SD01断面図	15
第12図	第3調査区SD02断面図	15
第13図	第3調査区SD02遺構平面拡大図	16
第14図	第3調査区SD02断ち割り断面図（1）	16
第15図	第3調査区SD02断ち割り断面図（2）	17
第16図	第3調査区SD03断面図	18
第17図	第3調査区SD04断面図	18
第18図	第3調査区SD05断面図	19
第19図	第3調査区SK01・02断面図	19
第20図	第3調査区SK03～06平面・断面図	20
第21図	第3調査区SK07～16平面・断面図	21
第22図	第4調査区第1遺構面平面図	22
第23図	第4調査区北・東壁断面図	23
第24図	第4調査区南・西壁断面図	25
第25図	第4調査区遺構断面図（1）	27
第26図	第4調査区遺構断面図（2）	28
第27図	第4調査区SD01・07断面図	29
第28図	第4調査区SD08断面図	29
第29図	第4調査区SD09断面図	29
第30図	第4調査区SD10・11断面図	30
第31図	第4調査区第2遺構面平面図	31
第32図	第4調査区遺構断ち割り断面図（1）	31
第33図	第4調査区遺構断ち割り断面図（2）	32
第34図	第4調査区SD19遺物出土状況平面図	32
第35図	第4調査区SD19断ち割り@～@断面図	33
第36図	第4調査区SD22・23断面図	34
第37図	第4調査区SD15（a～c）・SD19（d・e）ライン断面図	35
第38図	第5調査区遺構平面図	36
第39図	第5調査区SD01断面図	36
第40図	第5調査区SD02～04断面図	37
第41図	第5調査区SD05断面図	38
第42図	第5調査区SK01平面・断面図	39

第4 3 図	第6調査区遺構平面図	3 9
第4 4 図	第6調査区中央畦断面図	4 0
第4 5 図	第6調査区SD01断面図	4 0
第4 6 図	第6調査区SD02・03断面図	4 0
第4 7 図	第6調査区断ち割り①断面図	4 0
第4 8 図	第6調査区SD04・断ち割り②・③断面図	4 1
第4 9 図	第6調査区SD03・04遺物出土状況平面図	4 2
第5 0 図	第7調査区トレーンチ配置図	4 3
第5 1 図	第7調査区1トレーンチ断面図	4 3
第5 2 図	第7調査区2トレーンチ断面図	4 4
第5 3 図	第8調査区トレーンチ配置図	4 5
第5 4 図	第8調査区1・2・4トレーンチ断面図	4 6
第5 5 図	第1調査区SD01出土遺物実測図	4 7
第5 6 図	第3調査区SD02・05出土遺物実測図	4 8
第5 7 図	第4調査区SD08・09・17・18出土遺物実測図	5 0
第5 8 図	第4調査区SD18・19出土遺物実測図	5 1
第5 9 図	第4調査区SD19出土遺物実測図	5 2
第6 0 図	第4調査区SD20・SX01出土遺物実測図	5 4
第6 1 図	第5調査区SD02・05出土遺物実測図	5 5
第6 2 図	第6調査区SD02・03・04出土遺物実測図	5 7
第6 3 図	遺構変遷図（1）	6 9
第6 4 図	遺構変遷図（2）	7 0

表目次

第1表	土器観察表	5 8
第2表	玉製品観察表	6 3
第3表	遺構番号変換表	6 4

写真図版目次

図版 1	調査前風景 南西から	7 3
	第1調査区 重機掘削風景 南東から	7 3
	第1調査区 遺構検出状況 南西から	7 3
	第1調査区 トレーンチ全景 北東から	7 3
	第1調査区 SD01E-E'断面 西から	7 3
	第1調査区 SD01G-G'断面 南東から	7 3
	第2調査区 遺構検出状況 北東から	7 3
	第2調査区 全景 南東から	7 3

図版 2	第2調査区 S D 0 1 A-A' 断面 南から	7 4
	第2調査区 S D 0 1 D-D' 断面 南から	7 4
	第3調査区 遺構検出状況 北東から	7 4
	第3調査区 ヒレ状遺構検出状況 西から	7 4
	第3調査区 S D 0 2 断ち割り⑤断面 北から	7 4
	第3調査区 S D 0 2 I-I' 断面 南から	7 4
	第3調査区 S D 0 2 J-J' 断面 南から	7 4
	第3調査区 S D 0 3 R-R' 断面 南から	7 4
図版 3	第3調査区 S D 0 3 N-N' 断面 南から	7 5
	第3調査区 S D 0 5 V-V' 断面 南から	7 5
	第3調査区 S D 0 5 完掘状況 北から	7 5
	第3調査区 S D 0 5 X-X' 断面 南から	7 5
	第3調査区 S K 0 2 半段状況 東から	7 5
	第3調査区 S K 0 9 半裁状況 南から	7 5
	第3調査区 S D 0 1・0 2 完掘状況 北から	7 5
	第3調査区 全景 南から	7 5
図版 4	第4調査区 南壁断面 北から	7 6
	第4調査区 西壁断面 南から	7 6
	第4調査区 第1遺構面 S D 0 1 完掘状況 南から	7 6
	第4調査区 第1遺構面 S D 0 7・0 8 検出状況 北から	7 6
	第4調査区 第1遺構面 S D 0 8 E-E' 断面 南から	7 6
	第4調査区 第1遺構面 S D 0 8 完掘状況 南東から	7 6
	第4調査区 第1遺構面 S D 0 9 K-K' 断面 南から	7 6
	第4調査区 第1遺構面 S D 1 1 Q-Q' 断面 南から	7 6
図版 5	第4調査区 第1遺構面 S D 1 3・1 4 完掘状況 北から	7 7
	第4調査区 第2遺構面 検出状況 南から	7 7
	第4調査区 第2遺構面 検出状況 南東から	7 7
	第4調査区 断ち割り②S-S' 断面 西から	7 7
	第4調査区 断ち割り④U-U' 断面 東から	7 7
	第4調査区 断ち割り④U-U' 断面 南側 東から	7 7
	第4調査区 第2遺構面 S D 1 9 E-E' 断面 西から	7 7
	第4調査区 第2遺構面 S D 2 2 完掘状況 南から	7 7
	第4調査区 第2遺構面 S D 2 0 H-H' 断面 西から	7 8
図版 6	第4調査区 第2遺構面 S D 2 0 I-I' 断面 南から	7 8
	第4調査区 第2遺構面 S D 1 9 遺物出土状況 北から	7 8
	第4調査区 第2遺構面 断ち割り⑩遺物出土状況 西から	7 8
	第4調査区 第2遺構面 S D 1 7 北壁断面 南から	7 8
	第4調査区 第2遺構面 S D 2 4・2 5 完掘状況 北東から	7 8
	第4調査区 第2遺構面 完掘状況 南西から	7 8
	第4調査区 第2遺構面 完掘状況 北から	7 8
	第4調査区 実測風景 北から	7 9
図版 7	第5調査区 S D 0 1・0 2 検出状況 南から	7 9
	第5調査区 S D 0 1 A-A' 断面 南から	7 9
	第5調査区 S D 0 2 G-G' 断面 南から	7 9
	第5調査区 遺構検出状況 東から	7 9
	第5調査区 S D 0 5 L-L' 断面 南から	7 9

	第5調査区 S D 0 5 M-M'断面 南から	7 9
	第5調査区 S D 0 5 N-N'断面 北から	7 9
図版8	第5調査区 S D 0 5 遺物出土状況 南から	8 0
	第5調査区 S D 0 5 完掘状況 北から	8 0
	第5調査区 S D 0 5 完掘状況 北から	8 0
	第5調査区 S K 0 1 断面 南から	8 0
	第6調査区 S D 0 1 検出状況 西から	8 0
	第6調査区 S D 0 1 B-B'断面 南から	8 0
	第6調査区 S D 0 2 -0 3 検出状況 南西から	8 0
	第6調査区 S D 0 2 D-D'断面 南から	8 0
図版9	第6調査区 S D 0 3 F-F'断面 南から	8 1
	中央畦遺物出土状況 南から	8 1
	完掘状況 東から	8 1
	完掘状況 北から	8 1
	第7調査区 1トレンチS D 0 1 完掘状況 南から	8 1
	第7調査区 2トレンチ完掘状況 東から	8 1
図版10	第7調査区 1トレンチS D 0 1 断面 西から	8 2
	第7調査区 2トレンチ遺構検出状況 南東から	8 2
	第7調査区 2トレンチS D 0 1 断面 北から	8 2
	第8調査区 1トレンチ遺構検出状況 北西から	8 2
	第8調査区 1トレンチS D 0 1 断面 東から	8 2
	第8調査区 2トレンチ遺構検出状況 北から	8 2
	第8調査区 2トレンチS D 0 1 断面 北から	8 2
	第8調査区 4トレンチ遺構検出状況 北から	8 2
図版11	第1・3調査区出土遺物	8 3
図版12	第3・4調査区出土遺物	8 4
図版13	第4調査区出土遺物	8 5
図版14	第4調査区出土遺物	8 6
図版15	第4調査区出土遺物	8 7
図版16	第4調査区出土遺物	8 8
図版17	第4調査区出土遺物	8 9
図版18	第4調査区出土遺物	9 0
図版19	第4調査区出土遺物	9 1
図版20	第4・5調査区出土遺物	9 2
図版21	第5・6調査区出土遺物	9 3
図版22	第6調査区出土遺物	9 4
図版23	第6調査区出土遺物	9 5
図版24	第6調査区出土遺物	9 6

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

丸亀市は、平成17年3月22日に丸亀市・綾歌町・飯山町が合併して誕生した。香川県の西半部の海岸沿い、ほぼ中央に位置する。市域は、丸亀平野の大半を占める。

丸亀平野には、南部の山間部から北部の瀬戸内海に注ぎ込んでいる東部の大東川、中央部東寄りの土器川（1級河川）、中央部西寄りの金倉川、西部の弘田川があり、これらの河川の氾濫・堆積により形成された県下最大級の沖積平野である。新田橋本遺跡の西面には、整備以前の西汐入川の痕跡が残っている。

地形の起伏状況や地割りから付近の旧地形を検討すると、金倉川の支流であると考えられる竜川、西汐入川などの旧流路や低地帯が広がり瀬戸内海に注ぎ込む直前地域にあたることがわかる。このことからも生活拠点等の開発には不適な地域であったことが予想される。旧海岸線は、新田橋本遺跡から1.2kmほど北方まで接近している。

この付近は、先に述べた河川に挟まれるように微高地が形成されており南に進むに連れてより安定する。



第1図 新田橋本遺跡周辺旧流域想定図(S=1:20,000)

第2節 歴史的環境

新田橋本遺跡は、丸亀平野の東西に対してはほぼ中央、南北に対しては北限部に位置する集落遺跡である。新田橋本遺跡より北部地域においては、現在までに集落遺跡は見つかっていない。

南西部及び丸亀平野南部地域ではまとまった集落遺跡が確認されている。

ここでは、新田橋本遺跡の位置する丸亀平野について概観する。

丸亀平野の歴史は旧石器時代に遡ることがわかっている。平野中央部を東西に横断する四国横断自動車道建設に伴う発掘調査で三条黒島遺跡から旧石器時代の角錐状石器・削器等の石器が出土している。また、那家田代遺跡からはナイフ形石器・スクレイバーなどの石器類が出土している。

平野東部では、飯野山東の久保遺跡、城山山麓の割古池（遺跡）や奥池（遺跡）、城山南麓遺跡が旧石器として知られている。平野南部の岡田台地先端の谷部分では、大庭池遺跡や仁池遺跡等が知られている。

縄文時代になると、郡家原遺跡と郡家一里塙遺跡から草創期の有茎尖頭器が出土している。その後しばらく空白期が続いた後、縄文時代後期の土器が平池南遺跡の自然河川から出土している。縄文時代後期としては、平池南遺跡で土坑を検出し、石器や木製品が出土している。平池西遺跡の自然河川からも土器が出土している。また、丸亀平野南部の行末西遺跡、佐古川遺跡から晩期の土器が出土している。佐古川遺跡では同時期の掘立柱建物跡も検出している。

弥生時代では、新田橋本遺跡の西に隣接する道下遺跡とその南部に続く中の池遺跡、平池西遺跡、平池南遺跡、平池東遺跡でまとまった前期後半の集落跡が確認されている。特に中の池遺跡は、幾重もの環濠を備えるもので注目されている。前期集落としては、丸亀平野南部でも行末遺跡、行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡、池下遺跡、池内遺跡と比較的まとまった地域で確認されている。佐古川・窪田遺跡では、円形周溝墓や方形腰溝墓の40基にのぼる群集城が確認されており注目を浴びている。

平野東部では、下川津遺跡で集落跡が確認されている。竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡などが検出されており、併せて多層の土器が出土している。佐古川遺跡、行末西遺跡、佐古川・窪田遺跡は後期及び古墳時代初頭にかけての複合遺跡となる。

弥生時代中期には、駿河山字蘆や南部の白間部など高地性集落へと移行しており、平野部全域で遺跡密度が極端に薄くなる。平野部に限定すると、唯一、旧被兵場遺跡で集落の造営が確認できるのみである。

弥生時代後期になると、前期集落の分布区域に対応するように、集落が再生されているが、若干生活区域の変動が見られる。金倉川に程近い中の池遺跡では集落の再生は見られない。生活区域の変動により、平野北部では新田橋本遺跡、平野中央部で郡家原遺跡、三条番ノ原遺跡など新たに集落が營まれるようになる。平野南部では、前述した佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡、行末西遺跡で後期集落の造営が確認されている。

また、南部の抵丘陵上に後期末～終末期頃に築造された平尾2号墓、平尾3号墓、石塚山3号墳、石塚山4号墳などが墳丘墓として乗かれており、付近の集落での権力者の出現を示す資料として注目される。

古墳時代に入ると、初頭期には弥生後期集落が継続される。後期になると、郡家原遺跡や郡家一里塙遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出されている。しかしながら、丸亀平野全域で古墳時代に属する集落の確認はあまりされておらず不明な部分が多いが、古墳の分布状況を併せて考えると、弥生時代の分布よりは、より内陸部に展開していることが考えられる。

古墳の分布を見ると、平野南部地域での活発な造墓活動が見られ、その出現は弥生時代前期後半にまで遡ることになる。弥生時代前期後半～中期にかけて、丘陵の裾近くに立地した周溝墓群が存在する佐古川・窪田遺跡に始まりがみられる。中期では確認される遺跡は少ないが、弥生時代後期に入ると、人々の生活力が向上・安定し、集落から地域社会へと改進されはじめ、前方後円形の墳丘墓を形成している平尾墳墓群や石塚山古墳群などのように集団墓から特定首長墓への変化が伺える。

続く古墳時代前期では、全国的に有力者の埋葬に大型の古墳造りを行うという様式が確立されるようになる。このような背景の中、香川県内においても同様の埋葬様式が広まっているが、前方後円墳の築造形態に他地域との差異が見られる。これを謾岐型前方後円墳と称し、畿内型前方後円墳と比較してみると、丘陵上に古墳を築くことや、前方部を山頂側、後円部を平野側に向けること、前方部が柄鏡状に細く延び、先端部が櫻型に開くなどの特徴を持つ。

丸亀平野東方の横山山塊では、前方後円墳を含む積石塚である横山経塚古墳群や横峰古墳群、前方後円墳である奥川内古墳群、陣の丸古墳群が築造されている。この山塊最南端の丘陵上には全長約100mを測る前



- 1 新田橋本遺跡(弥生・後~古墳・後)
- 2 通下遺跡(弥生・近世)
- 3 中津兵庫遺跡(弥生・古墳)
- 4 中津中原遺跡(弥生・中世~近世)
- 5 津森位遺跡(弥生・古代・中世)
- 6 中の池遺跡(弥生・前)
- 7 平池西遺跡(縄文・弥生)
- 8 平池南遺跡(縄文・弥生)
- 9 平池南遺跡(弥生)
- 10 田村廻塚(古代)
- 11 丸亀城跡(近世)
- 12 田村池遺跡(弥生・古代)
- 13 貝ノ山古墳群(古墳・後)
- 14 吉同神社前方後円墳(古墳・前)
- 15 下川津遺跡(弥生・前~中世)
- 16 水井遺跡(縄文・近世)
- 17 稲木遺跡(縄文・近世)
- 18 金蔵寺下所遺跡(古代)
- 19 鹿川五条遺跡(弥生)
- 20 三条塚・原遺跡(弥生・中世)
- 21 三条高島遺跡(旧石器・弥生)
- 22 三条中村遺跡(弥生・古代・中世)
- 23 郡原遺跡(弥生・古代)
- 24 郡原大林上遺跡(古代~近世)
- 25 郡原代道跡(旧石器~古代)
- 26 郡原北原遺跡(古墳・前~近世)
- 27 月形山・多ノ遺跡(縄文~近世)
- 28 川原山・土手ノ遺跡(古代~近世)
- 29 川原山・院治屋遺跡(旧石器・近世)
- 30 飯野原二瓦遺跡(古代~中世)
- 31 飯野原分山崎南古墳(古墳)
- 32 飯野山西麓散石地(弥生~古代)
- 33 西坂元内板遺跡(弥生・中~中世)
- 34 綾野山頂遺跡(弥生)
- 35 西又遺跡(弥生)
- 36 川津一ノ又遺跡(弥生~中世)
- 37 川津東山田遺跡(旧石器~中世)
- 38 川津西山遺跡(弥生・中世)
- 39 東坂第三・池遺跡(古代~中世)
- 40 東坂方北・北門遺跡(弥生)
- 41 東坂八秋常道跡(弥生)
- 42 久保大坪古墳(古墳)
- 43 橋瀬古墳(古墳)
- 44 城山古墳群(古墳・前~中)
- 45 城山古石碑群(古墳・前)
- 46 佐久乃古石碑群(古墳・前)
- 47 法皇古墳(古墳)
- 48 石高遺跡(中世)
- 49 旗峰遺跡(古墳)
- 50 五幡古跡(古墳)
- 51 旧練兵場遺跡(弥生・中~中世)
- 52 香寺横内(中世)
- 53 木炒見遺跡(弥生・古代・中世)
- 54 法勧寺跡(古代)
- 55 門脇方墳(古墳・中)
- 56 竜家原(古墳・前)
- 57 道原遺跡(弥生)
- 58 司馬遺跡(弥生・中世)
- 59 大瀬遺跡(弥生・中~後)
- 60 佐野遺跡(弥生・中~後)
- 61 天王古墳(古墳・前)
- 62 行天古墳(縄文・夷~古墳・前)
- 63 丹木遺跡(弥生・前)
- 64 佐古山・庄田遺跡(弥生・前~古墳・前)
- 65 石塚古墳群(弥生・宋~中世)
- 66 佐古川遺跡(縄文~中世)
- 67 平尾根墓群(弥生・後~古墳・前)

第2図 新田橋本遺跡周辺遺跡分布図(S=1:80,000)

方後円墳である快天山古墳が築造される。中心部にある3基の剥抜式削竹形石棺からは獸扁方格規矩四神鏡、武器類、玉類、工具類などが出土した。また、西部の岡田台地上には車塚古墳が築かれている。さらに北方の飯野山東裾には小規模前方後円墳の三の池古墳、平野北東隅の青ノ山南西裾より南に延びた丘陵先端部には、吉岡神社前方後円墳が築造されている。後円部に竪穴式石室が築かれ、副葬品として銅鏡、鉄鎌、刀子、管玉、勾玉、壺形土器が出土している。

古墳時代中期～後期では、平野東部の羽床盆地縁辺部と岡田台地に集中し、前期で展開されていた横山山塊や南部の丘陵地では希薄になる。車塚古墳の築造された岡田台地上に岡田万塚古墳群が形成され、記録によると、かつては80基ほどの古墳が所在していたようである。東方の山麓部では地神山古墳群、円筒埴輪を伴い古式の須恵器が供献された城山古墳群が築造されている。

古墳時代後期後半には横穴式石室の導入に伴い古墳数も増加し、群集墳の形成が顕著にみられる。青ノ山山塊の青ノ山古墳群は宇多津町側にも分布し、中でも青ノ山6号墳からは、須恵器、土師器、大刀、馬具、玉類など豊富な副葬品が出土している。この青ノ山山塊の斜面には6世紀～7世紀にかけての須恵器を生産していた窯跡も確認できる。飯野山西麓では飯野山古墳群において、横穴式石室を持つ3基の円墳が発掘調査され、須恵器、耳環、刀子、鉄鎌、玉類が出土している。前期に多く分布が見られた平野南部の丘陵地帯に再び中小円墳が多く築かれるようになり、大型の横穴式石室を内部主体とする宇閉神社古墳、畦田1号墳、津森穴薬師古墳などが築かれる。新田橋本遺跡でも少量ではあるが古墳時代後期の須恵器が出土している。

古代に入り、律令国家体制が整い丸亀平野は那珂郡と鶴足郡に包括されるようになる。古代の遺跡としては、四国横断自動車道に伴う発掘調査で、丸亀平野中央部に掘立柱建物跡を多く検出し、墨書き土器、縁結陶器、斎串を出土している郡家原遺跡、縁結陶器、灰釉陶器を多量に出土している郡家一里屋遺跡など官衙関連遺跡が発見されている。しかし、一般の集落の展開は不明である。

また、生産の効率を上げるための条里型地割は丸亀平野において8世紀中頃には成立していたものと考えられる。この条里型地割は、現在においても良好に確認できる区域が多く残されている。条里制を反映するものと考えられる遺構は、郡家原遺跡、郡家一里屋遺跡、郡家大林上遺跡、郡家田代遺跡、川西北・鍛冶屋遺跡で検出している。

そして、条里制と共に官道（南海道）や駅家、官衙、寺院などの諸施設が整えられ、丸亀平野では田村庵寺、宝幢寺跡、法勧寺跡などの古代寺院が確認できる。田村庵寺は、白鳳期に建立されたことが確認され、隣接する田村遺跡では平安時代後期の梵鐘を鋳造した遺構を検出しており、田村庵寺の平安時代段階の北側と西側の寺域を画すると考えられる築地堀と側溝を検出している。宝幢寺跡では宝幢寺池の中に塔の心礎が残っており、法勧寺跡では現在も礎石が見られるが、元位置からは大きく動いている。

中世以降では、条里型地割に沿って土地の開発が行われるようになり、丸亀平野北部でも田村遺跡、道下遺跡において中世の溝状遺構を検出しておらず、土地開発が行われていたことがわかる。平野中央部では、郡家原遺跡、川西北・七条Ⅱ遺跡、川西北・鍛冶屋遺跡で掘立柱建物跡を有する集落が展開しており、それに併せ有力者と呼ばれる人たちが巨館を構え、村を治めるようになる。平野部には飯山北土居遺跡、中津城跡、田村城などの平地城館が整えられる。山間部では山城が整備され、中でも平野南側の城山山頂付近に展開する西長尾城は応安元年（1368）に長尾大隅守元高が初代城主となって依頼、天正13年（1585）の豊臣秀吉の四国征伐に屈するまでの間、中讚の拠点として活躍した。それらを合わせて50ヶ所ほど確認されており、それらを中世城館と呼んでいる。

近世においては、現在も丸亀市のシンボルである丸亀城は、慶長2年（1597）に高松城主生駒親正により築城されたが、元和元年（1615）に一国一城令により廃城となつた。そして、寛永19年（1642）に西讃岐を領していた山崎家治が丸亀城の築城に再度着手した。しかし、山崎家が絶家してしまい、万治元年（1658）に播磨国の京極高和が西讃岐の領主となり再度城の整備に着手し、明治の廢藩まで京極氏は続いた。

現在の丸亀市中心部は、丸亀城の城下町として栄える。北面の大手町付近では、発掘調査が行われ当時の状況が判明しつつある。

瀬戸内海に面する丸亀湊は、江戸時代後期に金毘羅参詣の入港地として栄え、福島塙甫、新堀塙甫などの港が整備される。丸亀湊から金毘羅への道は、距離が短く平野部を通るため大坂・江戸・西国からの参詣客が多くかった。これにより、金毘羅宮は、漁業や海運業者の守り神として益々強く信仰されるようになる。

第2章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

丸亀市新田町字橋本地内において、『ゆめタウン丸亀』の建設計画が成されたことにより、株式会社イズミから丸亀市教育委員会に対して平成18年10月18日付けで「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて（照会）」の照会文書が提出された。

その時点までにおいて、丸亀市新田町字橋本地内における埋蔵文化財の分布状況確認調査は多く実施されておらず、不明瞭な部分が多い状況であった。付近の方からの聞き取りによると「地名のとおり新田であるので近代の新田開発によって開けた土地であり、それ以前の遺跡は存在しないであろう」との事であった。

計画地の北縁には、県道多度津丸亀線が建設中であるが、当時の分布確認調査時にも遺跡は見つかっていなかった。

しかしながら、計画地の西側には『道下遺跡（弥生～近世：包含地）』や『中の池遺跡（弥生：集落）』が金倉川までの約1kmの間に分布していることや、東部においても『津森森遺跡（古代～中世：集落跡）』や『今津中原遺跡（古代～中世：集落跡）』が確認されていることからも遺跡が分布している可能性が高いと判断し、試掘調査を実施した。試掘調査は平成18年10月30日から11月2日にかけて実施した。調査対象地は、今後の計画で建物等により掘削を行う予定のある範囲に限定した。

調査の結果、計画地の西半部において、遺跡の所在を確認することができた。遺構内容としては、南方から北方に向う構状の落ちの連続で、埋土からは弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての所産と思われる土器片が出土している。

この調査成果を基に、香川県教育委員会文化財保護部局と協議した結果、遺構の検出した区域を『新田橋本遺跡（弥生・古墳：集落跡）』と取り扱うこととなった。

この結果を、速やかに株式会社イズミに回答した。

以後、丸亀市教育委員会と株式会社イズミで協議を進めた。事業者としては、工事計画が決定次第工事に着手したという意向があったことから、掘削を受ける可能性のある範囲について、事前に調査を進める方法を検討することとした。結果、周知の埋蔵文化財包蔵地となった区域全域について、確認調査を実施することとした。

調査対象地は、丸亀市新田町字橋本143番1、144番1、145番、146番、149番、185番で対象地面積



第3図 調査位置図 (S=1:5,000)

は約 6,388 m²である。

調査対象地が広大であり、区分けをして調査を進めることができると判断したことから区分けを行った。区分けは、現況地割に準じて 1~6 区を設定して調査を進めた。

更に調査中に遺構が区域外へ展開することが確認されたため、内容を確認するために 7、8 区を追加設定した。



第4図 調査区位置図

調査体制は、以下のとおりである。

丸亀市教育委員会（2006（平成18）年度）

教育長	岩根 新太郎
文化部長	三好 守
文化部文化課長	山田 哲也
文化部文化課主幹	秋山 徹
文化部文化課副課長	宮浦 敬子
文化部文化課文化財保護担当長	葛西 祥志
文化部文化課主査	東 信男
文化部文化課主任	近藤 武司 ☆

文化部文化課非常勤	谷口 梢 ☆
文化部文化課非常勤	北山 多佳子 ☆
文化部文化課非常勤	高畠 裕 ☆

(☆ 調査担当)

丸亀市教育委員会 (2007 (平成 19) 年度)

教育長	岩根 新太郎
文化部長	多田 哲夫
文化部文化課長	山田 哲也
文化部文化課主幹	秋山 徹
文化部文化課副課長	宮浦 敏子
文化部文化課文化財保護担当長	葛西 祥志
文化部文化課主査	東 信男
文化部文化課主査	近藤 武司 ★
文化部文化課非常勤	谷口 梢 ★
文化部文化課非常勤	北山 多佳子 ★
文化部文化課非常勤	高畠 裕 (～9月 30 日) ★
文化部文化課非常勤	平井 佑典 (11月 1 日～) ★ (★ 整理作業担当)

丸亀市教育委員会 (2008 (平成 20) 年度)

教育長	岩根 新太郎
教育部長	多田 哲夫
教育部文化課長	藤田 秀光
教育部文化課主幹	秋山 徹
教育部文化課副課長	矢野 浩三
教育部文化課文化財保護担当長	澤井 千恵子
教育部文化課主査	東 信男
教育部文化課主査	近藤 武司 ★
教育部文化課非常勤	谷口 梢 ★
教育部文化課非常勤	北山 多佳子 ★
教育部文化課非常勤	宮西 真由美 (～10月 31 日)
教育部文化課非常勤	鎌谷 周子 (11月 17 日～) ★ (★ 整理作業担当)

確認調査における現地作業には社団法人丸亀市シルバー人材センター及び地元有志の参加を得た。現地作業の参加者は、以下のとおりである。

村尾俊之、宮本忠夫、久門紀美代、高橋昇、前川豊、額富昭博、岡田進、窪田静夫、高木裕子、高篠英治、浜辺豊、松浦一二男、白石勝芳、東寛治、井沢ミツ子、亀井トヨ子、尾藤元典、三好敏香、長谷川明、長谷川信子（顔不問）

また、重機掘削及び測量の一部については、株式会社村上組の協力を得た。

第2節 調査の経過（発掘調査日誌抄）

平成 18 年

- 11月 27 日 (月) 晴れ 地権者協議。1区、2区表土掘削。
 28 日 (火) 晴れ ブレハブ設置。3区表土掘削。1区 SD01 検出、掘り下げ、平板図作成。
 29 日 (水) 晴れ のち曇り 2区 SD01 検出、掘り下げ。土層図面作成。
 30 日 (木) 晴れ 3区南半分遺構面検出。SD01 完掘。土層図面作成。
- 12月 1 日 (金) 曇り 写真撮影。遺構平面図作成。北半分遺構面検出。
 4 日 (月) 晴れ 3区南側平面図作成。6区遺構面検出し、掘り下げる。
 5 日 (火) 晴れ 6区平面・土層図面作成。
 6 日 (水) 晴れ 5区測量杭設置、重機掘削開始、精査。

7日(木) 雨 6区 SD02 完掘。遺物取上げ、図面・写真終了。
 8日(金) 雨 5区、6区雨水汲み出し作業。
 11日(月) 晴れ 6区調査終了。
 12日(火) 曇り 5区 SD01 完掘。図面・写真終了。
 13日(水) 雨 5区 SD02 から 04 完掘。図面・写真終了。
 14日(木) 雨 5区 SD05、重機と人力により掘り下げ。
 15日(金) 晴れ 土層図面作成。
 16日(土) 晴れ 畦取外し。平面図面作成、写真終了。
 18日(月) 晴れ 5区調査終了。埋め戻し開始。
 19日(火) 晴れ 3区 SD03 にトレーナーを設定し掘削。北側掘り下げ。
 20日(水) 晴れ SD03 トレーナー土層図面作成。
 21日(木) 曇り 3区 北側平面図面作成
 22日(金) 晴れ 3区 第1 遺構面終了。
 25日(月) 晴れ 3区 SD02 重機により掘削。畦土層図面作成。
 26日(火) 雨 SD02 写真終了。SD05 完掘。
 27日(水) 曇りのち晴れ SD05 図面・写真終了。SK 半裁。
 28日(木) 曇りのち晴れ SD01、02 完掘。
 29日(金) 晴れ 3区 第2 遺構面平面図面作成。4区重機掘削開始。

平成19年

1月 4日(木) 晴れのち曇り 4区 第1 遺構面精査。
 5日(金) 晴れ トレーナーを設定し精査。平面図面作成。
 6日(土) 晴れ トレーナー図面・写真終了。
 8日(月) 曇り 遺構面検出。
 9日(火) 晴れ 4区 SD08 完掘。図面・写真終了。
 10日(水) 晴れ 4区 SD09 掘り下げ。
 11日(木) 晴れ SD09 畦土層図面作成。
 12日(金) 晴れ SD09、10 完掘。第1 遺構面終了。
 13日(土) 晴れ 4区 第2 遺構面精査。
 15日(月) 晴れ SD22 掘り下げ。土層図面作成。
 16日(火) 曇りのち雨 SD19、20 畦を設定し掘り下げ。
 17日(水) 雨のち曇り 平面図面作成。3区埋め戻し。
 18日(木) 曇りのち晴れ 畦土層図面作成。SD19 掘り下げ。
 19日(金) 晴れ SD20 掘り下げ。遺物出土。写真終了。
 20日(土) 晴れ SD17 重機により掘削。SD18、25 掘り下げ。遺物出土。
 22日(月) 晴れのち曇り 4区掘削終了。清掃作業。
 23日(火) 晴れ 4区全体写真終了。7、8区において4区 SD24 の確認のためトレーナーを設定。
 24日(水) 曙りのち晴れ 8区において4区 SD08 の確認のためトレーナーを設定。4区図面終了。6区埋め戻し。
 25日(木) 晴れ 7、8区トレーナー図面・写真終了。資材撤収。全調査を終了。
 26日(金) 晴れ 4区埋め戻し。



調査参加者

第3章 遺構

第1節 第1調査区

第1調査区は、新田橋本遺跡において南端に位置する。標高は6.580mである。

耕作土直下に遺構面が残存しており、南北からやや東に屈曲しながら直線的に北にむかって流れ大型の溝1条(SD01)を確認した。第5図遺構平面図にSD01の中央部分にもう一つ細い溝が流れているように表現しているものは、検出段階で埋土に明らかな差異が見られた黒褐色粘質土層を測量したものである。

遺構検出時に平面的に土色の違いを確認し、断面層序でSD01に切られて東側にあるSD02を確認した。そしてSD01を東側から切り込む細い溝SD03を検出した。

SD01

第1調査区の南端から北端まで全長約32mの溝である。

調査区の東部及び南東部分は、近・現代の粘土採取によって広範囲に削平を受けており、マーブル状の土によって埋め戻されていた。SD01はこの搅乱によって東肩部に影響を受けている。SD01検出時の幅は2~3mを測るが、北側東部および屈曲した部分の搅乱による影響の比較的少ない部分や影響を受けていない部分から推測すると、幅はほぼ一定の2~3mであることが推測される。

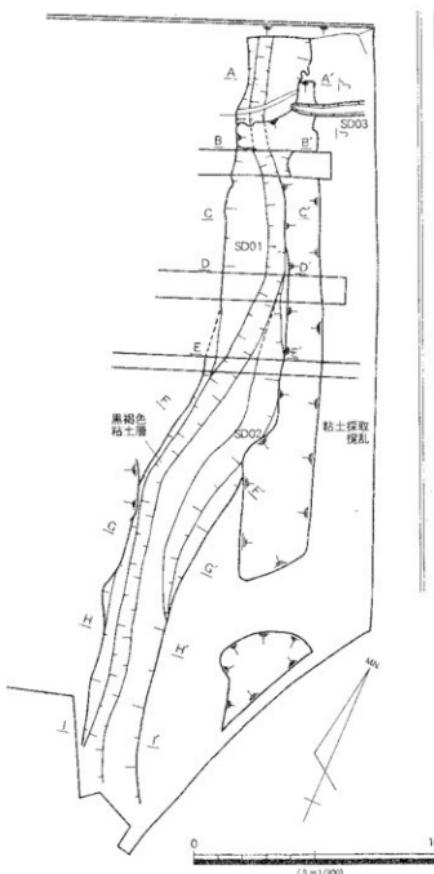
調査区の中央部分では、SD01は若干東に屈曲し溝の幅も0.5mほど膨らんでいる。

約3m間隔毎に幅約1.0mのトレンチを設定し断面観察を行い、それぞれ断面図を作成し、第6・7図に掲載した。

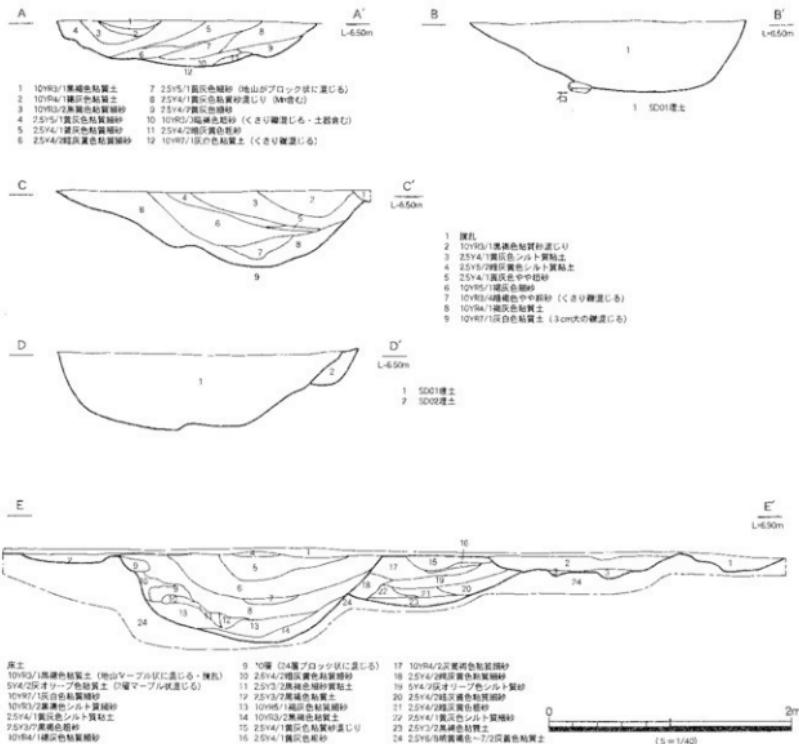
深さは、北端のA-A'付近が一番高く標高6.140mである。SD01の底レベルは、地形に反し、南に向かって下っており、溝の中央部分E-E'において標高5.860mと最も深い測量結果となった。

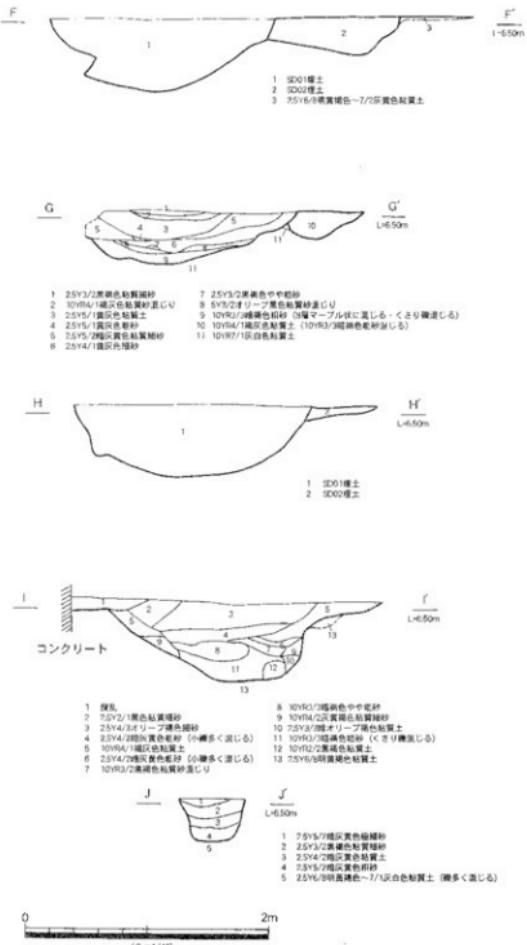
また、G-G'付近では底部の標高が6.120mを測り、B~Fラインにかけて中央部分が窪地状であったものと考えられる。I-I'付近での底部標高が5.900mを測ることから、全体的に北から南にかけて溝底の勾配が下っていることがわかった。

埋土は上部2層に黒褐色粘質土層を確認しており、第3層より下層は暗灰黄色系粘質細砂層で、上部2層と第3層より下層に時期差を設定できると考えられる。中層部から下層部にかけて砂層と粘質土層が交互に入り込み、底部には礫を含んだ黒褐色～暗褐色粗砂層が広がり、水の流れていたことが推測できる。



第5図 第1調査区遺構平面図





第7図 第1調査区 SD01-03断面図

に向かって延びる。中央部においては粘土採取の搅乱に遭っている。出土遺物は無い。

第3節 第3調査区

第3調査区は、調査区域の南東に所在する住宅の北側に位置する。第3調査区中央に、東西の断ち割りトレンチを設定し、調査区内の基本層序を観察した（第10図）。造構面は、耕作土直下で検出でき、包含層が被っていないことからも削平が著しかったものと考えられる。断ち割りトレンチより北側では造構面が2面

第2節 第2調査区

第2調査区は、第1調査区の北側に位置している。約200mある南北に長い調査地である。

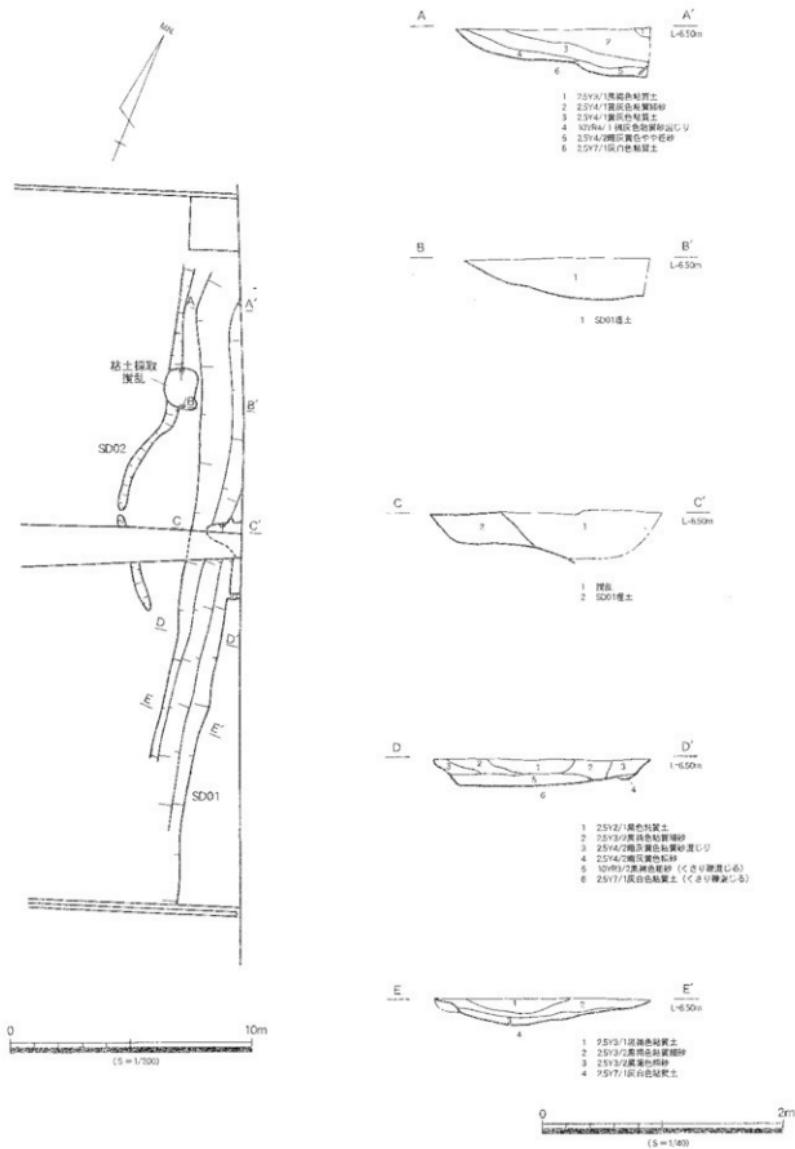
造構は、第1調査区から続く溝（SD01）と、SD01のすぐ西側に派生する細い溝（SD02）の2条を検出した。

SD01

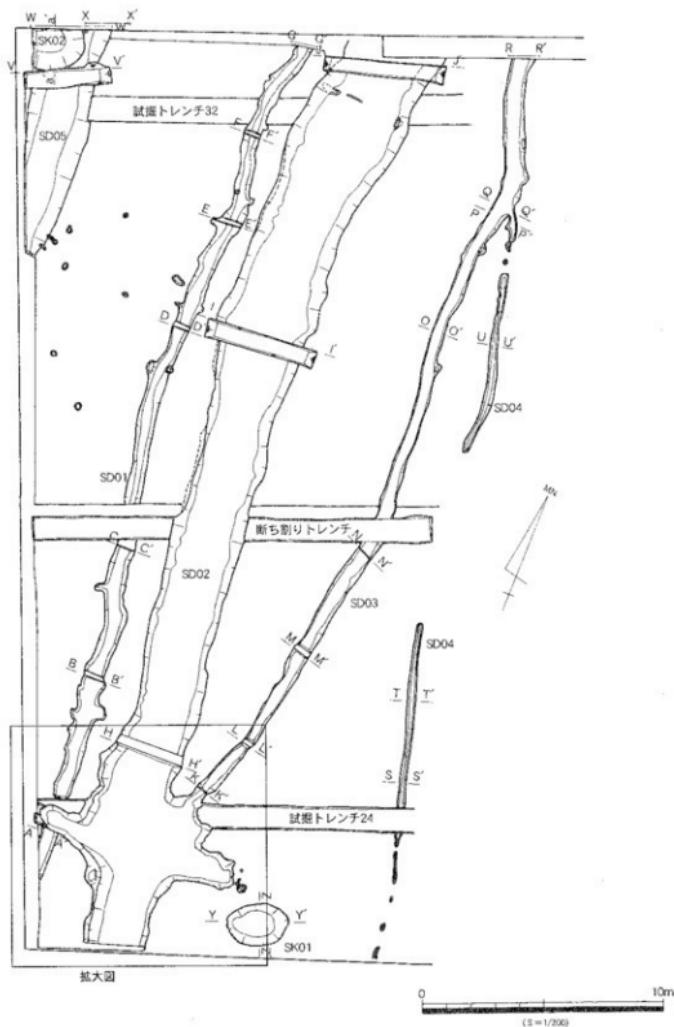
調査区東端の南北延長約15mを測る溝である。調査区南西部には豆を栽培していたことから、南端において溝の西肩部分の検出是不可能であった。検出できた部分から幅は約2mで、北に向かって広がっていくものと推測できる。溝の5ヶ所で断面観察を行い、それぞれ断面図を作成し、第8図に掲載した。深さは一番浅いEライン付近で標高6.283m、B、Cライン（標高6.163m）で一旦地形は下がり、更に一番深いAライン付近で標高6.083mを測ることから、南から北に流れていたことが分かる。出土遺物は少なく、図化できるものは無かったが、第1調査区のSD01から出土した遺物とよく似ている。平面プランから見ても、第1調査区から続く溝であること明らかであることから、SD01も弥生時代後期に属するものと考えられる。

SD02

SD01の西側に位置し、長さ14m、幅0.7mを測る細い溝である。南からやや西側に湾曲しながら北



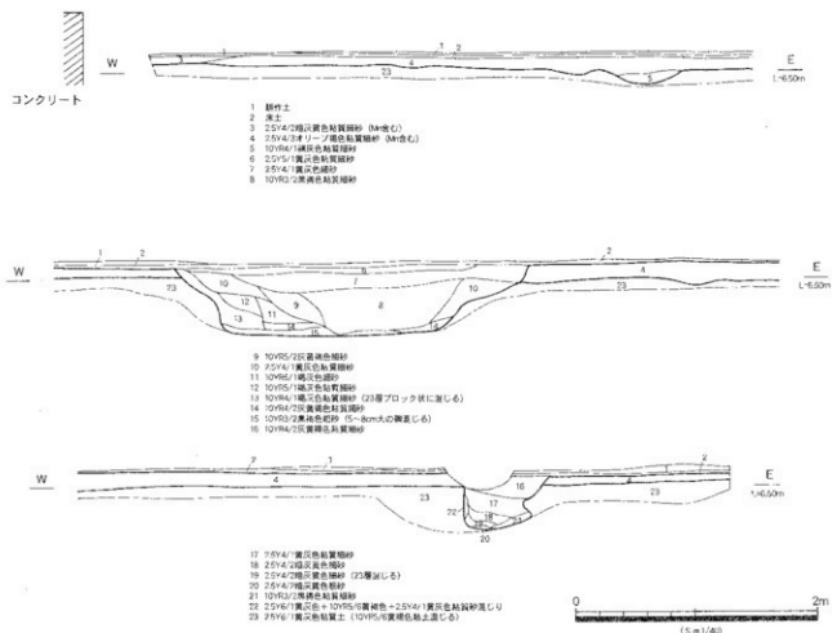
第8図 第2調査区透構平面・断面図



第9図 第3調査区遺構平面図

となり、少なくとも2時期以上になることがわかる。若干の時期差が溝の肩部分でも確認できた。しかし、前述したように耕作土直下で造構面が認められることから、一部分でのみ2段階に分けての調査を実施することとなった。

地山面は黄灰色系の粘質細砂層で、安定した土壤が広がっている。造構の底部にはほぼ礫が広がっている。第3調査区では南北に流れる溝5条、土坑16基を検出した。



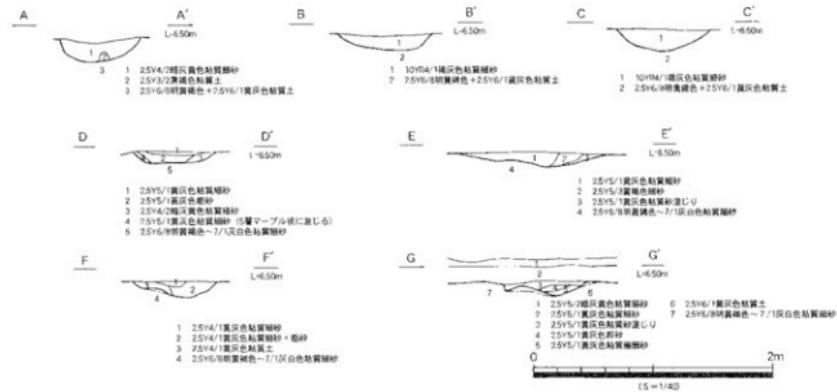
第10図 第3調査区断ち割りトレンチ北壁断面図

SD01

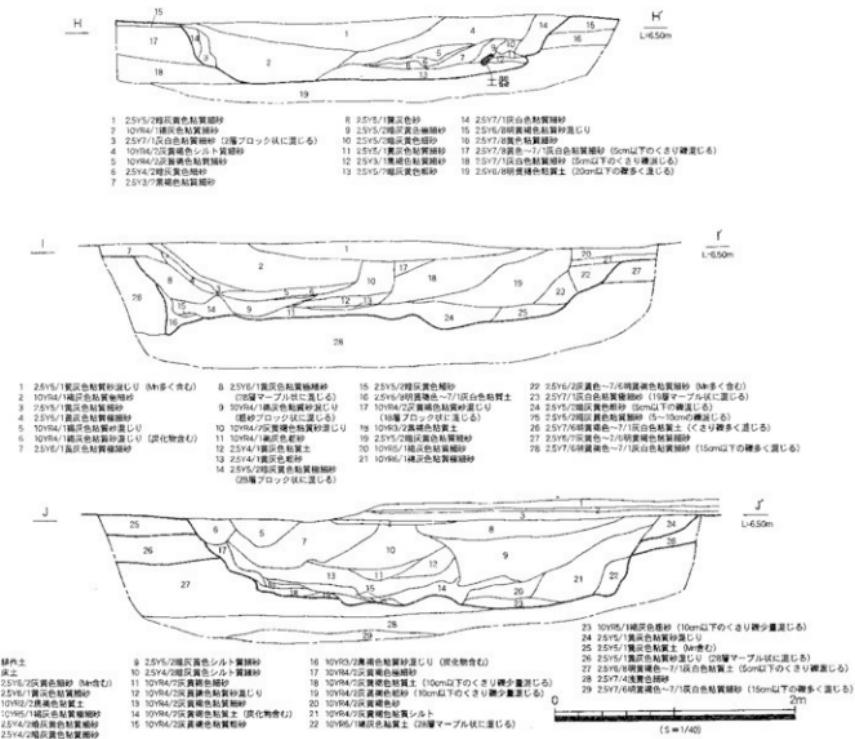
調査区中央よりやや西側寄りに南北に調査区を縦断する全長約36m、幅約1.0m、検出面からの深さ0.1~0.25mを測る溝である。7ヶ所において断面観察を行い、断面図を作成し、第11図に掲載した。埋土は黄灰色系粘質細砂で礫や砂はほとんど含まれておらず、出土遺物も無い。

SD02

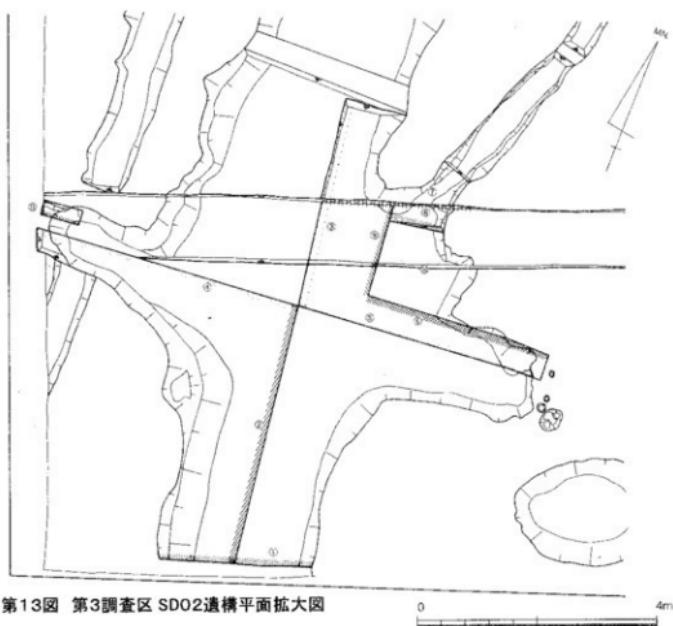
調査区中央にSD01に並行して走る溝である。調査区のほぼ対角線上に延びる。延長約38m、幅3~4m、検出面からの深さ0.5~0.9mを測る大型の溝である。断面観察を3ヶ所に行い、断面図を作成した(第12図)。北端J-J'ラインでは、第5・6層において黒褐色系粘質土層を確認できた。また、第8・9層では暗灰黄色粘質細砂シルト質細砂で、明確に異なる層が同じレベルにおいて確認できる。更に、第10~15層においても灰黄褐色粘質細砂~粗砂など比較的砂質系の層が観察できた。このことから一つの溝内でも3時期以上あったものと考えられる。底部には大小さまざまな礫が多く含まれており、砂の堆積も確認できることから、その時代毎に水が流れる道筋が異なっていたことが推測できる。遺物は底部からしか出土しておらず、各層ごとの時代区分は不明である。



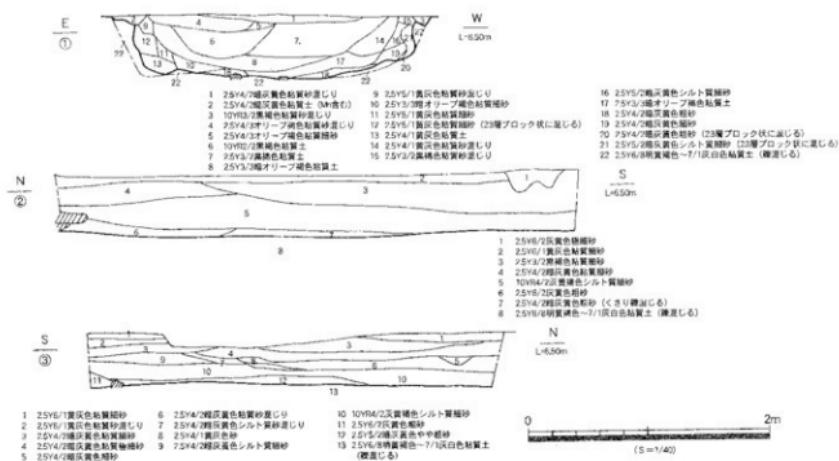
第11図 第3調査区 SDO1断面図



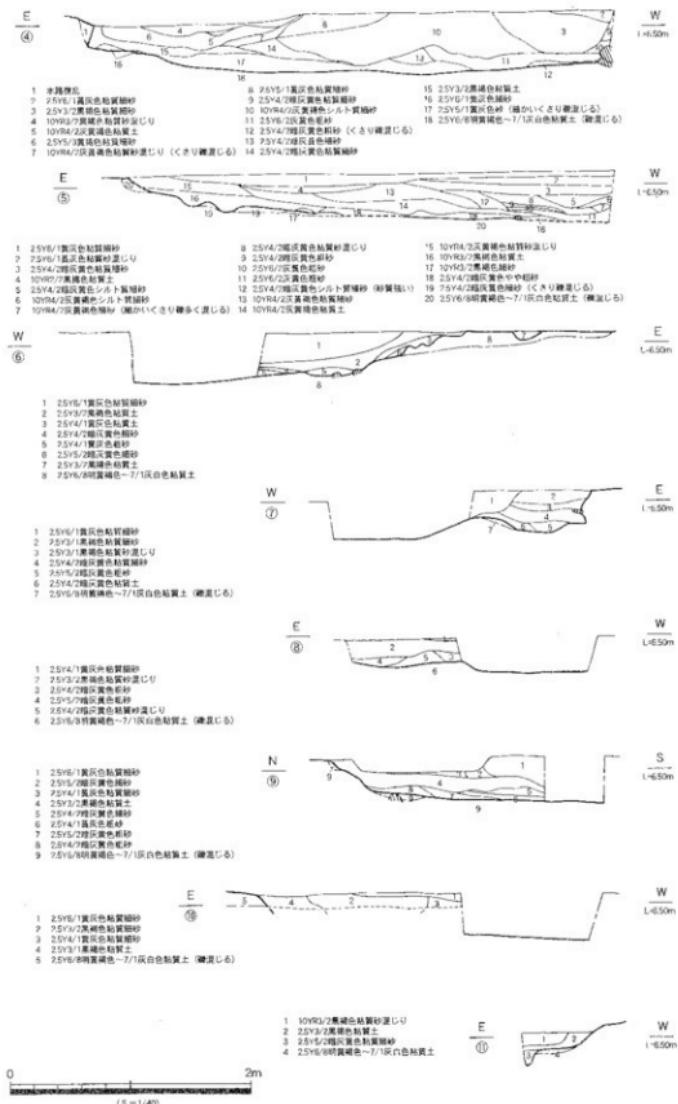
第12図 第3調査区 SDO2断面図



第13図 第3調査区 SDO2遺構平面拡大図

0
(S=1/80)
4m

第14図 第3調査区 SDO2断ち割り断面図(1)



第15図 第3調査区 SD02断ち割り断面図(2)

また、SD02 の南端では、溝の両岸にヒレ状の張り出しがあり、幅 1.0m と幅 1.5m の溝の続ぎが東西にせり出している。西側のヒレ状部分は SD01 に切り込んでいる。この部分の詳細な情報を確認するために、断ち割り断面轮廓を 11-1 と呼んで、断面図を作成し、第 14・15 図に掲載した。ヒレ状部分はやや連く広がる。

中央部分は、窪地状に地形を形成しており、底部の標高は 6.172m を測る。この付近からの出土遺物も極少量で碎片が多く、詳細については不明である。

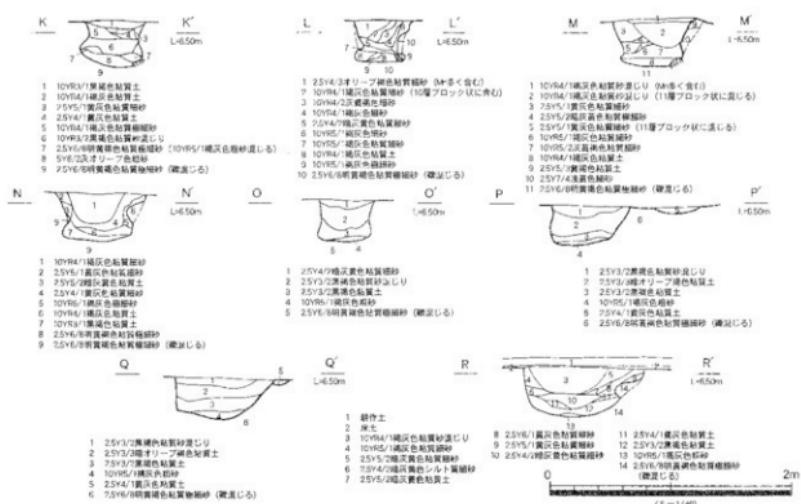
SD02 北端部分では標高 5.875m を測り、南部との高低差は約 0.3m 下がっており、南から北に向かって地形が下がっていることがわかる。

出土遺物は、土器様式から弥生時代後期の範疇に入るものと考えられる。

SD03

SD02 の東側のヒレ状部分から派生する SD03 は、幅 0.7~1.0m、検出面からの深さ 0.4m を測り、やや東側に膨らみながら北に向かって延びる。SD03 の幅は広くはないが比較的の深さがある。

SD03 南端部の断ち割り⑧において SD02 との切り合い関係を観察した(第 15 図)が認められず、SD02 とは同時期に存在していた溝であるものと考えられる。



第 15 図 第3調査区 SD03断面図

SD04

SD03 の北端から 7m 南の位置で分岐し、細く浅い溝を形成しながら南側に延びている。幅 0.5m、検出面からの深さは 0.1m にも満たず、中央部分では浅すぎて検出できなかった。出土遺物は無い。



第 16 図 第3調査区 SD04断面図

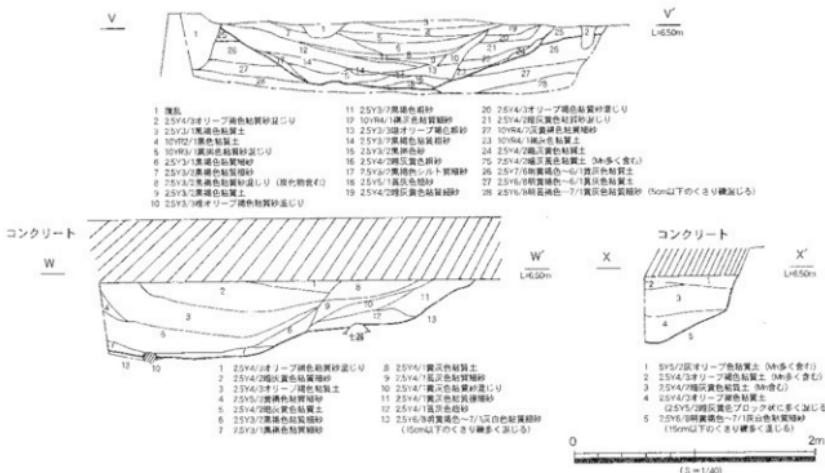
SD05

調査区北西端の第 1 調査区と第 2 調査区から続く溝である。延長約 10m、幅 2.5~3.0m を測る。埋土などの状態もよく似ており、一連する溝であることがわかる。SD05 南端底部での標高は 6.143m を測り、地

形は第2調査区に向けて下がっている。

しかし、北端では底部標高5.843mを測り、第4調査区に向けて下がる地形を形成している。第1調査区からここまで溝の底部は、凹凸のある地形であったことがわかる。

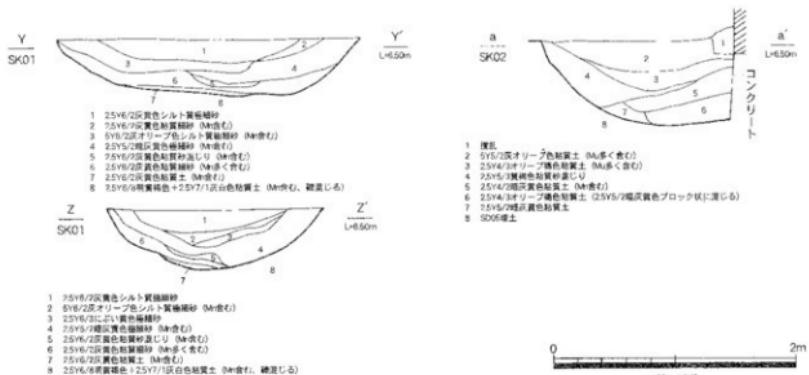
出土遺物は、須恵器長頸壺が出土しており、古墳時代後期に属するものと考えられる。



第18図 第3調査区 SD05断面図

SK01

調査区南端中央部の東西径1.7m、南北径2.5mを測る橢円形の土坑である。検出面からの深さは0.5mを測り、埋土は淡黄灰色系の砂層で固く締まった様子ではなかった。近世以降の瓦や土師質土器片が出土している。



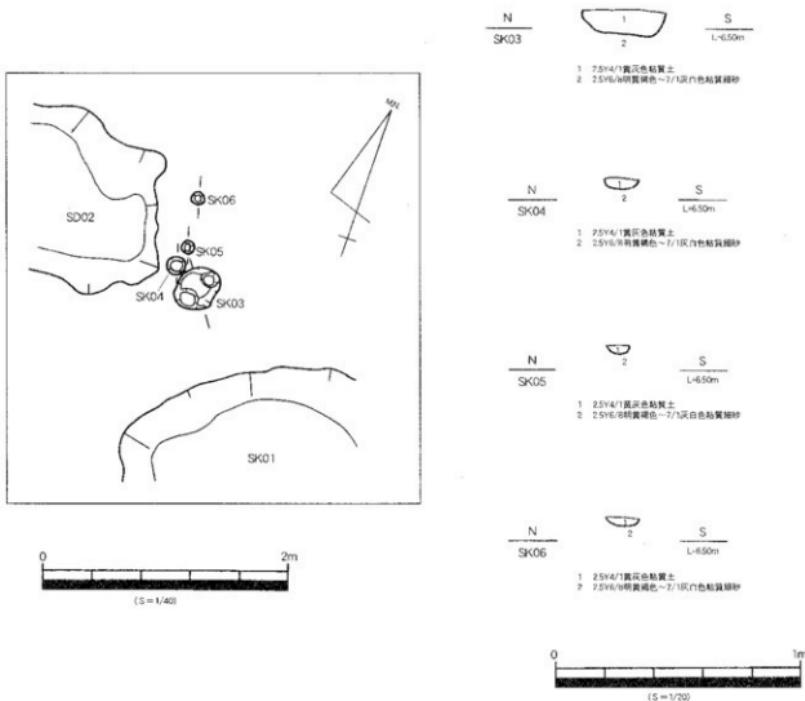
第19図 第3調査区 SK01・02断面図

SK02

調査区北西隅でSD05を切り込む土坑である。調査範囲の制約から土坑の正確な形態については不明であるが、検出面からの深さは0.7mあり、SK01と同様の埋土をしており時代についてもSK01と同時期のものと考えられる。

SK03~06

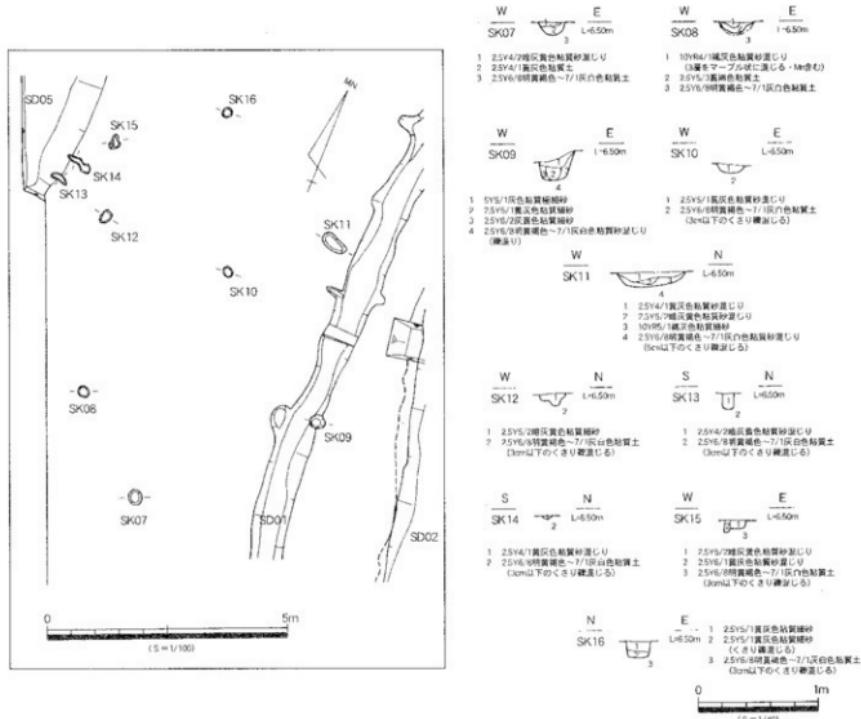
調査区南側においてSK01の北側、SD02の東側ヒレ状部分のすぐ東側で南北に4基並ぶ土坑である。一番南端の幅0.4mのSK03が大きく、外は0.1mほどの大きさである。埋土はすべて黄灰色粘質土で、出土遺物は無い。



第20図 第3調査区 SK03~06平面・断面図

SK07~16

調査区北西部中央のSD05の南側、SD01の西側に比較的集中して検出した土坑群である。幅0.2~0.6mで深さは深いもので0.4m、浅いもので0.1mであった。これらの配置に規則性はなく、掘立柱建物跡である可能性はかなり低い。



第21図 第3調査区 SD07~16平面・断面図

第4節 第4調査区

第1講而

第4調査区は第3調査区の北側に位置し、第3調査区において検出した溝3条は統いて第4調査区においても検出できた。第4調査区では大きく2時期に分けることができ、調査結果も第1遭構面と第2遭構面に分けて報告する。

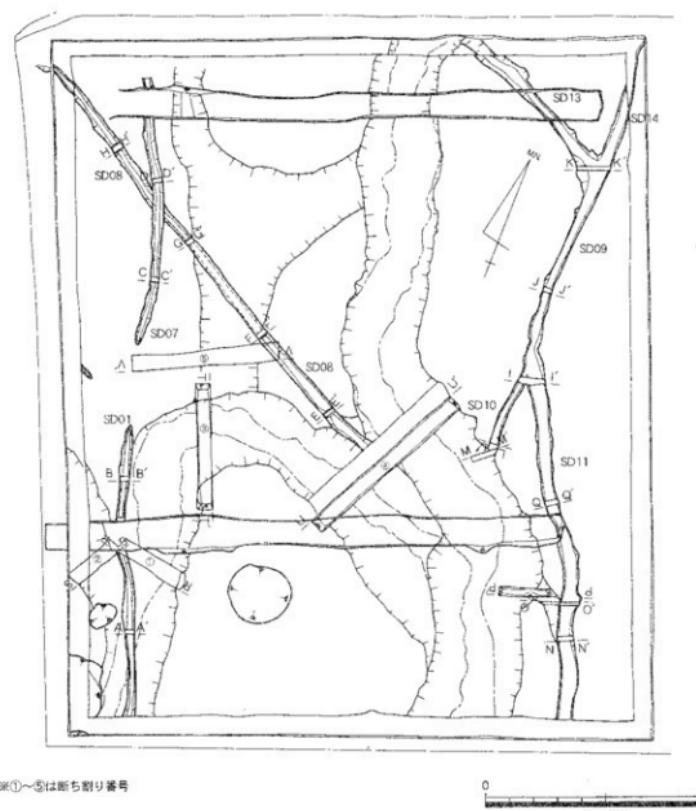
調査区の基本層序を観察するために、東西南北壁の断面観察を行い、断面図を作成し、第23・24図に掲載した。

全体的に削平が著しく、耕作土または床土直下で遺構面が検出できる。遺構面から更に 0.3m 下がったところでは明黄色～灰色白色粘質土の安定した地山を確認できた。

第4調査区全体において、交錯する溝を検出した。これらの溝は切り合い関係が著しく、それぞれの切り合ひ関係を断面から観察するため、断面を割り①～⑤を設定し、断面図を作成した(第25、26図)。

上面で大型の溝に切り込む細い溝と、調査区壁の断面観察から上部の遺構面に確認できた溝9条を、第1遺構面とした。

また、達の分類に関しては、整理作業上わかりやすくするために一連の達であっても区別して達番号を



第22図 第4調査区第1造構面平面図

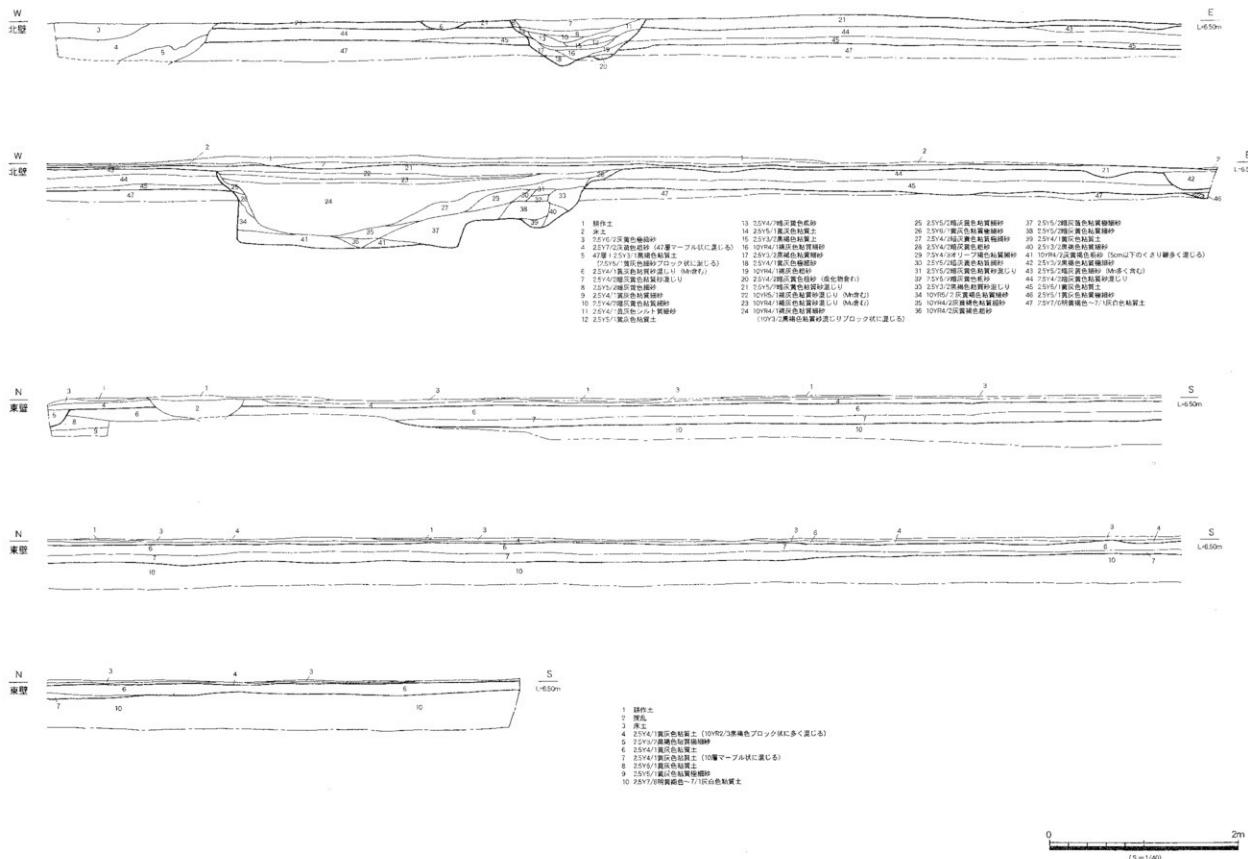
つけている部分がある。

SD01

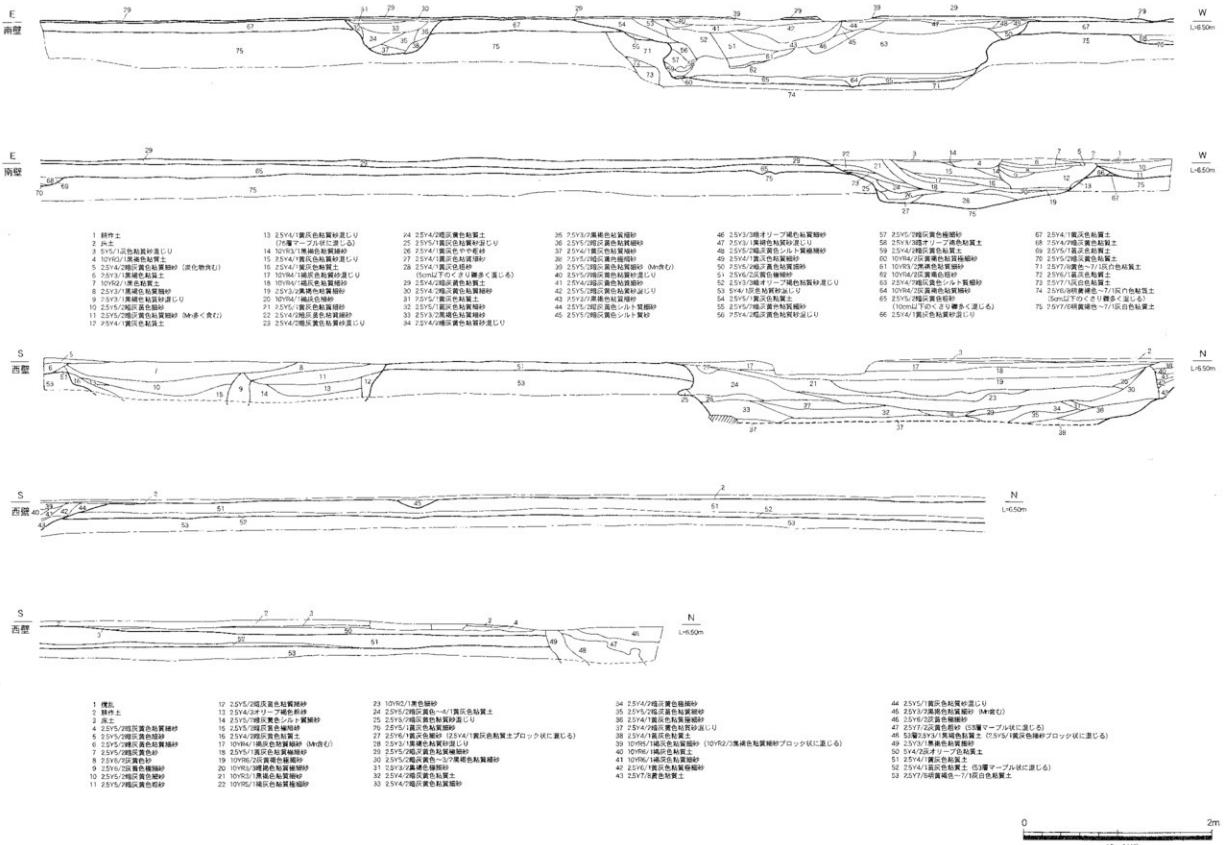
調査区西端付近で、南端から北に向かって調査区中央部分まで延びる溝である。幅0.5~0.7m、検出面からの深さ約0.1mを測り、2ヶ所で土層畦を設定し断面観察を行った(第27図)。埋土は、黒褐色粘質土を呈し出土遺物は無い。第2造構面のSD25上面で検出でき、明確な土色の違いから粘土部分をSD01と認識した。

SD07

調査区西側寄りに北から南に延びる溝である。長さ約11.0m、幅0.5m、検出面からの深さ0.1mを測る。2ヶ所に土層畦を設定し、断面観察を行った(第27図)。埋土は暗灰黄色粘質土を呈し出土遺物は無い。



第23図 第4調査区北・東壁断面図



第24図 第4調査区南・西壁断面図

SD08

調査区北西隅から南東隅に向かって延びる溝である。調査区中央部で第2遺構面のSD16に合流する。上面検出時での埋土の違いを確認できず、断ち割り④での断面観察を行った(第26図)が、SD08の形態を成す土壤堆積を確認することはできなかった。長さはSD16に合流する地点までの約20.5m、幅0.5~0.7mを測る。深さは4ヶ所の断面観察(第28図)

より、検出面から0.2~0.35mであった。埋土は、黒色を中心にして底部に向かうに連れて暗灰黄色を呈し全体的に砂質系である。調査区南東側にSD16とSD11の間に検出した短い遺構であるが、断面P-P'ラインからSD16に切られている溝(SD12)であることを確認できた。この溝の埋土状況や形態からSD08の一連のものと考えられる。

出土遺物は、図化できるものとしては弥生土器の壺、壺が出土した。土器様式から弥生時代後期に属するものと考えられる(第57図)。南北に延びるSD07に切られていることから、第1遺構面の中でも若干時期が古くなるものと考えられる。

SD09~14

調査区東側に南から北に向かって合流した後、再度分岐する2条の溝であるが、整理作業上の関係から、溝を6条に分けている。南から直線的に延びるSD11は、第2遺構面のSD16と合流する短い溝(SD12)と切り合う。そして、SD16から派生するSD10と合流し、調査区北東隅に向かって延びる(SD09)。SD09は約8m北に延びたところで、Y字に分岐し、西側方向に向かう溝は、SD13で、北東隅にそのまま延びる溝をSD14と分類した。

SD09は、検出面からの深さ0.35mで埋土は黒褐色粘質土を中心に、底部は暗灰黄色の砂質を呈している。遺物は古墳時代後期の須恵器壺蓋が出土している(第57図)。

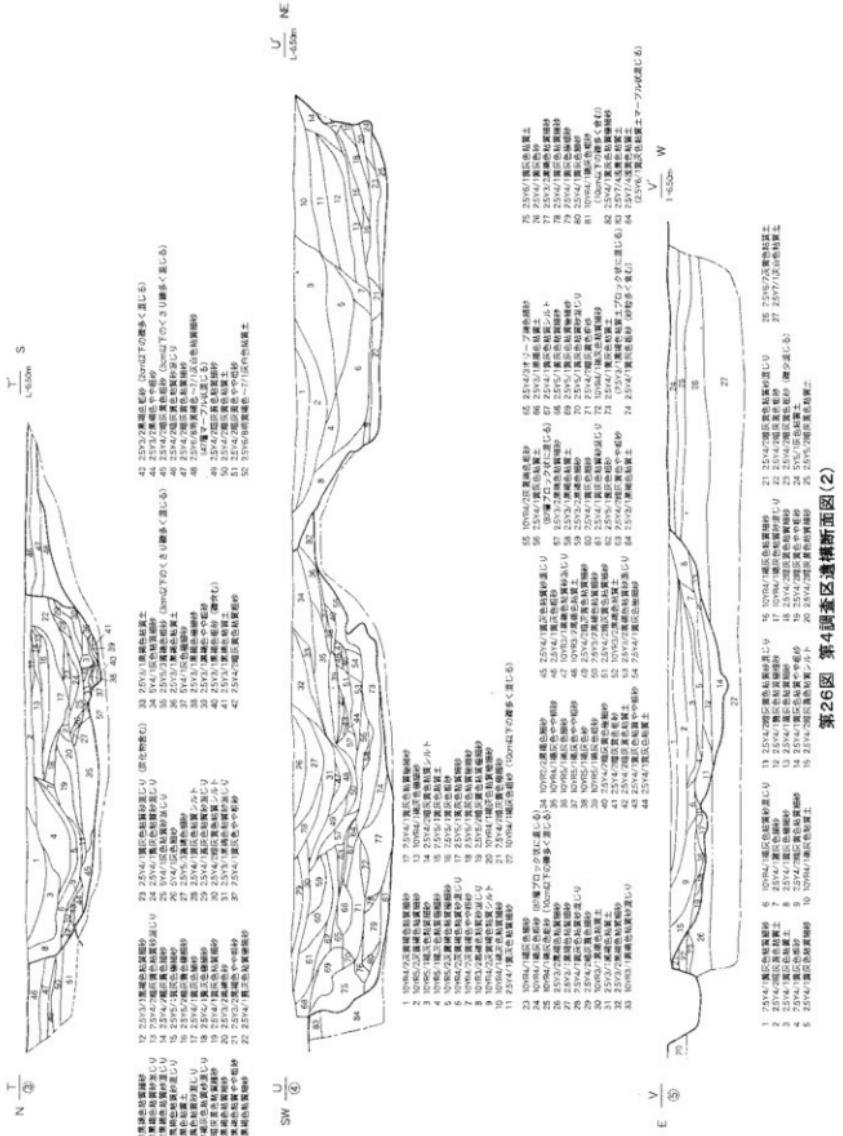
SD10は、SD16から派生し、南から延びたSD11と合流する。断面I-I'ラインでの断面観察を行うと、SD10がSD11を切り込み、北東隅に向かって延びる溝(SD09)になる。検出面からの深さは0.2mで、埋土は黒褐色の粘質細砂質系を呈している。出土遺物は無い。

SD11は、4ヶ所の土層を設定し断面観察を行った。検出面からの深さは0.3~0.4mを測り、埋土は黒褐色粘質細砂を中心に、底部は同系色の砂質を呈する。出土遺物は無い。

SD12は、SD16とSD11の間にあり、SD08と一連の溝であることは前述のとおりである。検出面から



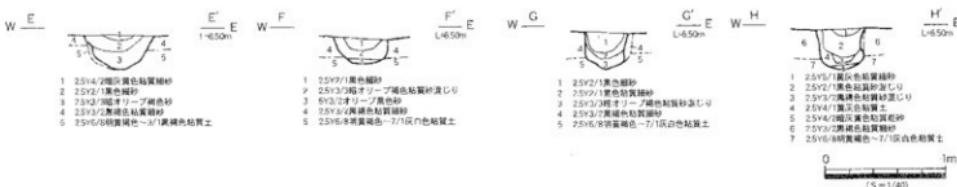
第25図 第4調査区遺構断面図(1)



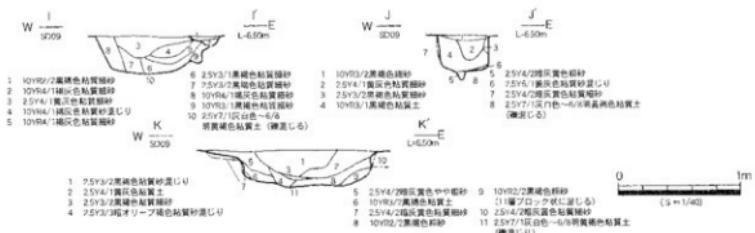
第26図 第4調査区遺構断面図(2)



第27図 第4調査区 SD01-07断面図



第28図 第4調査区 SD08断面図



第29図 第4調査区 SD09断面図

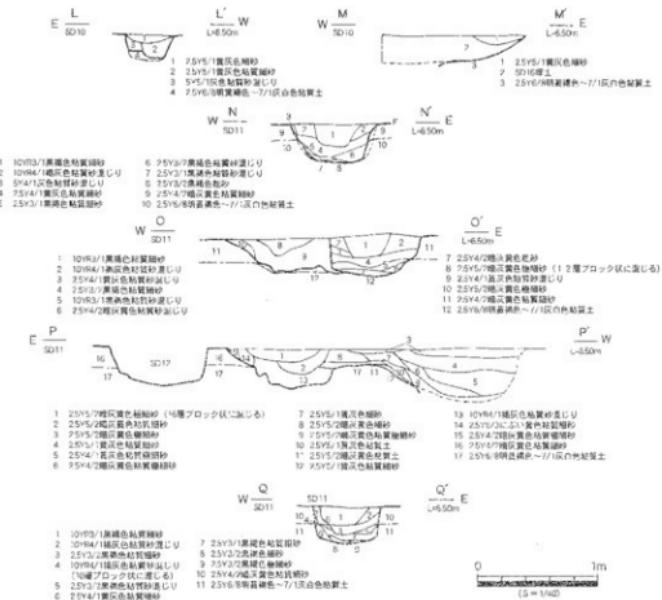
の深さは0.3mを測り、埋土は暗灰黄色系砂質を呈している。出土遺物は無い。

SD13は、SD09が約8m北に延びたところでY字に分岐し、西側方向に向かう溝である。検出面からの深さは約0.4m、幅0.6~1.0mを測り、埋土は黄灰~暗灰黄色系の粘質細砂を呈している。出土遺物は無い。

SD14は、SD09が約8m北に延びたところで、Y字に分岐し、そのまま調査区北東隅に向かって延びる溝である。断面K-K'ラインの観察より、検出面からの深さは0.3m、埋土は黒褐色粘質細砂を呈し、SD13を切っている。出土遺物は無い。

第2遺構面

第2遺構面では、第3調査区から続く大型の溝2条と、それに切られているY字の溝2条、細い溝3条を検出した。第2遺構面においても溝の切り合いは著しく、溝の詳細な関係を明らかにするために断ち割り⑥~⑬を設定し、断面観察を行った。断面図を作成し、第32・33・35図に掲載した。



第30図 第4調査区 SD10-11断面図

SD12

第1造構面で検出した SD12 は、この第2造構面で完掘した。第1造構面の SD08において前述したように、埋土状況も似ていることから SD08 は SD12まで続いているものと考えられる。

SD15

第3調査区から続いて、調査区中央よりや東側の南端から北西方向に延びる大型の溝である。整理作業上の関係から SD15 は調査区南端から第1造構面での断ち割り④までとする。

調査区南端から約 10m 北に延びた地点でそのまま北に延びる溝 (SD16) と切り合っており、それらの関係を確認するために、断ち割り⑥において断面観察を行った (第32図)。第6層までの堆積は SD16 の埋土と考えられ、SD15 は SD16 に切られていることがわかった。幅 3.5~4.0m、検出面からの深さは 0.5~0.6m あり、黄灰色系で礫を含む粗砂が底部に堆積し、褐灰色~黄灰色系の粘質細砂がその上に堆積する。最終段階で溝の中央に黒褐色系の粘質土が堆積している。

完掘時に底ラインの断面を計測し、第37図に a~c ラインを掲載した。SD15・16 の間に仕切りのような 0.25m ある高まりが確認でき、SD15 の東岸側には幅 0.7~1.5m、深さ 0.1m の細い溝が確認できた。溝の西岸側では底部分に幅 0.7m、深さ 0.1m の細い溝が流れていることが確認できる。

標高差から2条とも南から北に流れている。断ち割り④より南側2.5mのところでも0.2mの段差を確認でき、激しい水の流れがあったものと推測できる。出土遺物は無い。

SD16

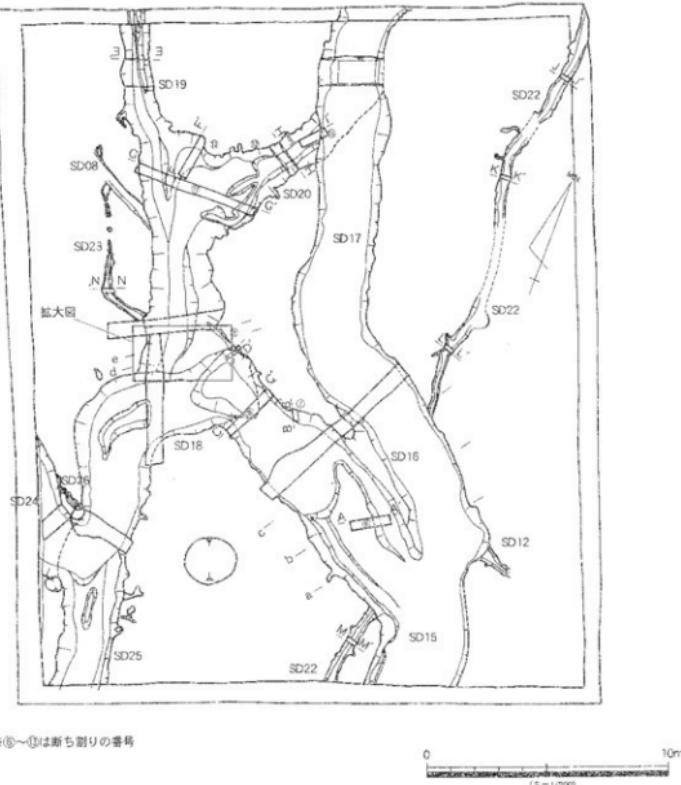
SD15と共に調査区南端から北に延び、約10m地点で北にそのまま延びる大型の溝である。整理作業上の関係からSD16は第1遺構面での断ち割り④までとする。SD15でも述べたように、断ち割り④よりSD15との切り合い関係を確認し、SD16がSD15を切っていることから、SD16の方が新しいものと考えられる。

幅3.0~4.0m、検出面からの深さ0.5~

0.6mを測り、黄灰色で礫を含む粗砂が底部に堆積し、褐灰色～黄灰色系の粘質細砂が更に堆積する。最後に灰黃褐色粘質細砂～粗砂が堆積している。出土遺物は無い。

SD17

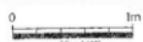
調査区中央を南北に縦断する大型の溝である。調査区南端から延びるSD16に続く溝で、整理作業上の関係から第1遺構面での断ち割り④から北側をSD17とする。



第31図 第4調査区第2遺構面平面図



- 1 23Y4/1褐色埋め土
- 2 10YR2/1黒褐色粘質細砂じり
- 3 10YR2/2黒褐色粘質砂
- 4 10YR3/1黒褐色粘質砂
- 5 10YR3/2黒褐色粘質砂
- 6 10YR0/2黒褐色粘質砂 (5cm以下のかさり層多く泥じる)
- 7 23Y4/2黒褐色粘質砂
- 8 23Y4/2黒褐色砂やや砂
- 9 23Y4/2黒褐色砂
- 10 23Y4/1黒褐色粘質土
- 11 25Y3/2黒褐色粘質砂じり
- 12 25Y3/2黒褐色粘質砂
- 13 25Y3/2黒褐色粘質砂
- 14 23Y5/2黒褐色粘質砂
- 15 25Y3/2黒褐色粘質砂 (5cm以下のかさり層多く泥じる)
- 16 25Y3/2黒褐色粘質砂
- 17 25Y3/2黒褐色砂やや砂
- 18 25Y6/3褐色黄褐色～7/1R白色粘質土



第32図 第4調査区遺構断ち割り断面図(1)



第33図 第4調査区遺構断ち割り断面図(2)

っている。底レベルにおいて、断ち割り①付近は標高 5.906m、一番深い窪地で標高 5.664m、断ち割り④付近で標高 5.652m である。両側の南から流れてきた水は、SD18 のところで溜まっていたものと推測できる。SD18 は比較的出土遺物が多く、弥生時代後期の土器がほとんどで、古墳時代後期に属する須恵器の甕も 1 点出土している(第 58 図)。

SD19

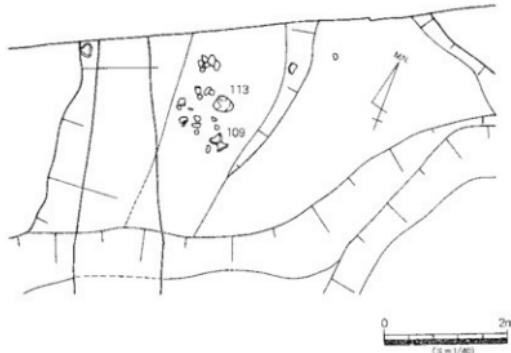
調査区やや西側寄り、SD18 の U ターンしているところから北に延びた溝である。SD18 と SD19 の前後関係は、第 2 遺構面において断ち割り③と第 2 遺構面の断ち割り⑨の断面観察から、SD18 に切られており、SD19 の方が古いものと確認できた。

全長約 15m、幅 1.0~4.0m、深さは検出面から 0.2~0.5m である。2ヶ所で断面観察を行い、断面図を作成し第 35 図に掲載した。埋土状況は暗灰黄色～黒褐色で細砂～粗砂を呈している。底レベルにおいて、断ち割り⑤付近で

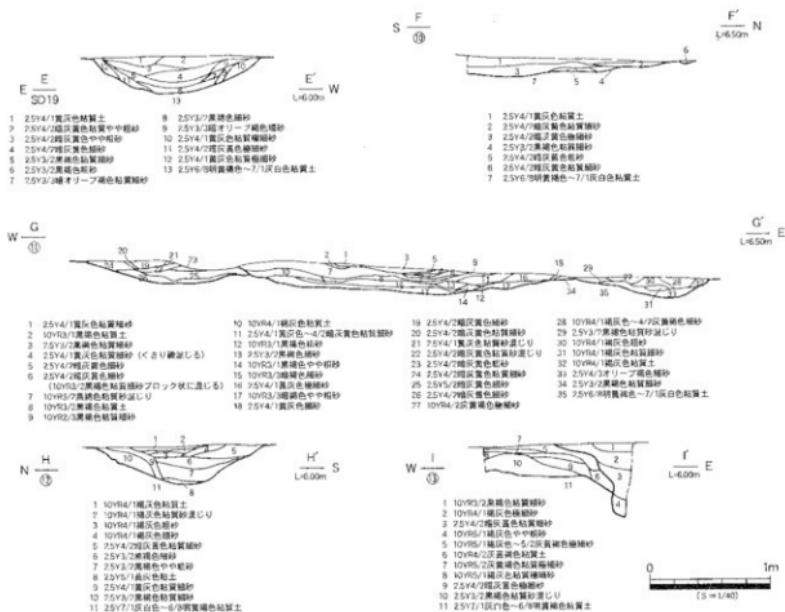
規模は、幅 2.5~3.0m、検出面からの深さは 0.5~0.6m である。埋土状況も SD16 と同様である。出土遺物は、広口壺の口縁部、高杯の脚部など弥生時代後期のものと、古墳時代後期に属すると考えられるかえりを持つ須恵器坏身と坏蓋が出土している(第 57 図)。

SD18

調査区南側に SD15 から北西方向に延び U ターンして南に向かって延びる溝である。整理作業上の関係で第 1 遺構面での断ち割り①までを SD18 とした。幅 2.5~3.5m、検出面からの深さ 0.45m である。U ターン部分では、一辺 3m の三角形部分において深く壅んでいる。深さは検出面から 0.56m で最も深くな



は標高 5.886m、SD19 の北端では標高 6.065m を測量している。この溝だけは、他の溝とは異なり北から南にかけて水が流れていたものと推測できる。SD19 は比較的出土遺物が多く、第 34 図に遺物出土状況を掲載した。弥生時代後期の土器や布紋式土器（第 58・59 図）の出土が見られる。



第35図 第4調査区 SD19 断ち割り⑩～⑪断面図

SD20

SD19 から派生して SD17 に合流する溝である。整理作業上の関係から SD19 から分岐してから SD17 に合流するまでを SD20 とした。

幅 2.0~3.5m、検出面からの深さ 0.2~0.35m を測り、灰黄褐色～暗灰黄色で細砂（やや粘質）～粗砂を呈している。底レベルにおいて、断ち割り⑩付近では標高 5.899m を測量した。SD19 同様に他の溝とは逆転して水が北から南に流れていたことが窺える。出土遺物は、弥生時代後期の土器と断ち割り⑩から管玉が 1 点出土した（第 60 図）。

SD22

調査区東側において、SD15 の西側から調査区北東隅に向かって流れる細い溝である。SD15・16 に切られており、一部の詳細が不明である。全長約 30m、幅 0.5~0.8m を測り、検出面からの深さは 0.1m 未満である。4ヶ所で断面観察を行い、断面図を作成し、第 36 図に掲載した。埋土は、灰色～灰オリーブ色粘質細砂を呈している。出土遺物は無い。

SD23

調査区西側中央部において、断ち割り⑤のすぐ北のSD19の西側から派生し、屈曲しながら北に延びる細く短い溝である。全長約6.5m、幅0.5m、検出面からの深さ0.1mを測る。埋土は、黄灰色粘質細砂を呈している(第36図)。出土遺物は無い。

SD24

調査区西壁にかかり、Uターン溝から北西に延びる大型の溝である。整理作業上断ち割り②から北西に延びる溝をSD24とした。幅約2.7m、検出面からの深さ0.6mである。底部には黄灰色～黒褐色粗砂が堆積し、黒褐色～黒色粘質土を呈している。出土遺物は無い。

この溝は、明らかに北西方向に延びる可能性が窺われ、詳しい情報を得るために、西隣の田とさらに北側の田にこの溝の方角にトレンチを設定した。SD24の更なる詳細は第7・8調査区において述べることにする。

SD25

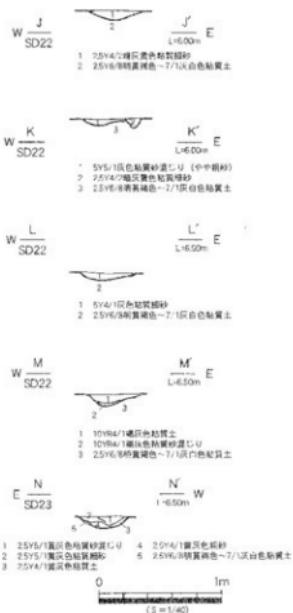
調査区南西隅からUターンする溝SD18に延びる溝である。整理作業上、断ち割り①から南側をSD25とした。

全長約7.0m、幅2.5～3.0m、検出面からの深さ0.6mである。底部にはくさり礫を多く含む黄灰色粘質細砂が堆積し、暗灰黄色～黄灰色粘質細砂、黒褐色粘質土が堆積する土壤を呈している。出土遺物はSD18と同様に弥生時代後期の土器が比較的多く出土し、SD18から出土したものと報告を一緒にした(第57・58図)。

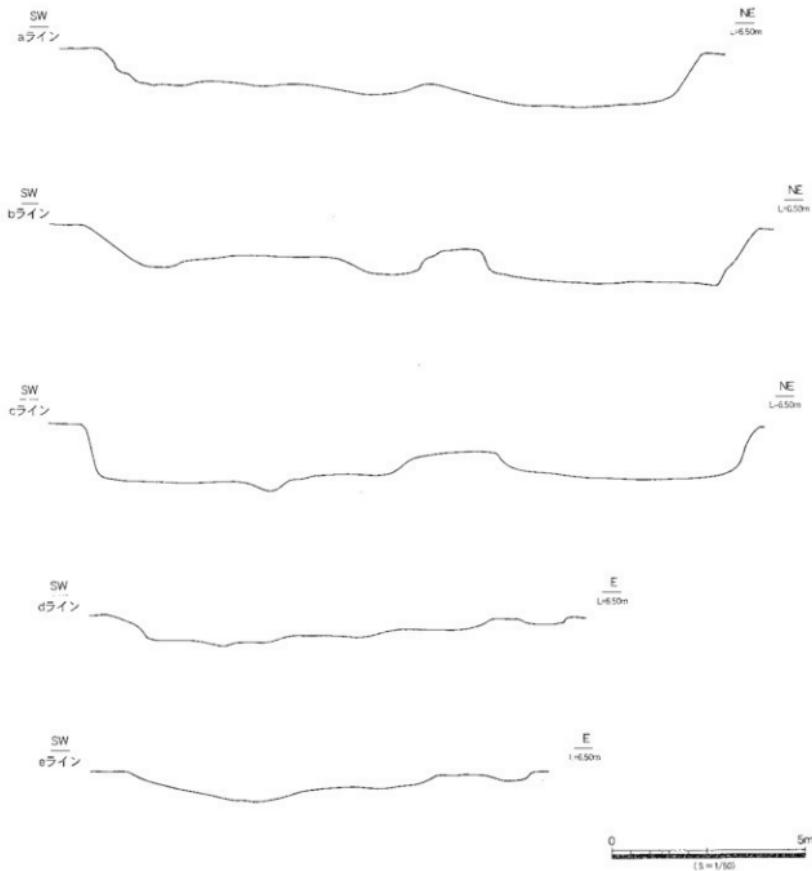
調査区南端から北に4.5m付近の底部は、約0.2mの段差が形成されている。調査区南端のSD25が始まる地点では標高6.057mを測り、南からSD18に向かって水が流れていることが確認できる。そして、SD15からもSD18に向かって水が流れ、SD18に水は溜り、SD18では堰のような働きがあったのではないかと推測できる。

SD26

調査区南西部分において、SD25からSD24が分岐する地点に南から北西に向かって延びる細く短い溝である。断ち割り①の西端から派生し、SD24に切られるように検出された。長さ約1.5m、幅0.3～0.5m、検出面からの深さ0.1m未満である。断面観察は行っておらず、上面での土色観察から黄灰色～灰白色粘質細砂を呈している。出土遺物は無い。



第36図 第4調査区 SD22・23断面図



第37図 第4調査区 SD15(a~c)・SD19(d~e)ライン断面図

第5節 第5調査区

第5調査区は、新田橋本遺跡の最も北側に位置している。調査の結果、第4調査区から続く溝1条と細く浅い溝4条、土坑1基を検出した。調査区南端でSD05を切るように楕円形の大型の土坑を検出したが、埋土状況などが第3調査区のSK01・02と同様であることから、近世以降のものと判断し、掘削作業は行わなかった。

この調査区も耕作土および床土直下で造構面を確認でき、著しく削平されていることがわかる。全体的に

明黄褐色～灰白色粘質土の地山層が広がって
いる。

SD01

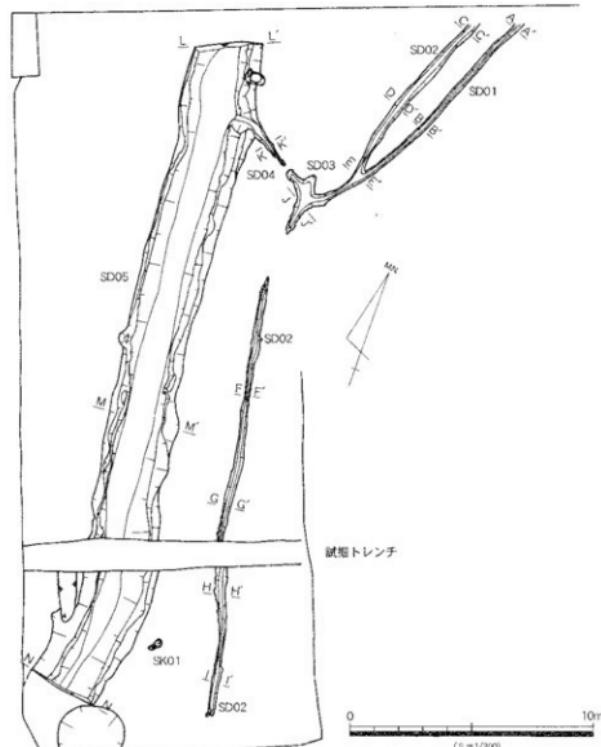
調査区北東隅に長さ約10m、幅0.7～1.0m、検出面からの深さ0.1m未溝の浅い溝が北東から南西に向けて流れている。埋土は、暗灰黄色粘質土でマンガンを多く含んでいる。断面図E-E'ライン(第40図)からSD01の西側に並行して走る溝に切られしており、E-E'付近で消滅している。出土遺物は無い。

SD02

調査区北東でSD01と平行して北東から南西に向けて走っている溝である。前述したように、SD01を切り込み、南に向けて延びている。深さはとても浅く、途中

検出不可能であった場所も存在するが、埋土状況や形態の類似から、南側の長さ約18m、幅1.0m、検出面からの深さ0.1m

の溝もSD02に分類した。埋土は、黒褐色粘質土にマンガンを多く含んでいる。



第38図 第5調査区遺構平面図

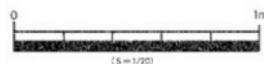
1: 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 (Mn多く含む)
2: 2.5Y6.0明黄色土～7.1灰白色粘質土

1: 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 (Mn含む)
2: 2.5Y6.0明黄色土～7.1灰白色粘質土

SD03

SD01・02が合流して南側に延びる溝をSD03と分類した。長さは3.5m、幅0.5～1.0m、検出面からの深さ0.1mで、埋土は黒褐色粘質土にマンガンが多く含まれている。

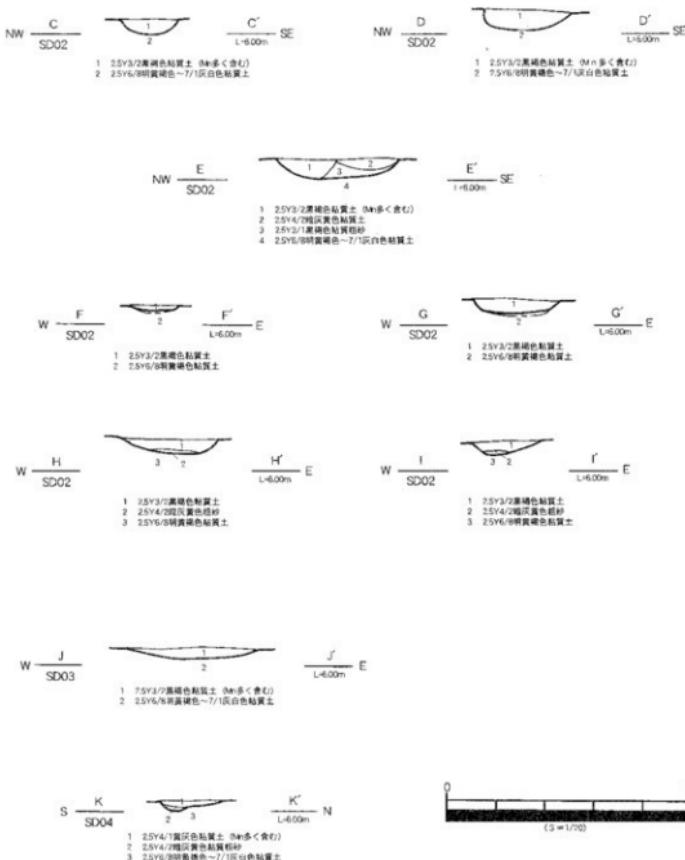
第39図 第5調査区 SD01断面図



SD04

SD03 から派生し、西側の SD05 に北西方向に繋がる溝である。長さ約 3.0m、幅 0.5~1.0m、検出面からの深さ 0.1m を測る。埋土は黄灰色粘質土である。

SD01~04 の断面観察を 11ヶ所で行い、断面図を作成した(第39・40図)。SD02 からはかえりを持つ須恵器坏身が 1 点(第61図)出土しており、古墳時代後期に属するものと考えられる。



第40図 第5調査区 SD02~04断面図

SD05

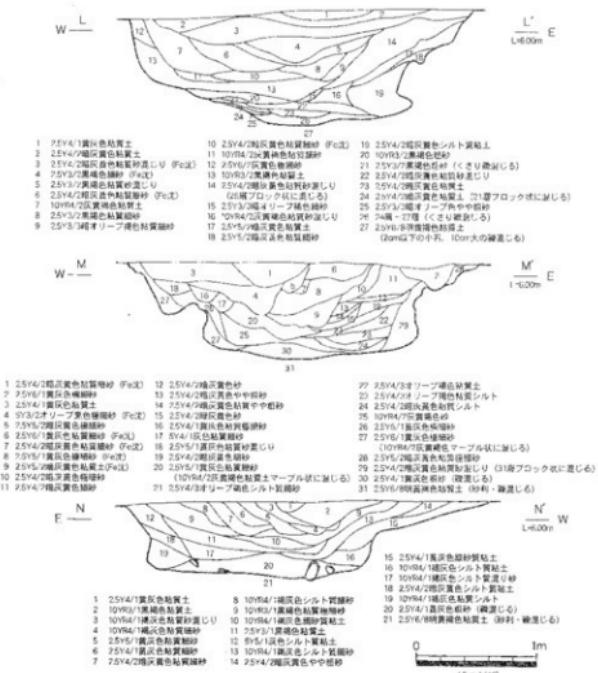
調査地南西隅から北東にかけて検出した長さ約27m、幅3.0m、検出面からの深さ約1.0mを測る溝である。南端において近世以降の大型土坑と、試掘トレンチから南に向けて長さ2.0m、幅1.0mの搅乱によって遺構面が確認できていない部分がある。

SD05では3ヶ所の断面観察を行い、断面図を作成し、第41図に掲載した。南端のN-N'ラインで標高5.506m、北端のL-L'ラインの標高は5.240mを測り、高低差は約0.26mであることから、南から北に向かって流れていることが窺える。埋土は、上部2層に黄灰色系粘質土が存在しており、第3調査区から続く粘土層のラインである。第3層以下の中部層では同じ黄灰色系が認められるが、粘質砂へ粗砂の砂層で明らかに異なる時期差があるものと考えられる。底部の最下層では、褐灰色系で粗砂に礫が多く含んだ層となり、3段階の時期差が想定される。溝の肩検出部分でも、幾度かの掘り返しが確認でき、時期差を裏付けるものと考えられる。

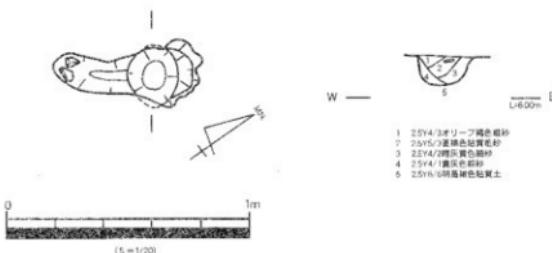
上部における出土遺物は無いが、中部層に須恵器壊蓋2点とかえりを持つ壺身1点(第61図)が出土し、古墳時代後期の流れがあったものと考えられる。底部では、礫層直上の粗砂層から弥生時代後期の土器(第61図)が出土し、比較的長い期間に渡って継続して機能していた溝であると考えられる。

SK01

調査区南側のSD05より東側に瓢箪型をした長さ0.6m、幅0.15~0.3mの土坑を検出した。埋土は灰黄色系粗砂へ細砂で、弥生土器片も数点出土しているが、図化できるものは無かった。



第41図 第5調査区 SD05断面図



第42図 第5調査区 SK01平面・断面図

第6節 第6調査区

第6調査区は、第5調査区の西側に隣接している。面積約 375 m²の比較的狭い調査区である。標高は 6.210m を測る。

調査区中央畦での断面観察では、耕作土及び床土直下に遺構面を確認し、やはり削平を受けているものと考えられる。

地山は明黄褐色～灰白色粘質土の安定した土壌が広がっている。調査区では溝 4 条を確認した。以下に詳細を述べる。

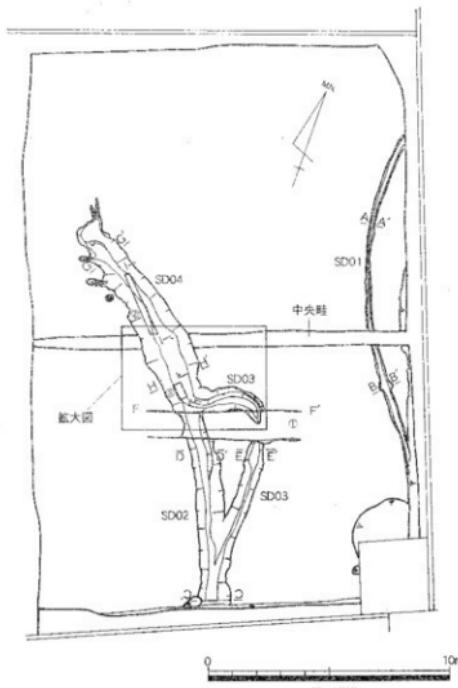
SD01

調査区東端から西に湾曲しながら北に向かって流れる溝である。長さは約 14m、幅 0.3～0.5m を測り、検出面からの深さは 0.1～0.2m である。

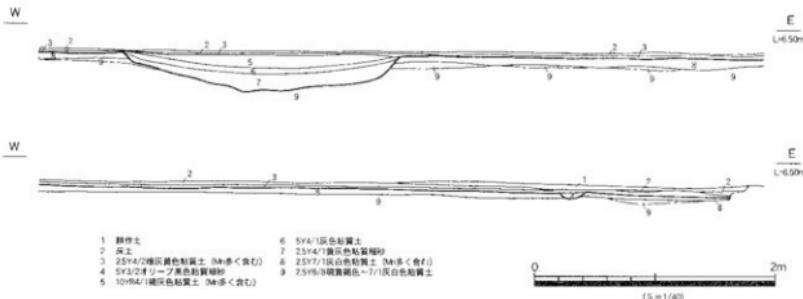
断面観察より埋土は単層で、オリーブ黒色粘質細砂を呈している。出土遺物は無い。

SD02

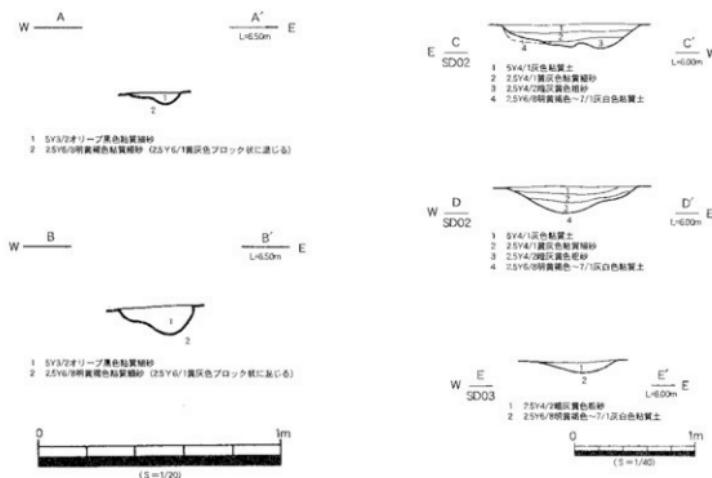
第4調査区の SD19 から続く溝である。調査区南端中央から北西に湾曲しながら流れ、整理作業上断ち割り①までを SD02 とした。長さは約 8m、幅 1.0m、検出面からの深さは、C-C' ラインで 0.2m、D-D' ラインで 0.25m を測る。



第43図 第6調査区遺構平面図



第44図 第6調査区中央断面図



第45図 第6調査区 SD01断面図

第46図 第6調査区 SD02・03断面図



第47図 第6調査区断ち割り①断面図

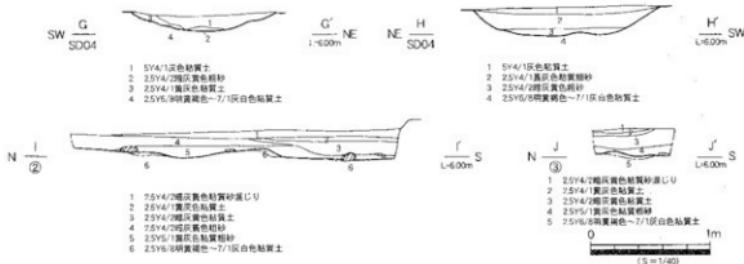
断面観察は2ヶ所で行い、断面図を作成し、第46図に掲載した。埋土は灰色～黄灰色で上部から粘質土、粘質細砂、粗砂と土壤堆積が確認できる。出土遺物は、外の調査区に比べて比較的多く団化できるものもあり（第62図）、弥生時代後期のものと考えられる。

SD03

SD02 南側から派生し西方向に湾曲する溝である。幅0.7～1.0m、検出面からの深さ0.1～0.3mを測り、埋土は灰色～暗灰黄色砂質である。断ち割り①より北側では、高杯や甕の底部など比較的土器様式がわかる器種が多く出土しており、出土状況を拡大図第49図に掲載した。

SD04

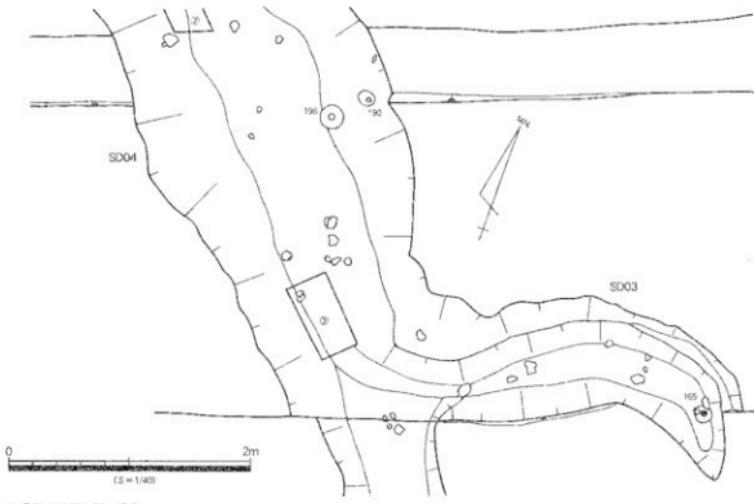
SD02 から北西に向かって延びる溝である。中央駐から北に約6m延びたところでSD04は終了する。幅1.5～2.0m、検出面からの深さ0.15～0.25mを測る。断面観察を2ヶ所で行い、断面図を作成し、第48図に掲載した。SD04を検出した時点では、断ち割り①のすぐ北側において標高5.943mと最も深く測量でき、土坑状に造構面が展開し、SD03を切り込んでいるように見られた。その切り込みを確認するために、断ち割り②・③を設定し、断面観察を行った（第48図）。しかし、断面図からは切り合い関係は確認できず、SD02・03と同様の土壤堆積を確認したことから、一連の溝であるものと捉えた。出土遺物も比較的多く、出土状況の一部を拡大図第49図に掲載した。土器様式から弥生時代後期に属するものと考えられる。



第48図 第6調査区 SD04・断ち割り②・③断面図

SD02～04での深さは、最も深いところで検出面から約0.8m、幅も最大で約1.5mしかなく、第3調査区から続く溝と考えられるが、第6調査区全体が大きく削平されているものと考えられ、溝の企画が小さくなり、土壤堆積も底部で確認できる砂層のみである。

溝の北端部分での底レベルは標高6.157m、南端部分の底レベルは標高6.044mを測り、北から南に向けて地形が下がっていることがわかる。



*○数字は断ち切り番号

第49図 第6調査区 SD03・04遺物出土状況平面図

第7節 第7調査区

第7調査区は、第4調査区で検出したSD24が北西に延びることが明らかであったため、方向等の概要を探るために、第4調査区の西側に隣接する田を新たに調査区として設定したものである。

第7調査区での調査は、作業効率を考慮した結果、トレンチ調査とすることとした。トレンチは計2本を設定した。以下、トレンチ毎に結果を、記述する。

1 トレンチ

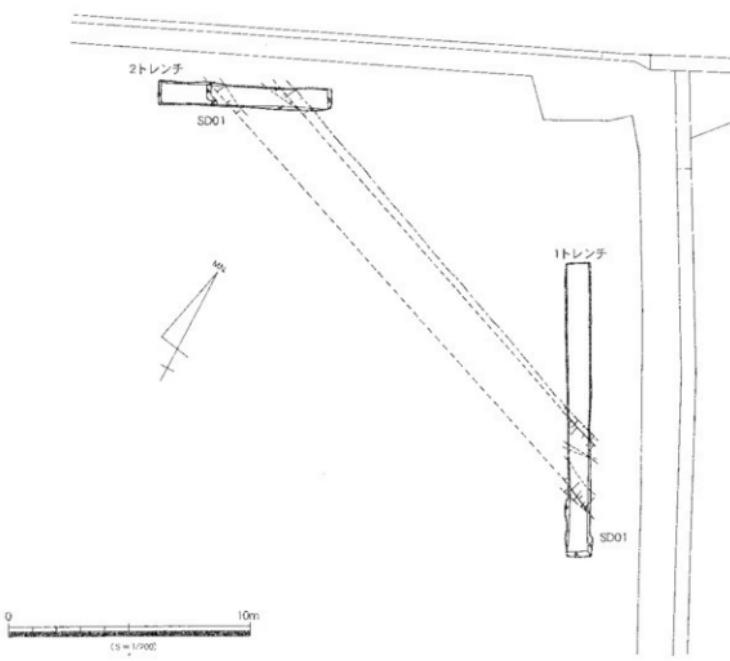
第4調査区南西隅にSD24を確認しており、SD24が第7調査区に延びていることは明白で、その詳細を確認するために調査区東端に長さ約12.5m、幅1.0mのトレンチを南北に設定した。

トレンチ南端から約1.5m付近において溝を検出し、東西壁の断面観察より北西方に延びていることが確認できた。溝は幅約2.5m、検出面からの深さ0.65m、底レベルの標高は5.780mを測る。出土遺物は無い。

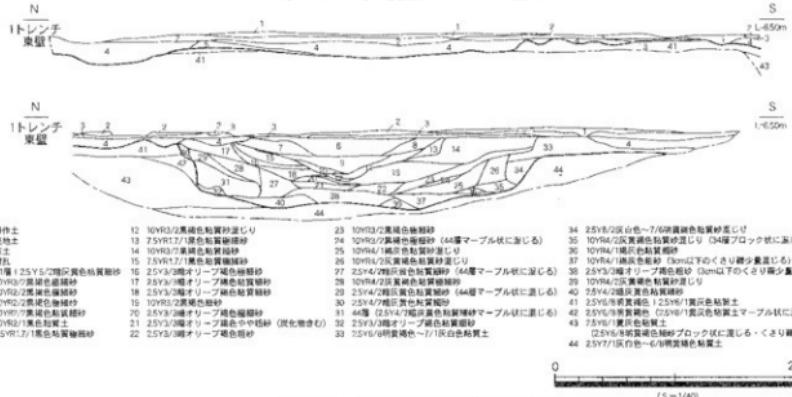
2 トレンチ

調査区北端に溝の流れる方向を予測し、長さ約7.0m、幅1.0mのトレンチを東西に設定した。

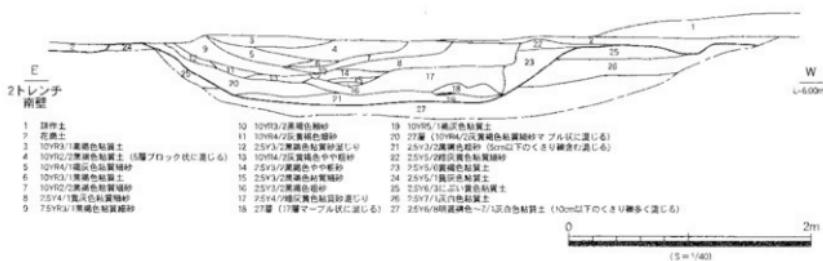
溝は東端から約1.0mのところから検出でき、幅約3.0m、検出面からの深さ0.55mを測る。底レベルの標高5.720mを測り、北西に向かって地形が下がっている。溝の方向、土堆積もほぼ1トレンチと同様であることから、一連の溝であることが考えられる。出土遺物は無い。



第50図 第7調査区トレンチ配置図



第51図 第7調査区1トレンチ断面図



第52図 第7調査区2トレーニング断面図

第8節 第8調査区

第8調査区は、第4調査区で検出したSD24及びSD08、第7調査区で検出したSD01がそれぞれ北方に延びていくことが明らかになったため、新たに設定した調査区である。第7調査区の北側に設定し、調査方法は第7調査区と同様にトレーニング調査とした。

トレーニングは、計4本設定した。以下、トレーニング毎に結果を、記述する。

1 トレーニング

調査区西端に、第7調査区から続く溝の方向を予測し、長さ約7.0m、幅1.0mのトレーニングを南北に設定した。トレーニング北端から溝が検出でき、幅約4.5m、検出面からの深さ0.7mを測る。底レベルは標高で5.540mを図り、北西方向に地形は下がっていることがわかった。溝の方向、土壤堆積もほぼ同様なことから、第4調査区から延びる溝は一連のものであると考えられる。

2 トレーニング

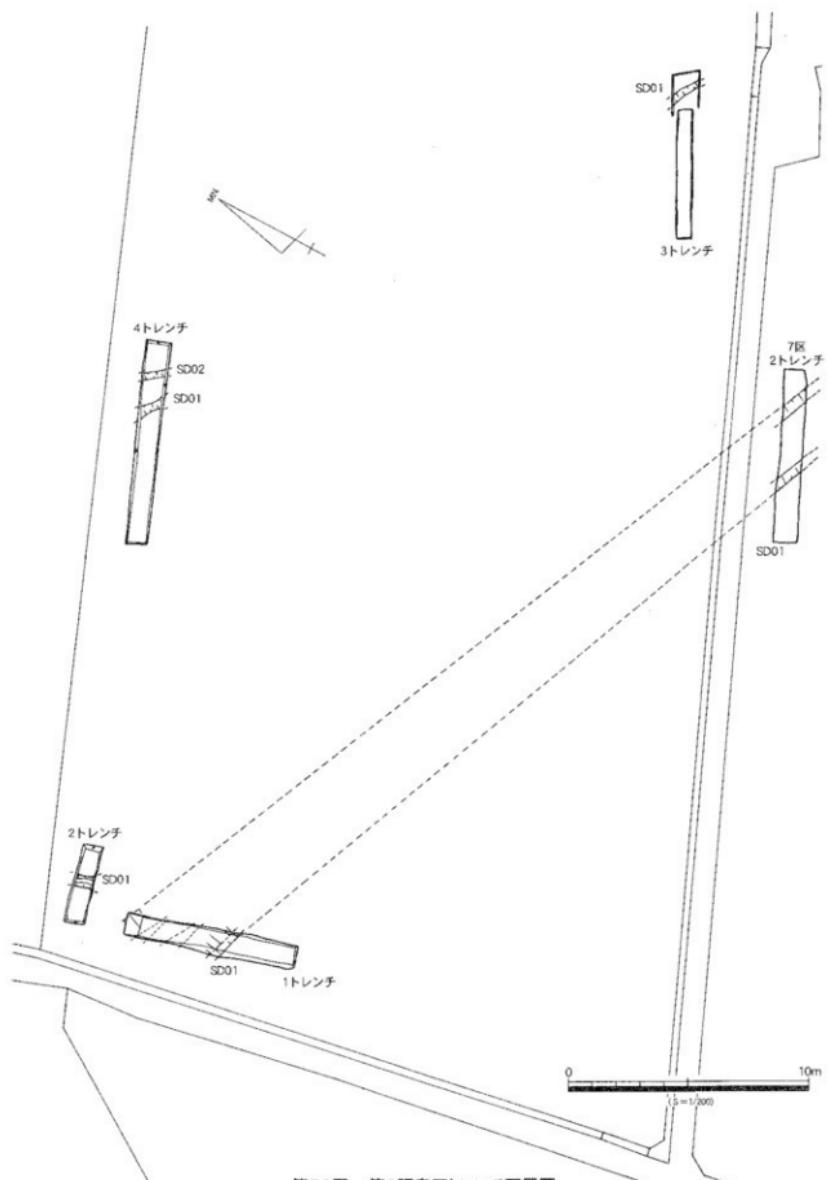
1トレーニングの北東隅に北方向に延びると思われる細い溝(SD01)を検出し、その方向と詳細を確認するために長さ約3.5m、幅1.0mのトレーニングを1トレーニング北側に設定した。溝の幅は0.5m、検出面からの深さ0.25mで、埋土は暗灰黄色～黒褐色粘質土である。出土遺物は無い。

3 トレーニング

第4調査区において、検出された溝SD08が北西にある第8調査区に向かって延びているのは明白で、その溝の方向と詳細を確かめるために、長さ約7.0m、幅0.7～1.2mのトレーニングを東西に設定した。東端において北西に向かって延びる溝を検出できた。幅約0.5mを測り、第4調査区で検出したSD08と一緒にものと考えられる。調査は、溝の上面検出のみに留めたので、深さや土壤堆積については不明である。

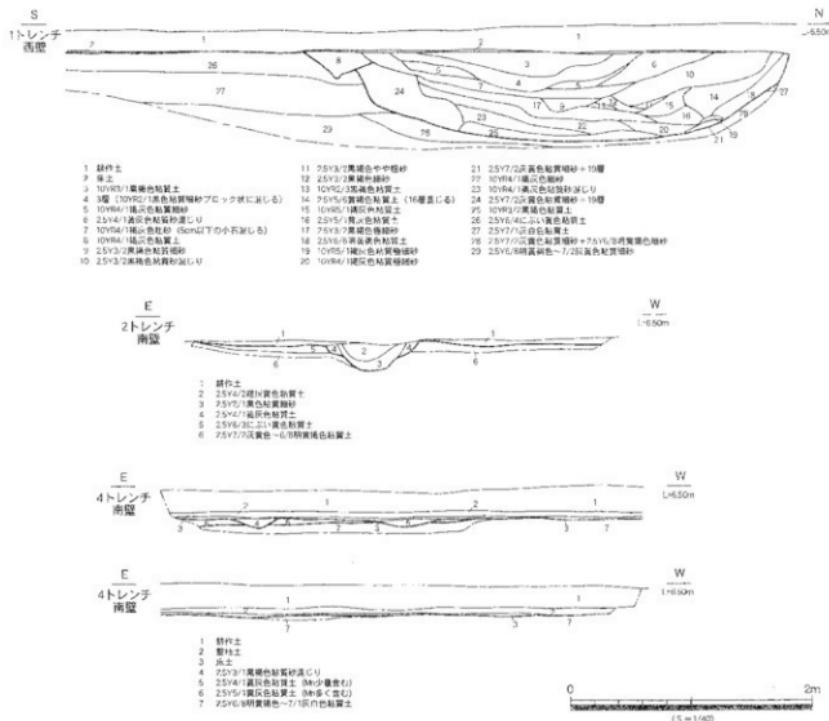
4 トレーニング

3トレーニングで検出した溝の方向と詳細をもっと詳しく確認するために、調査区北端に溝の続く方向を予測し、長さ8.5m、幅1.0mのトレーニングを東西に設定した。溝は2条検出でき、幅0.3～0.4mで埋土も3トレ



第53図 第8調査区トレンチ配置図

ンチからの溝が延びているものと考えられる。しかし、上面検出しか行っておらず、2条のうちどちらがSD08に繋がっている溝であるかは不明である。



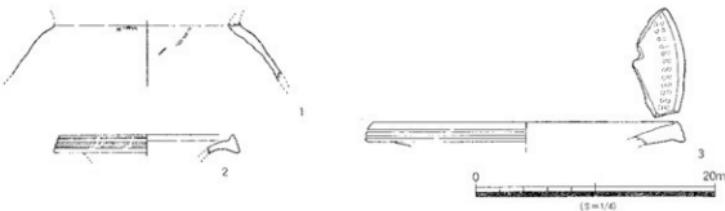
第54図 第8調査区1・2・4トレンチ断面図

第4章 遺物

第1節 第1調査区出土遺物

第1調査区において、SD01から出土した遺物は、小型のビニール袋10袋で、その中から図化できるものは3点のみ(第55図)であった。

1は、甕の胴部である。内外面にハケ目が見られる。2は、壺である。外反する口縁の端部には3条凹線文が施されている。3は、大型の広口壺の口縁部である。口縁端部には2条の凹線文と内側に2条の円形刺突文がかすかに見られる。土器様式などからすべて弥生時代後半のものと考えられる。



第55図 第1調査区 SD01出土遺物実測図

第2節 第2調査区

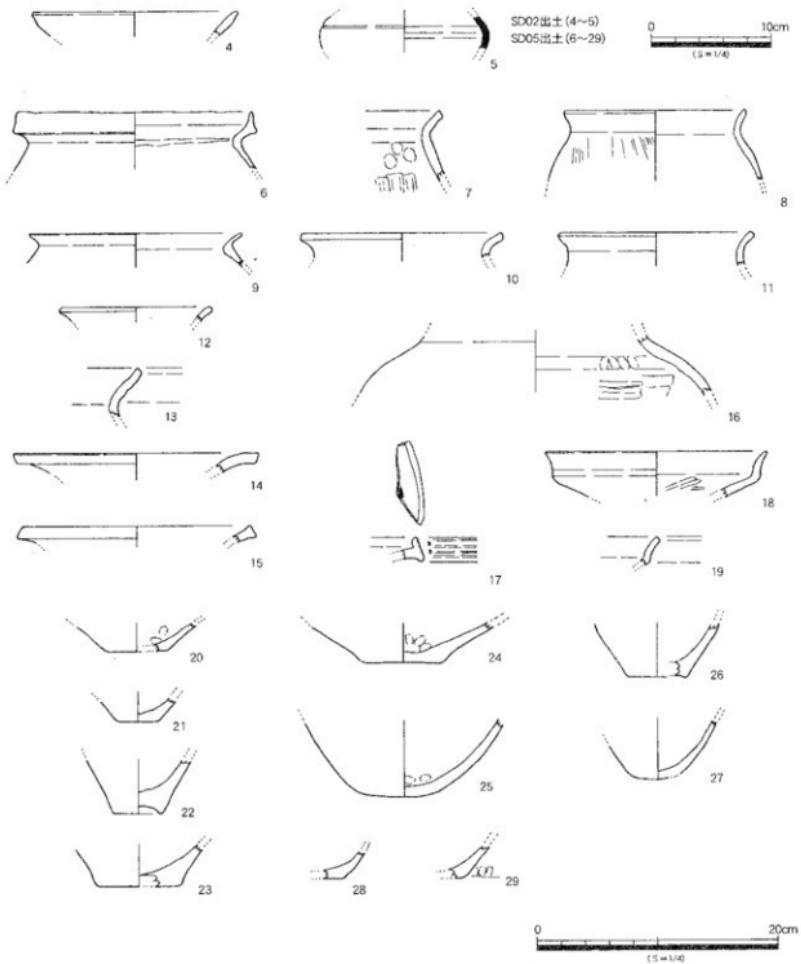
第2調査区において遺物が出土したのはSD01のみで、小型のビニール袋8袋で、その中から図化できるものはなかった。

第3節 第3調査区

第3調査区においては、土坑20基とSD01～05までの溝を検出しており、大小合わせてビニール袋29袋を確認しているが、その中から図化できるものはSD02・05から出土したものである(第56図)。

4・5は、SD02から出土している。4は、甕である。外反する口縁部の中央はやや肥厚で、口縁端部に向かって薄くなっている。摩滅が激しく調整は不明である。5は、須恵器の長頸壺の胴部である。外面には縦線文が見られる。古墳時代後期の範疇に入ると思われる。

6～29は、SD05から出土した弥生土器である。6は、甕である。口縁端部を拡張している。内外面に横ナデが見られる。胎土中には雲母が多く含んでいる。7は、甕である。短く外反する口縁部を有する。胴部内面にはヘラケズリ、指頭痕が顕著に見られる。8は、甕である。緩やかに外反する口縁部を有し、胴部外面にはハケ目がある。9は、甕である。「く」の字に短く外反する口縁部を有する。10は、甕である。短く外反する口縁部を有する。11は、小型甕である。緩やかに屈曲する口縁部を有し、胴部は球形化していくものと推測できる。調整は外面と口縁部内側に横ナデ、頸部内面には指頭痕が見られる。12は、甕である。短く外反する口縁部を有する。13は、甕である。胴部から長く緩やかに外反する口縁部を有し、調整は摩滅のために、かすかに横ナデが確認できる。14は、広口壺である。外反する口縁の内外面には横ナデの調整がある。15は、広口壺である。口縁端部には凹線文がかすかに見られる。16は、壺である。頸部から胴部にかけて強く張る球形の肩に続くものと思われる。外面は摩滅が激しく、内面は頸部から横ナデ、指頭痕、ヘラケズリが見られる。17は、広口壺である。外反する口縁部の端部を上方に拡張し、口縁端部に3条の凹線文が見られる。内側には櫛描波状文も見られる。18は、高坏である。内面にはミガキが見られる。19は、壺である。複合口縁部であり、内外面には横ナデが見られる。20～25は、弥生土器の底部である。22は、底径4.0cmのあげ底である。23は、底径6.4cmで、内面には指頭痕が顕著に見られる。



第56図 第3調査区 SD02・05出土遺物実測図

24は、体部に少し突出した平底を有する。内面には指頭痕の調整が見られる。25は、胴部との境が不明瞭であるが、平底で、内面には指頭痕の調整が見られる。26～29は、弥生土器の底部である。27は、甕である。球形化する胴部に伴い底部は丸底化する。底部直径は3.5cmを測る。

第4節 第4調査区

第4調査区においては、第1遺構面と第2遺構面を合わせると3基の土坑と25条の構を検出した。それから出土した遺物は、大型のものと小型のビニール袋を合わせて94袋確認できた。その中で固化できるものは、30~147までの118点である(第57~60図)。

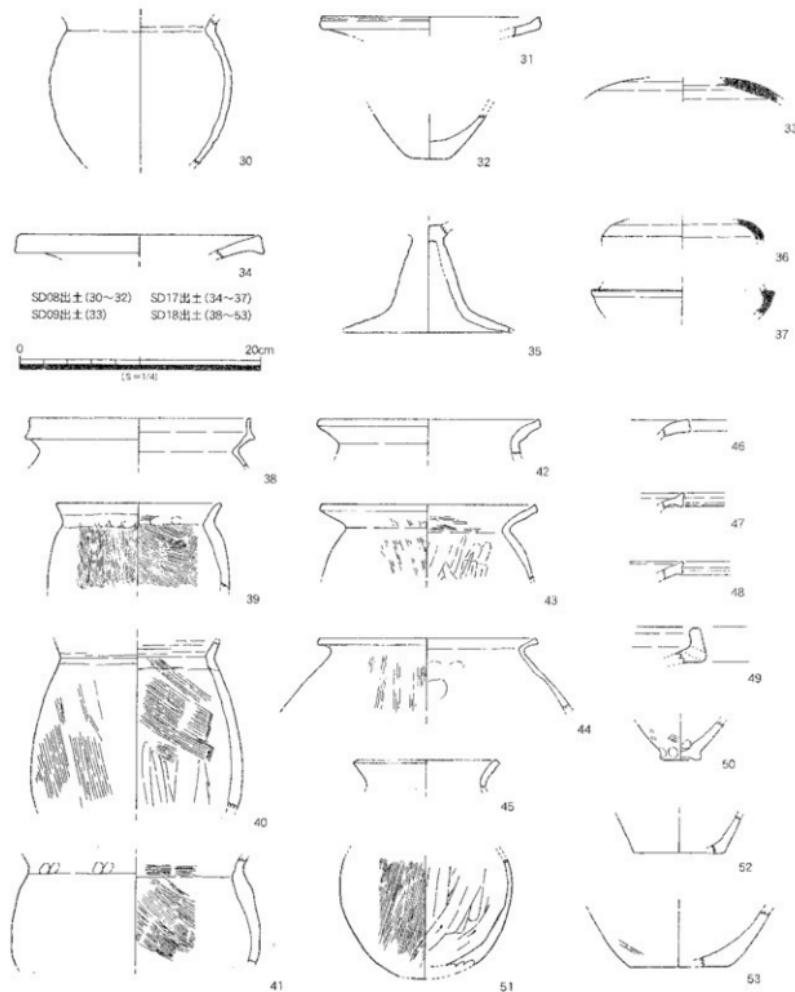
30~32は、SD08から出土している。30は、甕である。胴部の肩の張りが緩やかになり、卵形の胴部に屈曲して外反する口縁部を有する。31は、広口壺である。口縁端部は上方に摘み上げて拡張しており、外面は摩滅が激しく凹線文を1条しか確認できない。32は、弥生土器の底部である。摩滅が激しく調整などは不明である。

33は、SD09から出土している。33は、須恵器の坏蓋である。難輪成形により丁寧な横ナデが見られる。天井部外面にはヘラケズリが施されており古墳時代後期のものと考えられる。

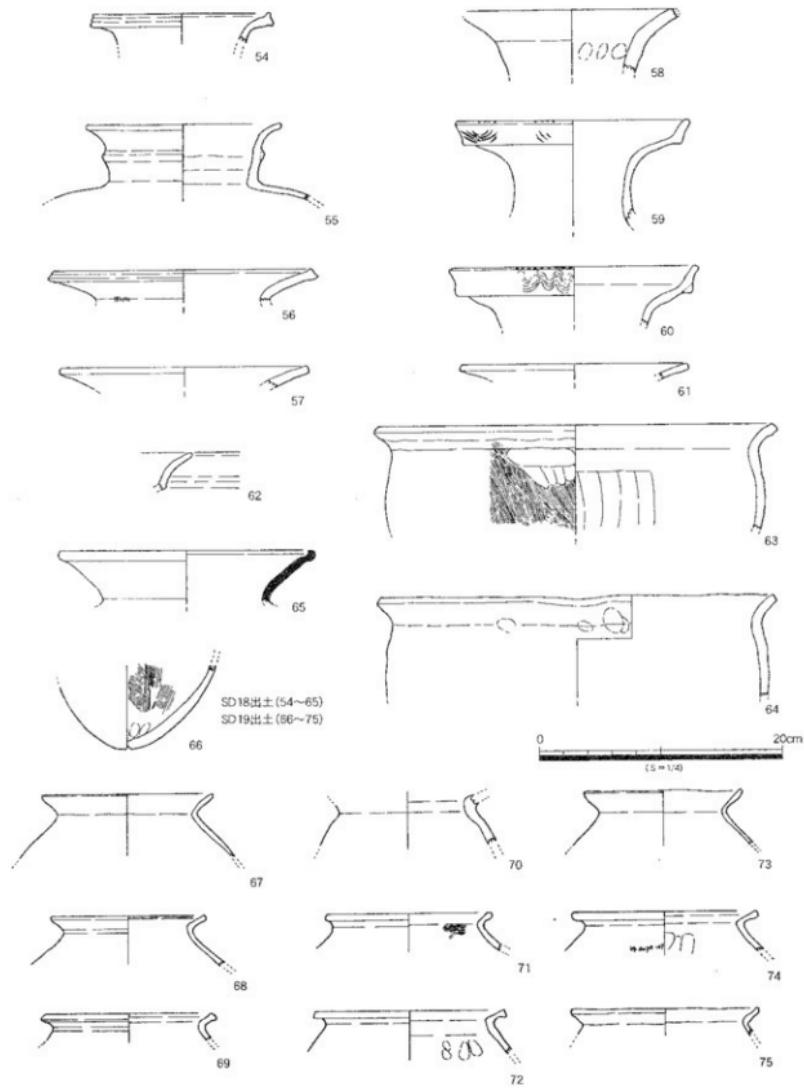
34~37は、SD17から出土したものである。34は、弥生土器の大型広口壺の口縁部である。35は、弥生土器の高杯脚部である。摩滅が激しく調整などは不明である。36は、須恵器の坏蓋である。かえりを持たず、口径は小さく古墳時代後期のものと考えられる。37は、須恵器の坏身である。口縁部の端部立ち上がりは短いものと推測でき、古墳時代後期のものと考えられる。

38~65は、SD18から出土している。38は、甕である。「く」の字に屈曲して口縁部に至り、端部は上下に大きく拡張している。摩滅が激しく調整などは不明である。39は、甕である。胴部から緩く外反した口縁部を形成している。内外面共に丁寧なハケ目が見られる。40は、甕である。長胴化している胴部から緩やかに屈曲し、口縁部は短く外反する。口縁部外面はナデ目、胴部はハケ目が見られる。口縁部内面は横ナデ、胴部上半はハケ目、下半部はナデが施されている。41は、甕である。胴部の肩部が張るもの、口縁部は短く外反して終わる。内面は横方向のハケ目の後、斜め方向に更にハケ目が施されている。外面は頸部に指頭痕が見られる。42は、甕である。外反する口縁端部は、上に少し拡張しており、内外面に横ナデが見られる。43は、甕である。「く」の字に屈曲し、長く伸びながら口縁端部に至る。口縁端部は下方に少し拡張をしている。外面はハケ目の後ナデ消し、内面はハケ目、ヘラケズリの後ナデ調整を行っている。44は、甕である。

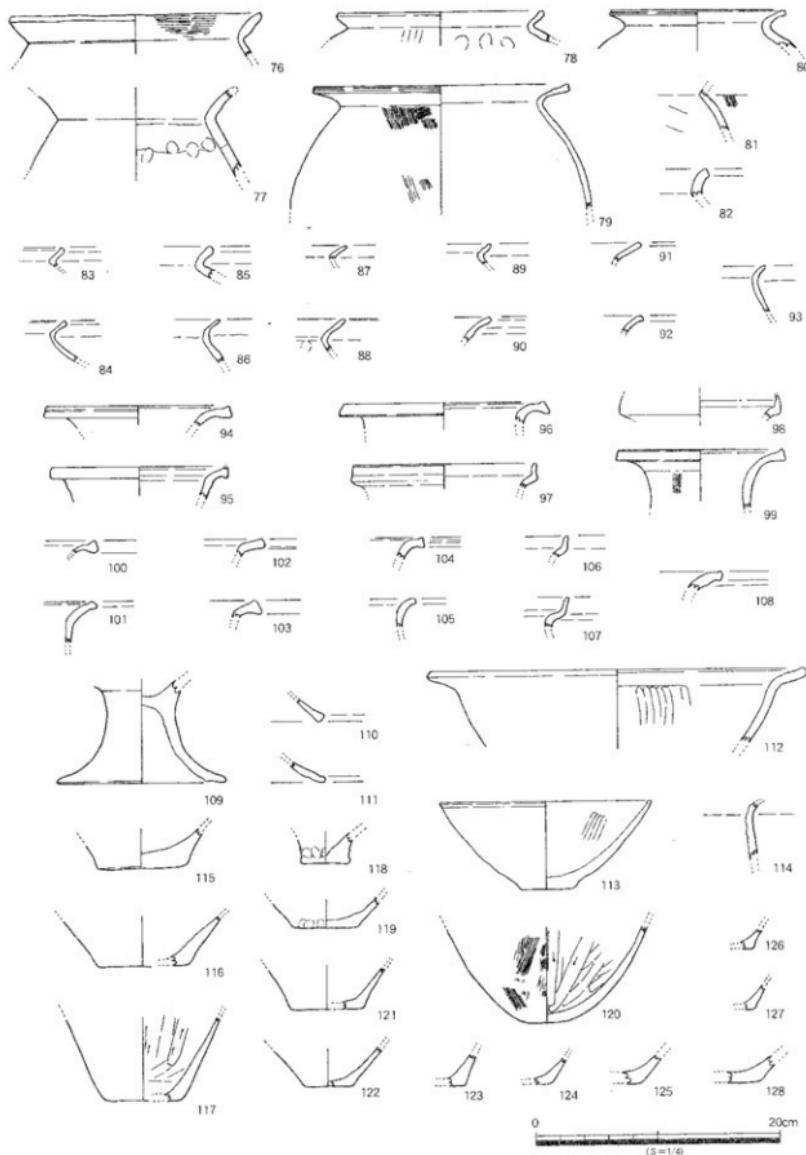
「く」の字に屈曲した口縁端部は下方に拡張し、やや丸身を帯びている。外面にはハケ目、内面には指頭痕が見られる。45は、小型の甕である。屈曲して外上方に伸びる口縁部を有する。内外面にナデ目が見られる。46は、壺である。外反する口縁端部はやや肥厚である。47は、壺である。外上方に伸びる口縁端部は、上下に拡張し、外面には2条の凹線文が施されている。48は、壺の口縁端部である。1条の凹線文が見られる。49は、複合口縁壺である。頸部から伸びた口縁部は強く屈曲し、立ち上がりは短い。やや肥厚で摩滅が激しい。50は、小型の甕である。底部は丸底化する。外面にはハケ目、内面にはナデが見られる。51は、弥生土器の蓋である。外面にはタタキ、指頭痕、内面には指頭痕、ナデが見られる。52は、弥生土器の底部である。摩滅が激しく調整など不明である。53は、弥生土器の底部である。外面にはタタキがかすかに見られる。54は、壺である。直線的に伸びた頸部から屈曲して口縁部に至り、上下に拡張している。口縁端部は2条の凹線文が見られる。内外面共にナデが見られる。55は、広口壺である。胴部から外上方に伸びる頸部から弱い屈曲をしながら口縁に至る。頸部外面には、1条の突蒂文が見られる。全体的に摩滅が激しく調整などは不明である。56は、広口壺である。屈曲して外上方に伸びる口縁部を有し、口縁端部は少し摘み上げられている。内外面ともにナデが施される。57は、広口壺である。口縁部は、屈曲して外上方に伸びる。58は、広口壺である。大きく外反する口縁部を有する。外面はナデが施されており、内面には指頭痕が見られる。59は、広口壺である。胴部より外上方に伸びる頸部は屈曲して口縁部に至る。口縁端部は立ち上がるよう拡張し、外面には櫛描波状文が施されている。口唇部では刻目も見られる。摩滅が激しく調整などは不明である。60は、複合口縁壺である。直線的に伸びる頸部から緩やかに屈曲し、外反しながら口縁部に至る。口縁端部の下方は拡張し、外面には櫛描波状文が見られる。更に口唇部には刻目を施している。61は、広口壺である。屈曲して外上方に伸びる口縁端部である。62は、高杯である。内外面にナデが見られる。63は、鉢である。胴部は内湾気味に外上方に伸び、少し頸部で引き絞めた後、短く折り曲げた口縁部を有する。内面は縦方向の指ナデの後、横方向のナデが施されている。外面は横ナデ、ハケ目を施した後、指ナデを行っている。64は、鉢である。やや直線的に立ち上がる胴部に、やや頸部を引き締めた後、短く屈曲する口縁部



第57図 第4調査区 SD08・09・17・18出土遺物実測図



第58図 第4調査区 SD18・19出土遺物実測図



第59図 第4調査区 SD19出土遺物実測図

を有する。内外面にナデが施され、口縁部の一部を少し外側に開き注口を作り出している。65は、須恵器の壺で、頸部は直線的にやや外反して口縁部に至る。口縁端部は、強く擴み上げられておりやや肥厚である。

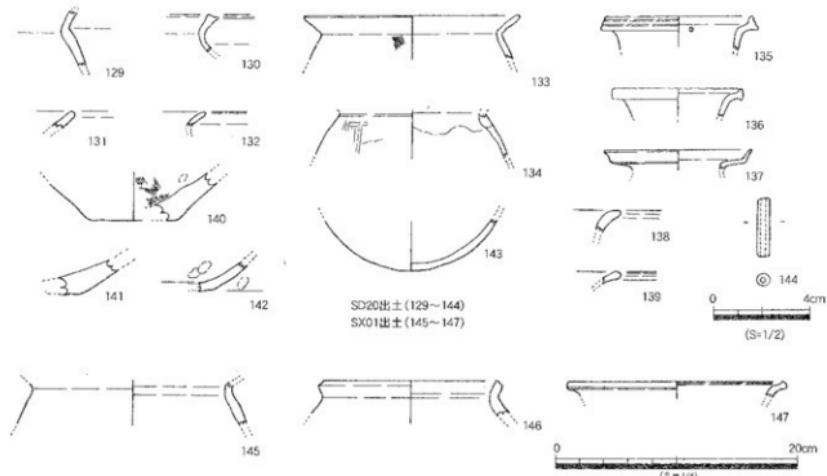
66～128は、SD19から出土したものである。66は、SD19検出時に最上層面から出土している。67～128は、SD19最下層から出土した。

66は、弥生土器の底部である。胴部との境が不明瞭になり、丸底化している。球形化した胴部に立ち上がるものと予測できる。外面の調整はハケ目がうっすらとしか確認できないが、内面ではハケ目、指頭痕が見られる。67は、甕である。「く」の字に屈曲した口縁部を有する。器壁はやや薄く、口縁端部も長めである。摩滅が激しく調整は不明である。68は、甕である。やや短く外反する口縁部である。69は、甕である。「く」の字に短く屈曲する口縁部を有し、端部は少し下方に拡張している。内外面には横ナデが見られる。70は、弥生土器の頸部である。口縁部に立ち上がる部分はとても肥厚である。外面にはナデが施される。71は、甕である。「く」の字に屈曲した口縁部はかなり短く、口縁端部は上下に丸みを帯びて拡張し、内面にはハケ目、外面にはナデが見られる。胎土中にやや多くの角閃石を含んでおりB類系甕の範疇に入るものと考えられる。72は、甕である。「く」の字に短く屈曲する口縁部を有する。口縁端部は下方に拡張しており、胴部内面には指頭痕、口縁部から体部にかけては横ナデが見られる。73は、甕である。「く」の字に屈曲し、やや長い口縁部は、器壁がとても薄く、摩滅が激しい。74は、甕である。「く」の字に屈曲した口縁端部は下方に多く拡張し、外面にはナデ、内面には指頭痕が見られる。75は、甕である。「く」の字に屈曲する口縁部を有する。76は、布留系土鉢器甕である。口縁端部の拡張は目立たず、口縁内側には横方向のハケ目が施されているが、摩滅が激しくうっすらとしか確認できない。77は、甕である。「く」の字に屈曲する口縁部は長く、やや外反している。外面にはナデ。胴部内面には指頭痕が見られる。78は、甕である。「く」の字に短く屈曲した口縁端部である。胴部外面にはハケ目の後ナデ消し、内面には指頭痕が見られる。79は、布留系の土鉢器甕である。胴部が球形化し口縁部が緩やかに長く伸び、口縁端部はやや厚みを帯びるが平坦化している。口縁端部には退化した凹線文が施され、外面にはハケ目調整が見られる。80は、布留系の土師器甕である。短く外反する口縁端部には1条の凹線文を施し、内外面ともに強いナデが見られる。81は、甕の頸部から頭部にかけてである。外面にはハケ目、内面にはヘラケズリが見られる。82は、緩やかに外反する口縁部を有する甕である。83は、甕である。「く」の字に屈曲する口縁端部は短く、上方にやや拡張する。84は、甕である。短く外反する口縁端部は肥厚である。85は、甕である。「く」の字に屈曲する口縁部を有する。86は、甕である。「く」の字に短く屈曲した口縁端部である。87は、甕である。「く」の字に屈曲した口縁端部は短く、摩滅が非常に激しい。88は、甕の口縁端部である。かなり小片である。89は、甕である。「く」の字に屈曲しやや長い口縁部である。摩滅が激しい。90は、甕である。「く」の字に短く屈曲する口縁端部である。外面には横ナデが見られる。91は、甕である。口縁端部の小片である。92は、甕の口縁端部である。摩滅が激しい。93は、甕である。緩やかに外反する口縁端部は短く、摩滅が激しい。94は、壺である。外上方に向かって広がる頸部が屈曲し口縁端部に至る。口縁端部は上方に少し拡張し、退化した1条の凹線文が見られる。95は、壺である。胴部から外上方に向かって広がる頸部を有し、やや屈曲して口縁端部に至る。口縁端部は上下に少し拡張している。内面にはナデが施される。96は、壺である。頸部が直立し、拡張した口縁端部は外下方に摘み出される特徴を有する。97は、複合口縁の蓋である。横ナデが内外面に見られる。98は、壺である。口縁部が直立した後外反し口縁端部が上方に少し拡張する。頸部外面にはハケ目が見られる。99は、甕である。外反する口縁端部は下方に拡張し肥厚である。100は、壺である。直立した頸部から屈曲して外反する口縁端部は下方に拡張している。101は、壺である。直線的に伸びる頸部から外反する口縁端部は下方に拡張している。口縁端部の内面には沈線が巡っている。内外面にはナデが施される。102は、壺である。外上方に向かって広がる頸部は、強い屈曲をして口縁部に至る。摩滅が激しい。103は、壺の口縁部である。直立した頸部から短く外反する口縁部は摩滅が激しく調整などは不明である。104は、壺である。外上方に向かって広がる頸部が短く屈曲し口縁部に至る。口縁端部は上下に少し拡張している。摩滅が激しい。105は、壺の口縁部で、かなり小片である。106は、甕である。口縁端部のみで下方に少し拡張が見られる。107は、甕の口縁部である。108は、壺である。胴部からやや外上方に開き気味に頸部が伸び、屈曲して口縁部に至る。口縁端部は下方に少し拡張している。内外面ともにナデが見られる。109は、高坏の脚部である。摩滅が激しく調整などは不明である。110・111は、高坏の脚部である。112は、大型の鉢である。体部から緩やかに外反して口縁部を形成している。内面にはミガキが見られる。113は、甕の底部である。内面にはミガキが見られる。114は、甕の胴部である。胴部から緩やかに屈曲し口縁部に至る。胎土はかな

り粗く、石英、長石が多く含まれる特徴を有している。115は、弥生土器の底部である。116は、弥生土器の底部である。内面には指頭痕が見られる。117は、弥生土器の底部である。外面はナデ、内面は指頭痕が施されている。118は、弥生土器の底部である。外面には指頭痕とナデが見られる。119は、弥生土器の底部である。直径 5.2 cm を測り、外面には指頭痕とナデが見られる。120は、弥生土器の底部である。やや丸みを持ち、ハケ目の後ナデ消されており胴部との境が不明瞭になっている。胴部は球形化していくものと予測できる。胴部外面はハケ目、内面は指ナデが施されている。121～128は、弥生土器の底部で摩滅が激しく調整などは不明である。

129～144は、第2遺構面で検出したSD20から出土したものである。129は、壺である。「く」の字に屈曲してやや外反気味に口縁部に至る。内外面ともに摩滅が激しく調整は不明である。130は、壺である。胴部からそのまま外反して口縁部に至る。端部は下方に拡張している。外面には、ナデが見られる。131・132は、壺の口縁端部の小片である。摩滅が激しく調整は不明である。133は、壺である。「く」の字に屈曲する口縁部を有し、外面にはハケ目、ナデが見られる。134は、壺の胴部である。外面にはハケ目が見られる。内面は表面剥離により調整は不明である。135は、壺である。胴部から外上方に直線的に伸びる頸部から屈曲して口縁部に至る。口縁端部は上方に拡張し、2条の凹線文を施している。内面には円形浮文が1ヶ所貼り付けられている。136は、壺である。頸部は外上方に開き気味に屈曲し口縁部に至る。口縁端部は上下に拡張している。摩滅が激しく調整などは不明である。137は、複合口縁の壺である。直立する頸部から強く屈曲し、外反しながら口縁に至る。摩滅が激しく調整は不明である。138は、壺である。頸部から外反して短い口縁部を形成している。摩滅が激しく調整など不明である。141・142は、弥生土器の底部である。143は弥生土器の底部で、胴部との境が緩やかとなり丸底化されている。内面にはヘラケズリが見られる。144は、管玉である。白濁したオリーブ色を呈した碧玉製である。両面穿孔と思われ、小口部分は丁寧に研磨されており、研磨痕も見られる。直径は 5.0～5.5 mm、長さは 24 mm である。

SX01は、第2遺構面検出時にSD20付近で出土したもので、不明遺構として扱った。145は、壺である。胴部から屈曲して外反する口縁部である。146は、壺である。胴部から短く屈曲した口縁部に至る。内外面ともにナデが見られる。147は、壺である。やや外反して伸びる頸部から短く屈曲した口縁端部は上方に少し拡張している。摩滅が激しく調整などは不明である。



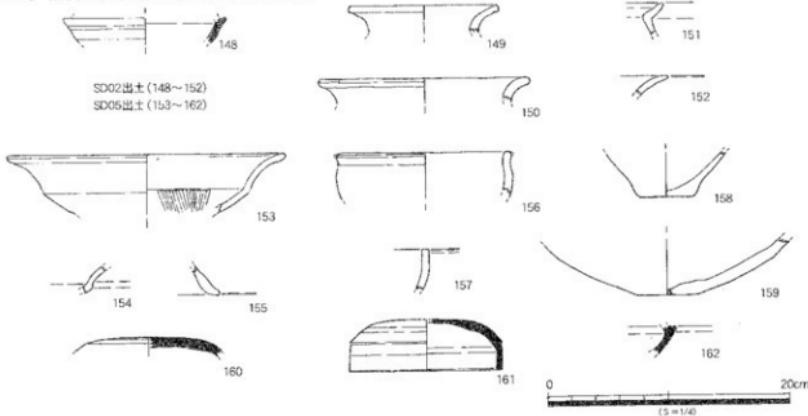
第60図 第4調査区 SD20・SX01出土遺物実測図

第5節 第5調査区

第5調査区では、溝を5条検出したが、それらから出土した遺物は比較的少なく、小袋のビニール袋で28袋しか確認できなかった。その中から図化できるものは15点であった。

148～152は、SD05から出土したものである。148は、SD02から出土した須恵器の坏身である。かえりを持ち、古墳時代後期のものと考えられる。149は、小型の甕である。頸部から屈曲して外反する口縁端部は、下方に少し拡張している。150は、甕である。頸部から屈曲して短く外反する口縁部である。151は、甕である。「く」の字に屈曲する口縁部である。152は、甕である。大きく外反する口縁部の器壁は薄い。外面にはナデが見られる。

153～162は、SD05から出土したものである。153は、高坏である。坏部は浅く、明瞭に外反する口縁部を有する。内面にはミガキ、横ナデが見られる。外面は摩滅が激しく、調整は不明である。154は、高坏の胴部である。155は、高坏の脚部である。摩滅が激しく調整などは不明である。156は、鉢である。直立気味に立ち上がる口縁部を有し、口縁端部は外側に拡張する。157は、直口鉢である。口縁部外面には、1条の凹線形が見られる。158は、弥生土器の底部である。平底から半球状に立ち上がっていくと思われる胴部を有する。摩滅により調整は不明である。159は、弥生土器の底部である。胴部との境がやや明瞭で底径も小さい。摩滅が激しく調整などは不明である。160は、須恵器の坏蓋である。天井部外面には回転ヘラケズリを施している。古墳時代後期のものと考えられる。161は、須恵器の坏蓋である。口径は12.4cm、器高4.2cmを測る。口縁部は垂下し、天井部と口縁部の境に断面は三角形の稜線を施している。端部はわずかに内傾する面を持ち、段を有する。古墳時代後期のものと考えられる。162は、かえりをもつ須恵器の坏身である。古墳時代後期のものと考えられる。



第61図 第5調査区 SD02・05出土遺物実測図

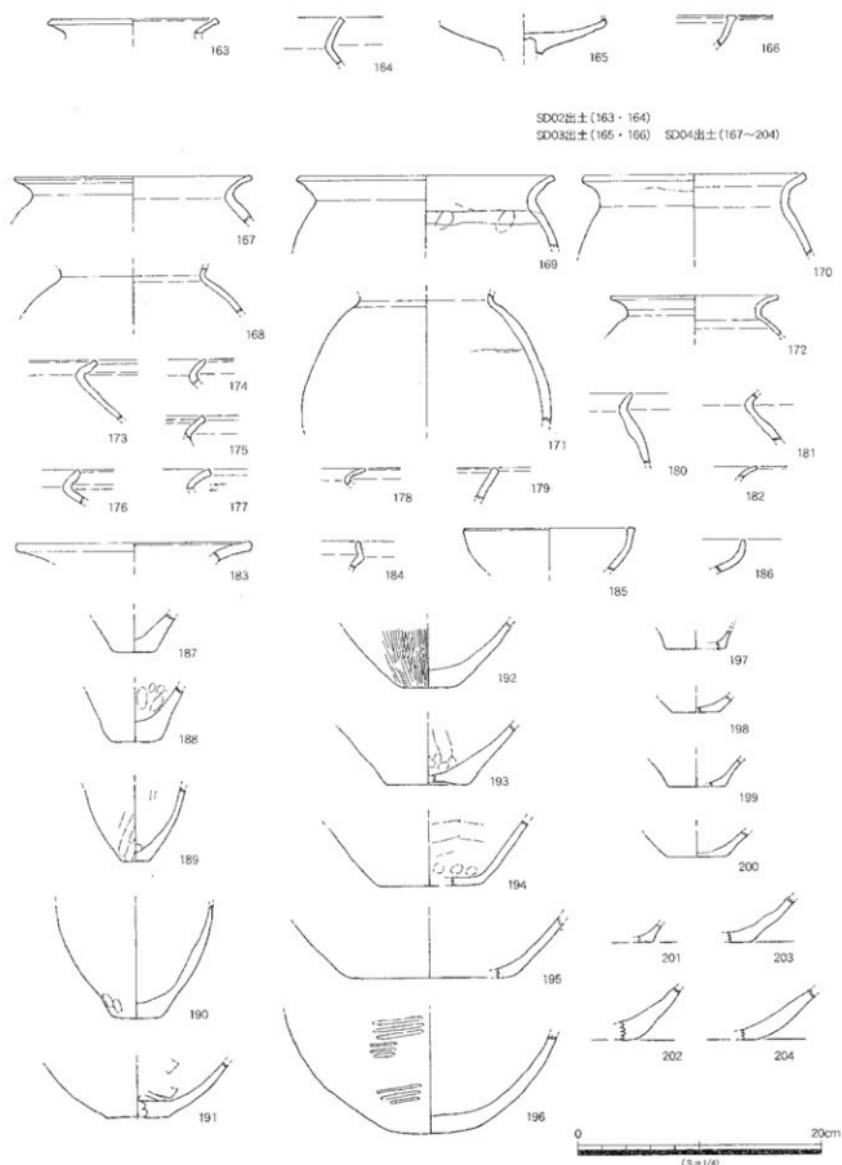
第6節 第6調査区

第6調査区では溝4条を検出した。これらから出土した遺物は、大小のビニール袋で56袋であった。その中から図化できたものは42点である。

163・164は、SD02から出土したものである。163は、甕である。外反する口縁端部は、上下に拡張している。口縁部内面にはナデが見られる。164は、甕である。胴部から「く」の字状に屈曲し外反して口縁部に至る。摩滅が激しく調整は不明である。

165・166は、SD03から出土したものである。165は、高杯である。脚部から外上方に直線的に伸び、屈曲して直立する口縁部に至る。摩滅が激しく調整などは不明である。166は、鉢である。やや半球状の体部から伸びる口縁端部は左右に拡張している。

167～204は、SD04から出土したものである。167は、胸部から屈曲して外反する口縁部である。端部はやや肥厚で丸みを帯びている。168は、甕である。丸みを帯び胴部から屈曲して口縁部に至る。口縁端部は剥離しているため不明である。169は、甕である。肩の張りが緩やかになり、少し丸みを帯びる。頭部は屈曲し、外反する口縁部を有する。口縁端部は、下方にやや拡張している。内面には指頭痕、外面にはナデが見られる。170は、甕である。肩の張りが緩やかになり、少し丸みを帯びた胴部からやや外上方に立ち上がる頸部を有しながら外反する口縁部に至る。外面にはナデが見られる。171は、甕である。胴部からわずかに直立した後、外反して口縁部に至る。胎土中に多くの角閃石を含んでいることからB類系土器の可能性がある。172は、甕である。卵形の胸部から屈曲して口縁部に至る。全体的に摩滅しており、外面には、かすかにハケ目後にナデを施している。173は、甕である。直線的な胸部から「く」の字に屈曲する口縁部に至る。口縁端部は下方に少し拡張している。174・175は、共に甕である。「く」の字に屈曲する口縁部は、短く外反している。176は、甕である。胸部から屈曲した口縁部は短く外反している。177は、甕の口縁部である。短く外反する。全体的に摩滅しており、内面の調整は不明、外面はかすかにハケ目が見られる。178は、甕の口縁部小片である。摩滅が激しく調整などは不明である。179は、壺である。外反する口縁部を有する。180は、小型の甕である。腹部から屈曲して外反する口縁部は短く、胴部内面には指頭痕が見られる。181は、甕である。「く」の字に屈曲した頸部から口縁部を形成している。胴部内面には指頭痕が見られる。182は、甕の口縁部小片である。摩滅が激しく調整などは不明である。182は、広口壺である。外上方に直線的に伸びる口縁部を有する。内面は摩滅しており調整は不明である。外面にはハケ目が見られる。184は、複合口縁を有する壺である。内外面ともにナデが見られる。185は、鉢である。やや浅めの半球状の胸部を有している。186は、小型の鉢である。浅い胸部を有している。187は、弥生土器の底部である。188は、弥生土器の底部である。肥厚な平底で、内面は指頭痕が見られる。外面の調整は、摩滅により不明である。189は、小型の甕である。胸部は細く長胴化し、平底の底径は小さい。底部内面には指頭痕、外面にはナデが見られる。190は、甕である。平底からやや砲弾状に伸びる胸部は、摩滅が激しく調整などは不明である。底部外面上には指頭痕が見られる。191は、弥生土器の底部である。やや浅めの半球状の胸部に少し突出した平底を有する。内面にはヘラナデ、外面にはナデが施されている。192は、弥生土器の底部である。平底から外反する胸部外面上にはやや粗いハケ目が施されている。193は、弥生土器の底部である。少し上げ底にされている。外面は摩滅しており、調整は不明である。胸部内面は指ナデ、底部中央部は指頭痕が見られる。194は、弥生土器の底部である。平底から外上方に伸びる胸部は直線的である。器壁は薄く、内面には指頭痕、ヘラナデが見られる。195は、大型の弥生土器の底部である。196も弥生土器の底部で、平底ではあるが、胸部との境が緩やかとなり、丸底化がうかがえる。そこから伸びる胸部は球形化していくものと思われる。内面は摩滅により不明瞭ではあるが、うっすらとハケ目が見られ、外面には横方向のミガキが施されている。197～199は、弥生土器の底部である。摩滅により調整などは不明である。200は、弥生土器の底部である。胎土中に雲母片を少量含んでいる。201～204は、弥生土器の底部である。摩滅が激しく調整などは不明である。



第62図 第6調査区 SD02・03・04出土遺物実測図

遺 物 観 察 表 凡 例

1. 遺物観察表は、遺物種類に分類し、土器、玉類に分けて作成した。
2. 番号は、本文中の遺物番号を示す。
3. 土器の口径と底径については、図上復元による数値を（ ）で示し、器高は残存する部分を全て数値化して記載した。
4. 土器、玉類の整形及び調整の特徴については、異なる部位に同一技法の痕跡が観察できるときには一括して記載した。但し、並記された方向性を示す字句の配列は、技法の前後関係を表さない。
5. 土器の胎土については、含有する砂の粒子の大きさと砂の量を中心に観察した。
6. 土器、玉類の発色状態を表現するために、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖2004年版』を使用した。
7. 土器の残存量は、図化作業時において図上復元による口縁部及び底部を8分割し、残存部分が占める割合を表している（例「口縁部1／8」）。残存量が1／8未満の場合は、小片と記載した。
8. 遺物のうち、土器様式の分類から布留式土器や下川津B類系土器に比定することのできる弥生土器については、備考欄に「布留」、「B類」と記載した。

遺物番号	分類	時代	性別	年齢	遺物名	組合せ	位置	材質	測定値		測定者	記述
									長	幅		
107 59 13	生活用器	金	男	45歳	SD19	—	2.8	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
108 59 18	生活用器	金	女	SD19	—	—	1.9	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
109 59 18	生活用器	金	女	SD19	—	—	15.5	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
110 59 15	生活用器	銀	男	SD19	—	—	1.9	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
111 59 16	生活用器	銀	男	SD19	—	—	1.6	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
112 59 13	生活用器	銅	男	SD19	—	—	1.6	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
113 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	1.9	(4.0)	16.0	1.1	子	1979年1月29日
114 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	1.8	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
115 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	1.9	(0.5)	16.0	1.1	子	1979年1月29日
116 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	4.0	0.70	16.0	1.1	子	1979年1月29日
117 59 12	生活用器	銅	男	SD19	—	—	6.8	0.40	16.0	1.1	子	1979年1月29日
118 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	2.6	0.45	16.0	1.1	子	1979年1月29日
119 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	2.6	0.45	16.0	1.1	子	1979年1月29日
120 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	7.7	1.40	16.0	1.1	子	1979年1月29日
121 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	3.4	0.50	16.0	1.1	子	1979年1月29日
122 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	3.2	0.40	16.0	1.1	子	1979年1月29日
123 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	2.6	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
124 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	2.2	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
125 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	3.3	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
126 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	1.6	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
127 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	2.3	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
128 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	9.2	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
129 59 18	生活用器	銅	男	SD19	—	—	4.8	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
130 60 60	生活用器	銅	男	SD19	—	—	8.1	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
131 60 10	生活用器	銅	男	SD19	—	—	1.3	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
132 60 10	生活用器	銅	男	SD19	—	—	1.3	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
133 60 10	生活用器	銅	男	SD19	—	—	11.0	0.30	16.0	1.1	子	1979年1月29日
134 60 10	生活用器	銅	男	SD19	—	—	11.0	0.30	16.0	1.1	子	1979年1月29日
135 60 10	生活用器	銅	男	SD19	—	—	4.6	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
136 60 20	生活用器	銅	男	SD19	—	—	11.0	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
137 60 20	生活用器	銅	男	SD19	—	—	11.0	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
138 60 20	生活用器	銅	男	SD19	—	—	11.0	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
139 60 20	生活用器	銅	男	SD19	—	—	11.0	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
140 60 20	生活用器	銅	男	SD19	—	—	11.0	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
141 60 20	生活用器	銅	男	SD19	—	—	10.0	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日
142 60 20	生活用器	銅	男	SD19	—	—	11.0	—	16.0	1.1	子	1979年1月29日

卷之十二

第5章 まとめ

以上が、大型ショッピングセンター『ゆめタウン丸亀』建設に伴う新田橋本遺跡確認調査による遺構、遺物の内容である。第3章・第4章では、調査区毎に報告をしたことに伴い、遺構番号については調査区毎に設定しているので、ここで全調査区をとおして整理するに際し、遺構番号を変換し、新規番号とした。変更前後の遺構番号を対比できるよう、第3表にまとめた。

調査区	旧遺構番号	新遺構番号	遺物	備考
1区	SD01	SD03・15	○	
	SD02	SD03		
	SD03	SD09		
2区	SD01	SD03・15	○	
	SD02	SD14		
3区	SD01	SD01		
	SD02	SD10・16	○	
	SD03	SD17	○	
	SD04	SD19・20	○	
	SD05	SD03・15	○	
4区	SD01	SD21		第1遺構面
	SD07	SD22		
	SD08	SD19	○	
	SD09	SD17	○	
	SD10	SD01		
	SD11	SD17		
	SD13	SD18	○	
	SD14	SD17		第2遺構面
	SD15	SD10・16	○	
	SD16	SD10・16		
	SD17	SD10・16		
	SD18	SD11・15	○	
	SD19	SD04	○	
	SD20	SD05		
5区	SD22	SD01		
	SD23	SD07		
	SD24	SD12		
	SD25	SD03・15		
	SD26	SD11・15		
6区	SD01	SD01		
	SD02	SD01・17	○	
	SD03	SD02	○	
	SD04	SD02		
	SD05	SD10・16	○	
7区 1・2レンチ	SD01	SD18		
	SD02	SD04	○	
	SD03	SD08	○	
	SD04	SD04	○	
8区 1レンチ	SD01	SD12		
2レンチ	SD01	SD12		
3レンチ	SD01	SD13		
4レンチ	SD01	SD19		
	SD02	SD20		

第3表 遺構番号変換表

第1節 時代区分

新田橋本遺跡確認調査では、全調査区を通じて大小の溝を多く検出することができた。ほとんどの遺構が水田耕作土直下で検出できたこと、粘土採掘痕跡が見られることからも、本来の遺構面は残存していないことが容易に推測できた。部分的にではあるが、試掘調査成果から遺構面が2層となっている区域が認められたことから、最低2時期に分類できることがわかつっていた。今回の調査では、遺構の切り合い状況や断ち割り断面観察、包含遺物の観察などから、7期に細分することができた。各時代に削平等の影響を受けていることから、遺構の残存率は不明な点が多いが、確認できた時代区別に概要を記述する。

第1段階（弥生時代後期以前）

新田橋本遺跡確認調査で確認された遺構で、最も古い時代に属する段階である。第3調査区南西端から第5調査区北東端まで、南北軸でほぼ一直線に延びる細い溝（SD01）が確認されている。全体的に遺構深度が浅く、希薄な状態であることは否めない。完全な状態で残されているとは考え難く、後世の削平等による影響を受けているものと思われる。

遺物が包含されていないことから時期の特定には至らないが、他の遺構との切り合い状況から考えると、この次に確認される第2段階が弥生時代後期に属することからも、それ以前ということになる。

第2段階（弥生時代後期）

第1調査区南西端から第5調査区北東端付近に向けて、南北軸に延びる天幅3m超の大型の溝SD03が設営される。立地が西汐入川右岸に位置する微高地上であり試掘調査時にその他の区域ではこのような溝は検出されていないことから考えると、この溝は当該微高地上における基幹となる水路であることが推察される。東西の低地からは、この微高地上に水を引き込むことが比高の関係から不可能であることからも、かなり上手に水源を持つことがうかがえる。

SD03について、底レベルを見ると途中で高まりを持つ部分があることが確認できる。逆に言えば、深く溝まりになっている箇所が認められる。これについては、この段階の造作であるか次の第3段階によるものかの判定ができない。いずれにせよ、次の第3段階にも共通していることから、第3段階の節で記述する。

SD03は、第4調査区の北半部で分岐し北北西に延びる溝（SD04）と北に延びる溝（SD05・SD06）となる。SD05は、更に第6調査区でSD08と分岐するがすぐさまSD04と合流する。SD04は、第6調査区内で終息する。底レベルを見ると、中央がやや壅んでおり、北方に向けて高くなっていることから、SD03に向けて引き込むためのものである可能性が高い。埋土には弥生時代後期所産の高坏片等比較的まとまった土器が包含されていた。

SD05はSD03とSD06の接続部に位置し、東端は急激に底レベルが下がる。埋土から憩玉製の管玉が出土している。SD06は、埋土状況から複数期に属していると思われるが、下半部や肩口の溜まり部では弥生時代後期の土器がまとまって出土する。

第1段階に設営されたSD01は、第2段階においても継続している。第5調査区の北部で西方に分岐した溝SD02がSD06に注ぎ込むように接続する。

第3段階（弥生時代後期～古墳時代前期）

第2段階で第6調査区からSD03に接続していたSD04は北方から埋没し、終息に近づくが、第4調査区内に位置する部分は、かろうじて利用されていたようである。これは、SD04のSD03に程近い付近に古墳時代前半期に属する土師器（布留式土器）の甕片が出土していることから考えられるものである。

恐らく、第2段階で述べたSD03の底面の起伏についてはこの段階に施工されたものと考えられる。第3

段階の溝の配置プランを見ると、第2段階と同様に第1調査区の南端から延びてくるSD03は、第4調査区の中央で大きく右回りの弧を描く溝SD11となり第3調査区に向かって折り返しSD10となっている。折り返したSD10は、第3調査区の南端付近で東西両岸にヒレ状の張り出しを備えている。そして更に南方に延びている。また、SD10は、第4調査区中央の折り返した地点から北方にも延び、第5調査区のSD10へ接続している。この段階で、第4調査区の北部でSD10に流水を注ぎ込んでいたSD05は埋没し、機能していない。

SD11は、第4調査区中央のSD03とSD10をつなぐ溝であるが、SD03とSD11の合流点で北西方向のSD12を分岐する。SD12は、第8調査区の北西端まで延びていることが確認されており、更に延びていくことが予想される。

第3段階における造構平面プランは以上である。一見、並行して延びるSD03とSD10が第4調査区中央で合流し、SD03からSD12が分岐しているだけの単純なものであるが、溝の底面の起伏状況を併せて考察すると非常に複雑な仕組みとなっており、推測ではあるが次のように考えることができる。

底面の起伏部分に何があるのかを見ると、ほぼ溝の分歧点や合流点と合致している。このことから、溝に起伏をつけ、著しい高低差を設けることによって堰の役割を持たせていると考えることができる。

SD03から細かく見ると、第1調査区南端底レベルが標高5.9mであるが北に10m程進むと標高6.13mのピークを持ち南端からは0.2m以上上がる。このピークから北は、標高5.9mまで下るが、第2調査区南端では標高6.3mまで上がる。のことから、南方からSD03に流れ込む水は、標高6.13mを越すことにより北方に流れ込むことになるが、標高6.3mに達するまでは第2調査区の南端より北方に流れ込むことはない。途中、水位が6.2mに達した時点で第1調査区北端のSD09に注ぎ込みが始まり、東方への流入を行うこととなる。今回の調査ではないが、後に第1調査区の東側の区域で調査を行った結果、SD09から通じると考えられる溝が確認され第3調査区のSD10から南方に延びる溝と接続していることが確認されている。また、このSD10の延長の溝は、接続地点の南側で標高6.8mのピーク部が確認されたことから、水位が6.3mに達するまではSD03の水はSD09を介して第3調査区のSD10に流れこむことになる。そして、そのままSD10を通じて北方に延びる溝が基幹水路となるようである。SD03の第2調査区の中央部より北側には、水位が6.3mを越すまでは南からの水は流れ込まない。

次にSD09を介して水が流れ込んでくるSD10であるが、第3調査区の南端部でヒレ状の張り出しを持つ部分で若干の溜まりを持つが、水汲み場であると考えられるものの詳細は不明である。ヒレ状の張り出しおよび北側は、一貫して北方に下っていることからも水は純粋に流れているものと思われる。第4調査区に入つても、SD10はほぼ北下りの勾配で一貫している。第4調査区の南半部ではやや東に膨らみを持ちながら西方へ弧を描く。中央部で屈折し北方へ延び第5調査区へと続く。SD10は、南半部でSD11と接続しているが、SD11の入口で瘤状のピークを持ち、小規模の堰機能を持たせているようである。但し、このヒレ状の両袖には小さい瘤溝状の切込みがあり、ごく僅かの水はSD11に落とし込めるようになっている。つまり、水量を極端に絞り込んでSD11への取水を行っているようになっているのである。

SD10から側溝を介してSD11に入り込んだ水は、SD11内を這って左に回り込む。そこでSD12との合流点に到達するが、この合流点の南はSD05となっており底面には0.2m程度の壁が設けられていることによつて水位が6.06mに達するまでは少量の水がSD12に流れ込んでいるものと考えられる。

SD12は、第7調査区内は勾配が緩やかであるが第8調査区に入ると勾配がきつくなる。

これらのことから、第3段階における溝のプランとしては、要所に堰機能を持たせており、水量によって配水の優先順位がつけられているものと考えられる。また、水量によっては、ヒレ状の張り出し部や水量を絞り込んで取水することによって利用しやすくしていることが想定される。

遺構の検出面は、第2段階のものからは0.1mほど高くなっているが、埋土から出土する遺物は、ほぼ弥生時代後期に属しているが、SD04で布留式土器の土師器片が出土していることから弥生時代後期後半期から古墳時代前期にかけての幅を持ち、その中で埋没していたものと考えられる。

第4段階（古墳時代後期）

古墳時代中期頃の状態は、遺物の出土が無いことから不明である。調査で確認できる第4段階としては、第3段階のSD03・SD10・SD11とほぼ同じ位置に規模の小さい溝が設営されることとなる。第3段階の溝が継続していることも考えられるが、断面観察から判断すると明らかに掘り直しが成されていることから、水の利用に沿った改修が行われているものと考えられる。この段階になると、第4調査区から第7調査区を通って第8調査区まで延びていたSD12は埋没し機能しなくなっているようである。水路規模も小さくなっていることは、水利における用途に変化が見られていることを示すものと考えられる。

第4調査区の南端からSD16が延びているが、遺構の切り合い等は確認できなかつたが、SD16の南端部付近から派生するであろうと思われる溝SD17がSD16の東側に並行して北方に延びている。第5調査区内のSD17からは、須恵器の坏身片が出土しており古墳時代後期に属するものと考えられる。これらは、合流点が確認されていないが、埋土が同様でありSD16でも須恵器の坏身片が出土していることから、同時期に属すると考えることが適当であると思われる。

第5段階（古墳時代後期以降）

第5段階になると、この地域における遺構は、極端に密度が薄くなり衰退傾向にあると思われる。区域内で確認できたのは、渓4条のみであり、いずれも幅60cm前後を測るものとなる。各溝の配置状況から考えると、基本的に基幹となるのは南北軸で延びるSD17であると思われる。SD17からSD19及びSD18が西方に分岐していることがうかがえる。東方への分岐は、今回の調査では認められなかった。埋土からは、弥生土器片が出土するが、遺構の切り合い状況の観察から第4段階の遺構よりも上になっていることから、古墳時代後期以降の遺構であると考えられる。

第6段階（古墳時代後期以降）

第6段階では、第5段階と類似しているが、西方に延びていたSD19が無くなる。SD17は、若干であるが法線に変化が見られる。SD17の第3調査区域部分では、南方から新たな溝SD19及びSD20の接続が見られる。厳密には、検出された遺構は、途切れしており継続されていなかつたが、これは遺構深度の浅い部分が後世の削平によって消失してしまっている結果であると考えられる。

SD17の法線の違い部分の切り合い状況から、第5段階よりは新しくなることが明らかであるため、第6段階に分類した。明確な遺物の出土が見られないことから、時代の特定は困難である。

第7段階（古墳時代後期以降）

第7段階は、新田権本遺跡として最終期となる段階である。この段階になると、確認できる遺構は極端に少なくなる。まず、SD17とSD18が埋没することによって基幹水路は無くなる。第6段階で現れたSD19及びSD20が埋まりきらずに残るが、機能していたとは考え難い。

第4調査区の西面付近で新たにSD21及びSD22が設けられている。これらの溝は、法縫が対応することから、本来は同じ溝であると思われるが、残存している部分が希薄で、遺構深度の浅い部分については、後世の削平で消失してしまっていると考えられる。

出土遺物が認められなかつたことから時代の特定は困難である。

以上が、遺構及び遺物の確認状況から分類した各時代の状況である。

第2節 遺跡の評価

今回の調査で確認された遺構は、大小の溝を主体としたものであり、小土坑が若干認められるものの建物遺構等は発見されなかった。遺構の分布結果だけを見ると、集落の所在を否定することになるが、今回の調査区域については幾度かの削平を受けていたことが確認できた。それは、第3調査区の南半分では第1遺構面が消失してしまっていることや第1調査区では明確な採土痕跡を確認できたこと、第1遺構面に属する遺構は、深度が浅く途切れた状態で検出されることが多いことなどから推察することができる。

新田橋本遺跡では、溝が多く配置されていることからも、住居は、比較的小高い位置に区域に配置することが予想される。このことを含めて推察すると、住居部分についてはそのほとんどが消失してしまっていることも考えられる。溝の埋土内から多くの土器片が出土することからも、遺跡種別としては集落跡として考えることが適当であると思われる。

次に、地理的環境から考える新田橋本遺跡の位置付けである。新田橋本遺跡は、先代池の北北西に伸びる微高地に所在する遺跡であり、その西側には西汐入川の所在する低地、東側には今津町との境界部にあたる低地が並行している（第1図参照）。新田橋本遺跡で確認された第2段階、第3段階の溝には、相当量の水が流れ込んでいることが予想されるが、比高の関係から東西の低地からの引き込みは不可能である。よって、少なくとも先代池付近より以南からこの低丘陵上に水を引き込むために設置されたものと考えられる。特に第3段階に属する溝は、新田橋本遺跡部分で堰機能を持たせることによって計画的に配水していることが考えられる。新田橋本遺跡より北方には、しばらく平野が広がっていることからも、この平野部へ水を配水するための重要な地域が新田橋本遺跡となっている。この溝は、堰機能を持たせることで計画的な配水を行っていることから、農業生産施設に関するものと考えることができるが、今回の調査では、各溝の末端状況が確認できないことから詳細は不明である。

遺跡の密度から考えると、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺構、遺物が共に顕著であることから、当該期が新田橋本遺跡の年代と考える。

第3節 まとめ

以上、新田橋本遺跡確認調査の成果を報告した。弥生時代後期から古墳時代後期を中心とした集落跡であることを確認することができた。発見された遺構としては、ほとんどが大小の溝であり住居等の建物は確認されていない。発見された遺構からは、各時代の遺物が出土している。包含層をほとんど有しないことや溝の掘り直しによって再利用されていることにより、全調査を通じての遺物出土量はコンテナで7箱だけであった。

後世の改変により、旧状を留めていない部分が多く不明な点も多く残されているが、堰機能を持つ溝により計画的な配水を行うための重要な地域であることなど、今回の調査によって貴重な資料を得ることができた。

しかし、溝の末端付近の状況等が今回の対象区域内の調査では確認することができなかつたため、各溝の本来の用途については特定するに至らなかつた。

今後は、今回の調査成果を有効に活用し、周辺地域、特に北部地域で調査する際には注意深く観察し、今回の調査で解明できなかつた部分の解明に努めたい。



第1段階



第2段階



第3段階



第4段階

第63図 遺構変遷図(1)



第5段階



第6段階



第7段階

第64図 遺構変遷図(2)

<参考文献>

- 北山健一郎・森下友子 1995.3『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 太田下・須川遺跡』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局)
- 大久保徹也・森格也 1995.12『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 上天神遺跡』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局)
- 藤本晋司 1999.3『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十二冊 中間西井坪遺跡Ⅱ』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団)
- 松木和彦 2001.10『国道193号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 間清水遺跡』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター)
- 森格也 2007.9『県道多度津丸亀線緊急地道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 今津中原遺跡』(香川県教育委員会)
- 宮崎哲也 1991.11『県道多度津丸亀線緊急地道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 道下遺跡』(香川県埋蔵文化財研究会)
- 藤好史郎 1982.3『中の池遺跡発掘調査概要 一香川県丸亀市金町所在の弥生時代遺跡の調査』(丸亀市教育委員会)
- 松木登胤・舟井真美 1998.12『中ノ池遺跡 丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I』(丸亀市・松木考古学研究所)
- 松木登胤 2000.3『中ノ池遺跡 丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 II』(丸亀市・松木考古学研究所)
- 佐藤亞聖 2003.3『中の池遺跡 第8次調査一 総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(丸亀市教育委員会)
- 佐藤亞聖 2004.3『中の池遺跡 第9・10次調査一 総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(丸亀市教育委員会)
- 佐藤亞聖 2005.3『中の池遺跡 第11次調査一 総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(丸亀市教育委員会)
- 佐藤麗聖 2006.3『中の池遺跡 第12次調査一 総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(丸亀市教育委員会)
- 佐藤麗聖 2008.3『中の池遺跡・平島東遺跡 一中の池遺跡第13次調査・平島東遺跡第3次調査一 総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(丸亀市教育委員会)
- 大島和則 2003.9『香川県済生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡(済牛会)』(高松市教育委員会・社会福祉法人恩賜済生会又福香川県済生会)
- 大島和則 2006.8『特別養護老人ホーム「なでしこ香川」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡(済牛会特養ホーム)』(高松市教育委員会・社会福祉法人恩賜済生会又福香川県済生会)
- 大久保徹也 2003.3『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料』(財団法人大阪府文化財センター)
- 大久保徹也 2006.3『古式土師器の年代学』(財団法人大阪府文化財センター)
- 近藤武司 1996.3『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度 行本遺跡』(香川県教育委員会)
- 近藤武司 1996.3『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度 佐古川遺跡』(香川県教育委員会)
- 片桐孝浩 1992.8『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十一冊 三条番ノ原遺跡』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団)
- 和田義子 1993.11『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十二冊 郡家一里尾遺跡』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団)
- 山下平重 1993.11『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十三冊 郡家原遺跡』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団)
- 横瀬常雄 1995.3『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十七冊 郡家大林上遺跡』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団)
- 山下平重 1996.3『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十冊 飯野・東二瓦窯遺跡』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団)
- 片桐孝浩 1996.3『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十二冊 川西北・七条Ⅱ遺跡 川西北・飯治屋遺跡』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団)
- 佐藤竜馬 1996.10『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十四冊 郡家田代遺跡』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団)
- 森下英治 1997.9『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十七冊 三条黒島遺跡・川西北七条Ⅰ遺跡』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団)
- 北山健一郎 2004.3『県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 田村遺跡』(香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土木部)

- 木下晴一・大山真充・吉田智・清水涉 1995.3 『陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成6年度 平池南遺跡』(香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター)
- 藏本晋司 1996.3 『陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成7年度 平池南遺跡』(香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター)
- 山元素子 2006.3 『一般国道32号線改バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 佐古川・彦田遺跡』(香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局)
- 山元素子 2008.3 『一般国道32号線改バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 住吉遺跡・渡池跡・北内遺跡・池下遺跡』(香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局)
- 藤好史郎 1990.3 『頬戸大樓建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 下川津遺跡』(香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡事務公団)
- 西岡達哉 1997.3 『国立善通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 旧練兵場遺跡』(香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター)
- 西岡達哉 1998.3 『国立善通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 旧練兵場遺跡』(香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター)
- 森下英治 1994.3 『旧練兵場遺跡 一平成5年度 国立善通寺病院内発掘調査報告一』(香川県教育委員会)
- 森下英治 1995.3 『旧練兵場遺跡II 一平成6年度 西因農業試験場内発掘調査報告一』(香川県教育委員会)
- 森下英治 1996.3 『旧練兵場遺跡III 一平成7年度 国立善通寺病院内発掘調査報告一』(香川県教育委員会)
- 塙崎誠司 1996.3 『旧練兵場遺跡IV 一平成7年度 西因農業試験場内発掘調査報告一』(西因農業試験場・香川県教育委員会)
- 木下晴一 1998.3 『旧練兵場遺跡V 一平成9年度 国立善通寺病院内発掘調査報告一』(香川県教育委員会)
- 秋川真一 2001.1 『旧練兵場遺跡 市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(善通寺市・財團法人元興寺文化財研究所)
- 秋川真一 2002.3 『旧練兵場遺跡 特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(善通寺市・財團法人元興寺文化財研究所)
- 海邊博史 2002.3 『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 旧練兵場遺跡』(善通寺市教育委員会)
- 海邊博史 2004.3 『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9 旧練兵場遺跡』(善通寺市教育委員会)



調査前風景 南西から



第1調査区 重機掘削風景 南東から



第1調査区 遺構検出状況 南西から



第1調査区 トレンチ全景 北東から



第1調査区 SD01 E-E'土層 西から



第1調査区 SD01 G-G'土層 南東から



第2調査区 遺構検出状況 北東から

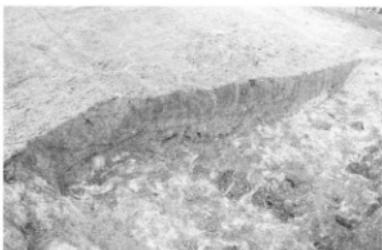


第2調査区 トレンチ全景 南東から

図版 1



第2調査区 SD01 A-A'断面 南から



第2調査区 SD01 D-D'断面 南から



第3調査区 遺構検出状況 北東から



第3調査区 ヒレ状遺構検出状況 西から



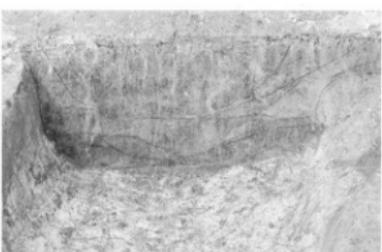
第3調査区 SD02 断割り⑤断面 北から



第3調査区 SD02 I-I'断面 南から



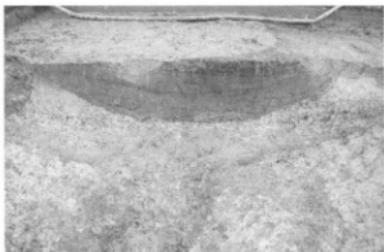
第3調査区 SD02 J-J'断面 南から



第3調査区 SD03 R-R'断面 南から



第3調査区 SD03 N-N'断面 南から



第3調査区 SD05 V-V'断面 南から



第3調査区 SD05 完掘状況 北から



第3調査区 SD05 X-X'断面 南から



第3調査区 SK02半裁状況 東から



第3調査区 SK09断面 南から



第3調査区 SD01 完掘状況 北から



第3調査区 全景 南から

図版 3



第4調査区 南壁断面 北から



第4調査区 西壁断面 南から



第4調査区 第1遺構面 SD01完掘状況 南から



第4調査区 第1遺構面 SD07・08検出状況 北から



第4調査区 第1遺構面 SD08 E-E'断面 南から



第4調査区 第1遺構面 SD08完掘状況 南東から



第4調査区 第1遺構面 SD09 K-K'断面 南から



第4調査区 第1遺構面 SD11 Q-Q'断面 南から



第4調査区 第1遺構面 SD13・14完掘状況 北から



第4調査区 第2遺構面 検出状況 南から



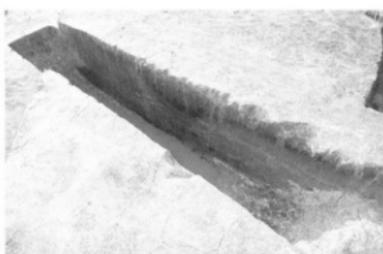
第4調査区 第2遺構面 検出状況 南東から



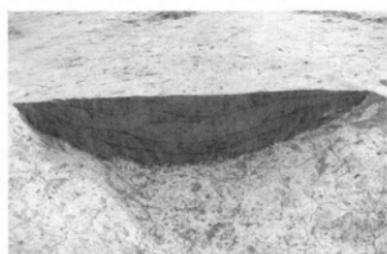
第4調査区 断割り② S-S'断面 西から



第4調査区 断割り④ U-U'断面 東から



第4調査区 断割り④ U-U'断面南側 東から



第4調査区 第2遺構面 SD19 E-E'断面 西から



第4調査区 第2遺構面 SD22完掘状況 南から



第4調査区 第2遺構面 SD20 H-H'断面 西から



第4調査区 第2遺構面 SD20 I-I'断面 南から



第4調査区 第2遺構面 SD19遺物出土状況 北から



第4調査区 第2遺構面 断割り⑩遺物出土状況 西から



第4調査区 第2遺構面 SD17北壁断面 南から



第4調査区 第2遺構面 SD24・25完掘状況 北東から



第4調査区 第2遺構面 完掘状況 南西から



第4調査区 第2遺構面 完掘状況 北から

図版 6



第4調査区 実測風景 北から



第5調査区 SD01・02検出状況 南から



第5調査区 SD01 A-A'断面 南から



第5調査区 SD02 G-G'断面 南から



第5調査区 遺構検出状況 東から



第5調査区 SD05 L-L'断面 南から



第5調査区 SD05 M-M'断面 南から



第5調査区 SD05 N-N'断面 北から

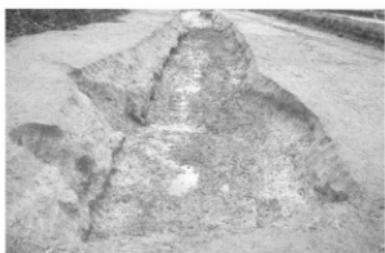
図版 7



第5調査区 SD05遺物出土状況 南から



第5調査区 SD05完掘状況 北から



第5調査区 SD05完掘状況 北から



第5調査区 SK01断面 南から



第6調査区 SD01検出状況 西から



第6調査区 SD01 B-B'断面 南から

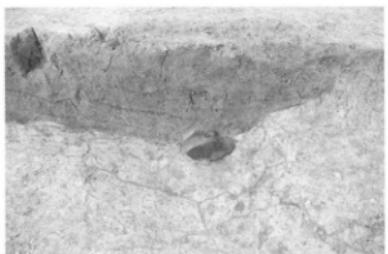


第6調査区 SD02・03検出状況 南西から



第6調査区 SD02 D-D'断面 南から

図版 8



第6調査区 SD03 F-F'断面 南から



第6調査区 中央窯遺物出土状況 南から



第6調査区 完掘状況 東から



第6調査区 完掘状況 北から



第7調査区 1トレンチ完掘状況 南から



第7調査区 2トレンチ完掘状況 東から

図版 9



第7調査区 1トレンチ SD01断面 西から



第7調査区 2トレンチ 遺構検出状況 南東から



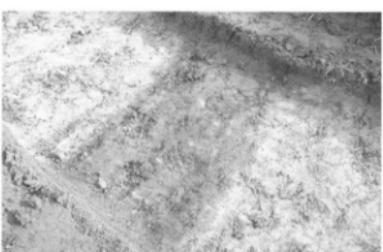
第7調査区 2トレンチ SD01断面 北から



第8調査区 1トレンチ 遺構検出状況 北西から



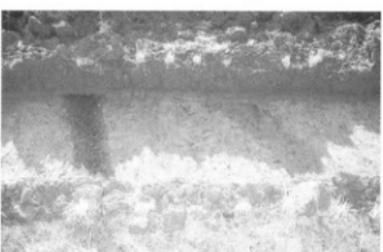
第8調査区 1トレンチ SD01断面 東から



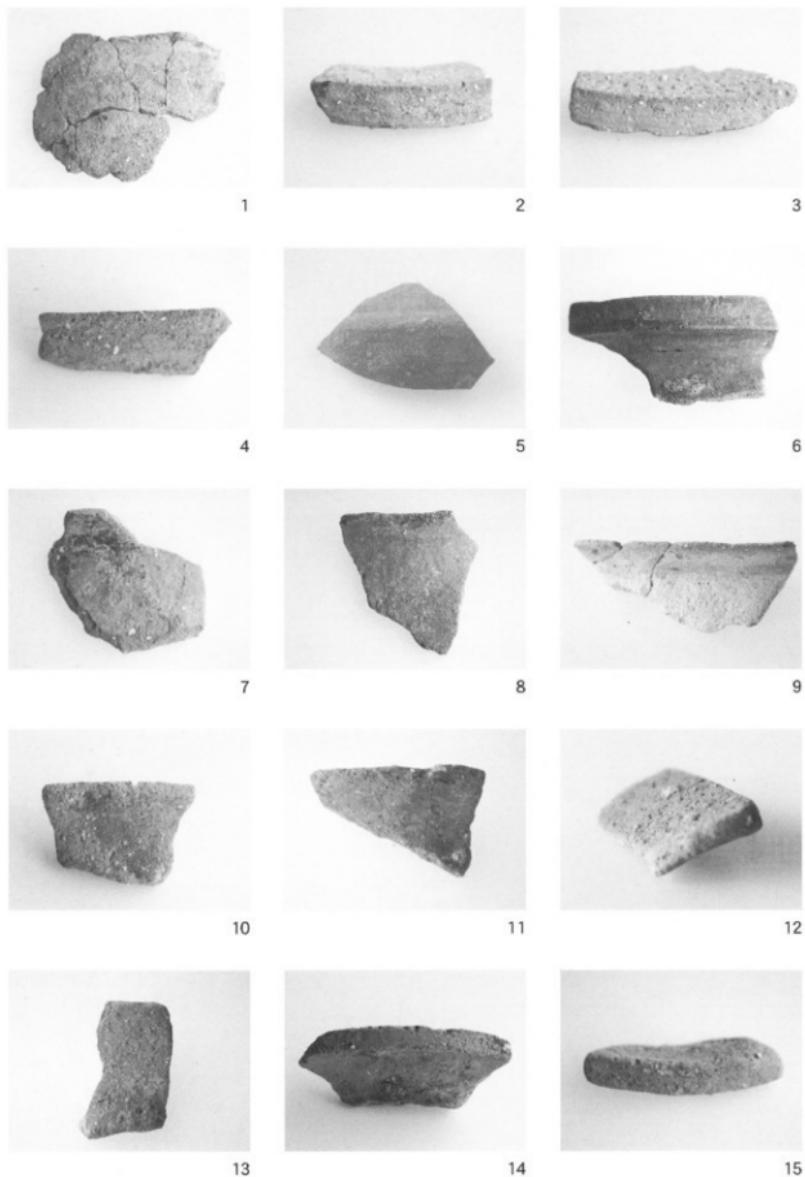
第8調査区 2トレンチ 遺構検出状況 北から



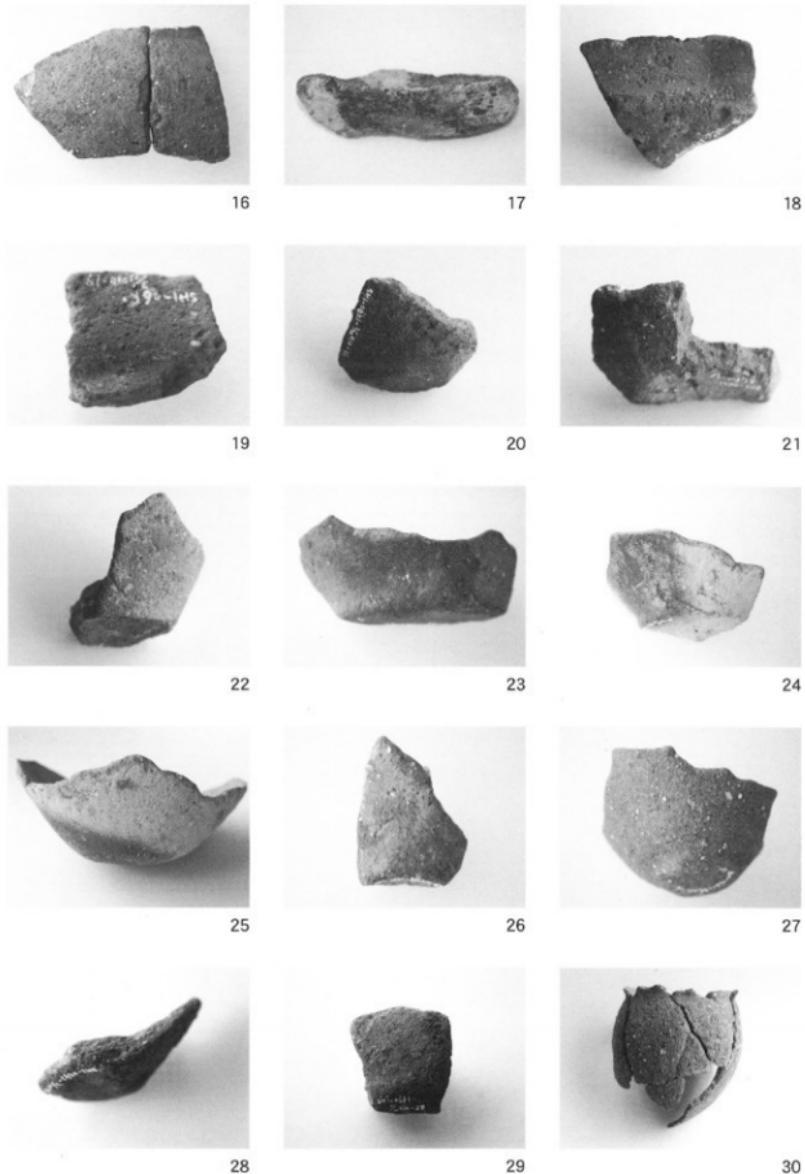
第8調査区 2トレンチ SD01断面 北から



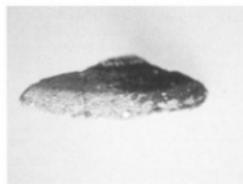
第8調査区 4トレンチ 遺構検出状況 北から



図版11 第1-3調査区出土遺物



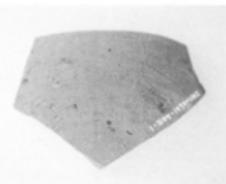
図版12 第3・4調査区出土遺物



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



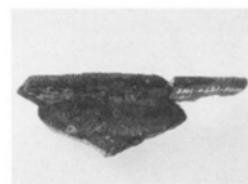
41



42



43

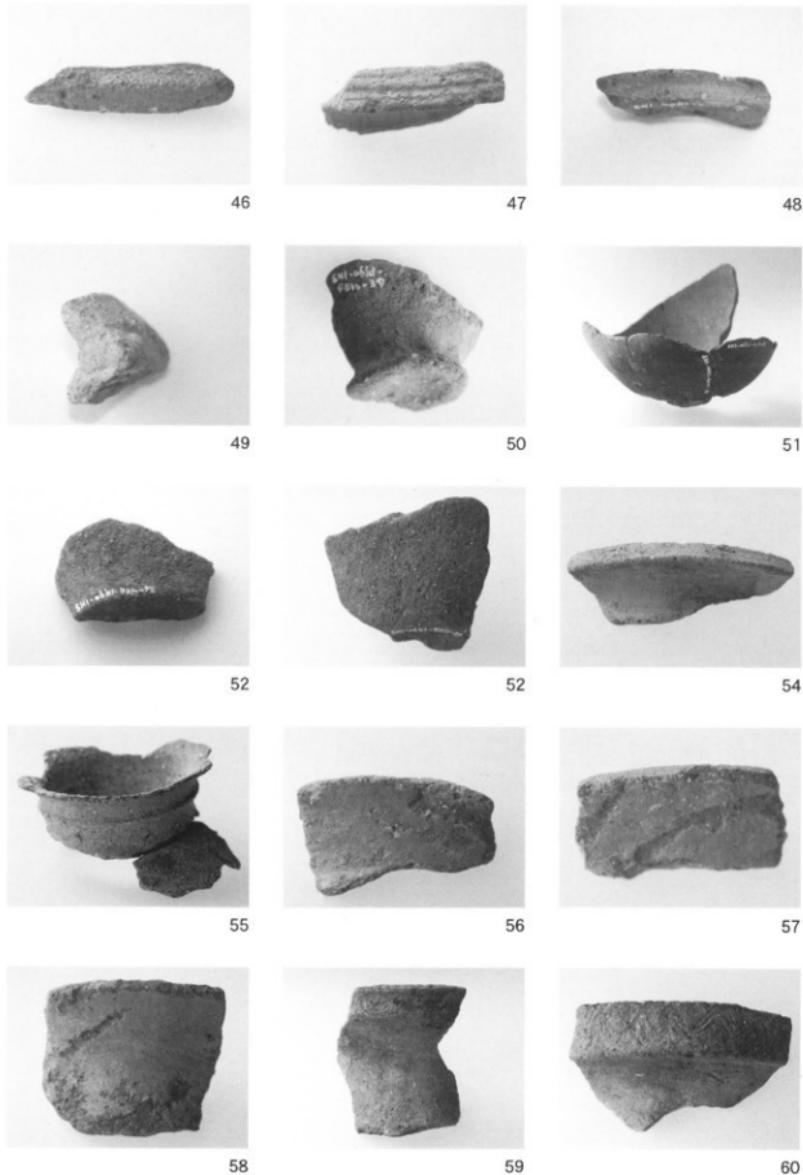


44

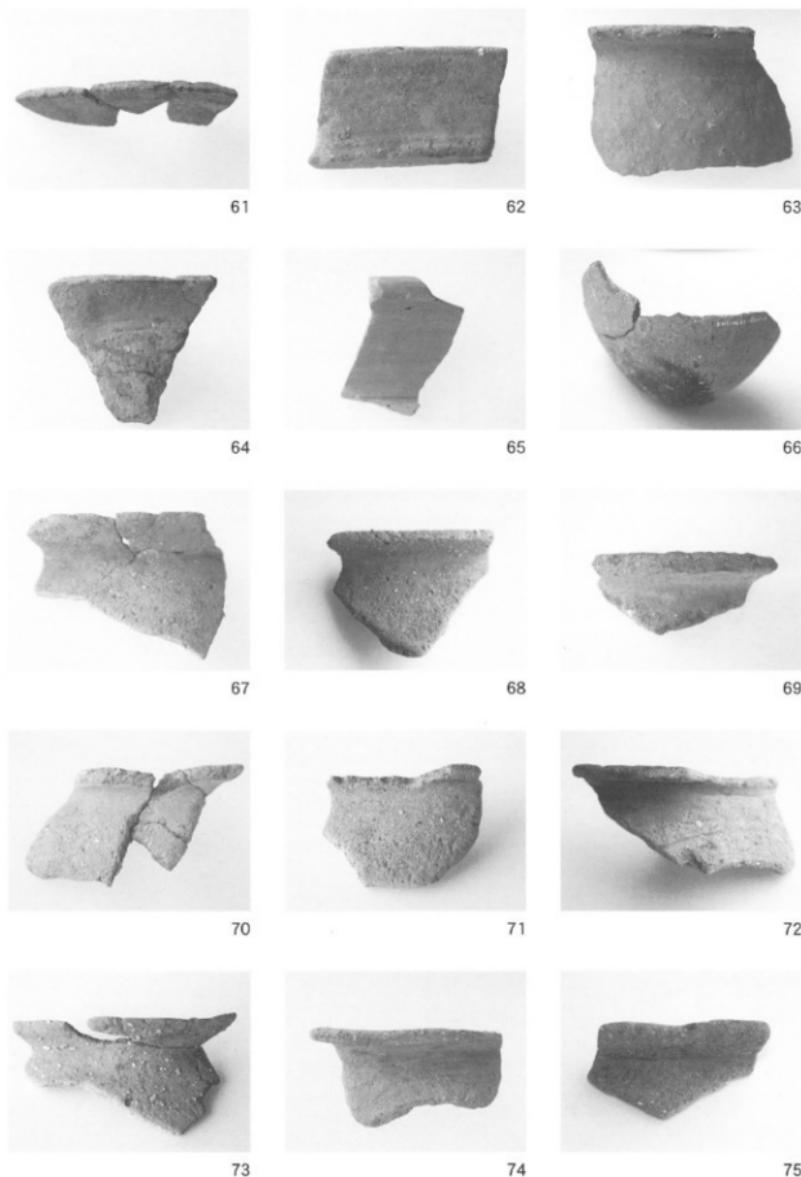


45

図版13 第4調査区出土遺物



図版14 第4調査区出土遺物



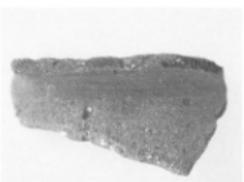
図版15 第4調査区出土遺物



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



89



90

図版16 第4調査区出土遺物



91



92



93



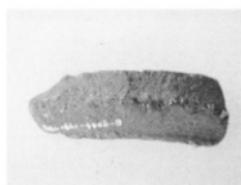
94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105

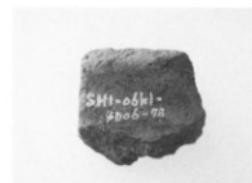
図版17 第4調査区出土遺物



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



118



119



120

図版18 第4調査区出土遺物



121



122



123



124



125



126



127



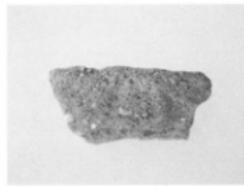
128



129



130



131



132



133



134

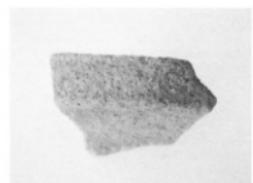


135

図版19 第4調査区出土遺物



136



137



138



139



140



141



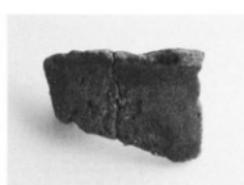
142



143



144



145



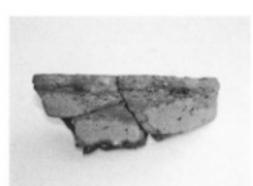
146



147



148



149



150

図版20 第4・5調査区出土遺物



151



152



153



154



155



156



157



158



159



160



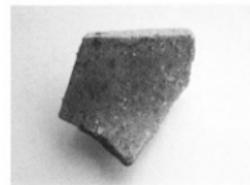
161



162



163



164



165

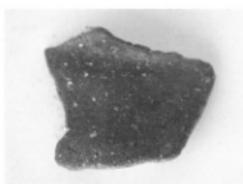
図版21 第5・6調査区出土遺物



166



167



168



169



170



171



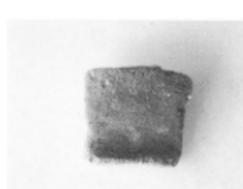
172



173



174



175



176



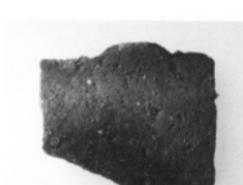
177



178



179



180

図版22 第6調査区出土遺物



181



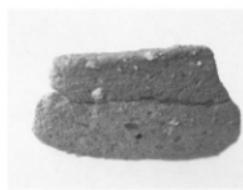
182



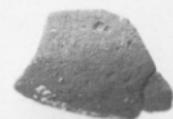
183



184



185



186



187



188



189



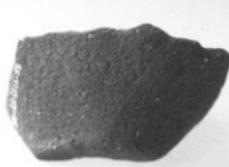
190



191



192



193

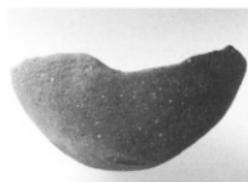


194



195

図版23 第6調査区出土遺物



196



197



198



199



200



201



202



203



204

図版24 第6調査区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しんでんはしもといせき					
書名	新田橋本遺跡					
副書名	ゆめタウン丸亀建設事業に伴う確認調査報告書					
卷次	2009.3	シリーズ名	丸亀市埋蔵文化財調査報告書	シリーズ番号	第4集	
編著者名	丸亀市教育委員会 教育部 文化課 近藤 武司・谷口 梢・北山 多佳子					
編集機関	丸亀市教育委員会					
所在地	〒763-0034 香川県丸亀市大手町二丁目1番20号 Tel0877-24-8822					
発行年月日	2009年3月31日					
頁数	例言・目次等	本文	挿図	表	図版	総頁
	12頁	96頁	64点	3点	283点	108頁
所取遺跡・地区名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)
		市町村				
新田橋本遺跡	新田町字橋本175番5ほか	202	0138	34度 16分 21~26秒	133度 47分 4~8秒	H18.11.27 ~ H19.1.26
所取遺跡・地区名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
新田橋本遺跡	集落跡	弥生・古墳	溝・土坑	弥生土器・土師器 須恵器		
要約	<p>本書は、新田町字橋本地区内で計画された大型ショッピングセンター建設に伴う新田橋本遺跡の確認調査報告書である。新田橋本遺跡は、弥生時代前期の環濠集落で著名な中の池遺跡の北側に位置する。先代池から延びる微高地にある。</p> <p>調査で確認された遺構は、大半が大小の痕跡であり、住居跡などの建物は確認されていない。発見された遺構を分析した結果、数期に分類することができる。構は、各時代によって配置や規模に変化が見られ、用途に差異があると考えられる。構の埋土に包含される土器片などから検討した結果、新田橋本遺跡の最も充実していた時期は、弥生時代後期から古墳時代後期にかけてと考えられる。</p> <p>特に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、大型の構が基幹水路として配置されていたようであり、構の底部に起伏を付け複雑な構造にすることで埋の機能を持たせ、それにより計画的な配水を行っていたようである。</p> <p>この構は、古墳時代後期までは改修しながら利用されていた痕跡がうかがえるが、それ以降は消滅の一途を辿る。</p> <p>基幹水路となる構への取水は、南の先代池付近以南と考えられ。遺跡は更に北部一帯に広がりをみせることが強く想定される。</p> <p>今回の調査区域内は、後世の改変によって旧状を留めていない部分が多く詳細まで確認するには至らなかったが、遺跡の所在は無いとてきた地域で密度の濃い遺跡を確認することができたことは貴重な成果である。</p>					

丸亀市埋蔵文化財調査報告書第4集

新田橋本遺跡

ゆめタウン丸亀建設事業に伴う確認調査報告書

平成21年3月31日

編集・発行 株式会社イズミ・丸亀市教育委員会

丸亀市大手町2丁目1番20号

電話(0877)24-8822

印刷 四国工業写真㈱